

## 年中行事

### はじめに

明和村の年中行事を概観すると、隣接する邑栗郡千代田村や板倉町などにも通じる東毛地方の特色を示す風習が目立つ。それらの中で目につくものを、いくつか取り上げてみよう。

本村は終戦まで旧正月をしていて、戦後から新正月になった地区もあった。年中行事の旧暦から新暦に移行する時期が、戦後の新生活への動きと重なったために、旧来の風習が急激に改廃されたと思われる。すでに行なわれなくなつて久しく、わずかに戦前の記憶をたどつて思い出してもらつた場面も多かった。

正月にセチと呼ぶ年始日が決められて、親戚の者が招き合つて年始札を交わす行事が戦前には盛んだつた。一族の結束を固める機会であつたが、セチと呼ぶ名称は東毛地方に顕著のように思われる。

正月の年神棚がヨシ（ヨシゴともいい、アシのこと）を編んで作るヨシゴ棚だつたことが明確に記録されたことは、大きな収穫だつた。年神棚は北上州などの山間部のように一枚板で作つたり、西上州や東上州のあちこちで、割り板を並べて編んで作つたりするが、ヨシを編んで作つていたことは、注目すべきであらう。棚というところの形に棚板が用いられる以前に、棒や竹、ヨシなどをいかにだやすのこの形に編んだ棚が先行したことを推定させる資料とならう。この地方では戦争前後から、板の年神棚を作ることが広まつたという。

年神棚のほかに、一尺四方くらいのヨシゴ棚を幾枚も作つて、各所に供え物を上げる敷き物にした家もあるというから、盆の時に盆棚に

敷くカツモ（マコモ）ござという敷き物との類似が考えられる。いずれも聖なるものを迎えるための特別の敷物として用意されたものであらう。

三が日の間、餅を食べない家例が目立つた。餅を食べるとオデキができるといつて禁じたりしたが、本来、餅は年神への供え物で、三が日の間の供え物が済んだ四日に、お棚探しをして下げてから、初めて家族が神の恵み物として食べることになるものであつた。供物の本来の意義を伝えていく風習といえよう。

四日に嫁が実家の親もとへ帰るナベカリの風習は見られなかつた。六日年といふことばを聞いていないことなども、東毛地方の特色といえようか。

六日の山入りは山の平坦地の土地がらを示して、屋敷の北側に茂る雑木林や竹林を、屋敷山・瀬戸山などと呼んで、そこに入つて仕事初めをする風習があつた。

七草ガユを炊く時、ここではナズナを七草と呼んでカユに入れることになつてゐる。セリ・ナズナと称される所が他地域では多いのに、当地はセリが少ない土地なのであらうか。

正月十一日の歎入れ行事がよく残つてゐた。クワイレ様またはサクイレともいい、正月の仕事始めの意識が感じられた。農家の台所に積み上げた俵の神を祀る小黒柱に、暮のうちには松やシメ飾りを縛り付けて置く。この松をクワイレ松として持ち、早朝暗いうちに提灯つけて親子が田へ出て行き、松を立て供え物をして、サクを三本きる。その場でお神酒を飲み謡をうたうという。きわめて素朴で丁寧な祀り方をしてゐた。クワイレ松として台所の俵の傍のサク神の松を持つて行

くことは、クワイレ行事と使神との関係を示すものとして注目される。北土州など山間部の山入り行事に相当する田畑の仕事始め行事として、大事な意味をもっていたことがわかる。

小正月のマユ玉飾りの時、マユの形のだんごの外に、綿の花をかたどっただんごを作ったというが、この地方が以前は綿を広く栽培していた名残りであろう。

小正月にオミタマ様のにぎり飯を十六個も作って、重箱に入れ、ウツギの枝を一本ずつ刺して仏様に供えたという。オニタマという家もあり、数も十二個でなく六個または十六個というのが多かった。六個は十六個を省略した形であろうが、十六の数は何があるのか、西毛などで十六マユ玉を作る風習とも通じていよう。

県内の他の地方では「ドンドン焼き」と呼び、道祖神を祀るとされ、正月の松飾りを焼く火祭りが、ここでは「ボンボン焼き」「オタキアゲ」と呼ばれて燃される。道祖神とは無関係となっているのも、東上州の特殊性を示している。

また、小正月にオシラ神や鳥追い。十八ガユの行事が出て来ないのも特色といえよう。

正月十六日に十玉様を祀り、ジオウガユやヨゴレ飯を炊く風習がよく残っていて、寺の僧侶の働きかけが生活化していることを思わせる。

正月二十日のエビス講に、カケブナといって、生きているフナ二匹をどんぶりに入れてエビス様に供え、あとで井戸に放すことは、魚がよく取れる水場の生活に基いて漁の神エビスを祀る信仰が意識されて普及した風習であろう。

ここでは、二十日正月が終い正月とされ、正月櫛(ヨシゴ櫛)を屋根へおち上げたり、屋敷鎮守に納めたりしたという。正月送りの儀礼で、年神の昇天を素朴な形で願ったものである。他の地域では二十八日を終い正月とするのよりも、一足早く正月を終りにした。二十日にわら仕事をするという行事は聞けなかった。

屋敷神のことを屋敷鎮守と呼び、必ずしも稲荷様を祀るとは限らないのは、北土州で屋敷稲荷と呼ぶことと対照的である。屋敷鎮守は木の宮、石宮が多く、わら製のお飯屋はほとんど見られなかった。春の二月下旬に祀るが、秋の屋敷祀りには祭らなかつた。春の豆を入れたスミツカリを煮付けて、ワラツトッコに入れて、屋敷鎮守に供えることは、東上州の特色を示している。なお、初午のだんごは、米の粉で小さく丸めてあんこにくりんだものを作る。分家の者が本家の屋敷神へお参りに行く例もあるというから、氏神的な性格もあつたのであろう。

三月節供の草餅を細長く円筒状にして、箸でたて、横につまんでヒシの実の形に切り、黄な粉を付けて食べるが、これをヒシ餅と呼ぶ。大きくヒシ形に切った餅を重ねてヒシ餅といってひな様に供えることは一般的ではなかつたという。

春先に雹祭り、または雹除けの行事が行なわれたのは、雹の被害が大きかつた土地がらを示すものであろう。春の彼岸のころ、若衆たちのアソビという遊ぶ日があつたことは、若者の労働力の大きさを示すものといえよう。

五月節供の前夜を「節供エ」と呼ぶのは、祭りの前夜を「祭りエ」というのと同じく、「宵マチ」のことで、「節供宵」ということであろう。祭りの前夜が重い意味を持っていたため、他の地域でいう「フキゴモリ」と同じ意識とされる。だから、ここでは、「フキゴモリ」の語は聞けなかつたのであろう。

六月一日に館林の富士浅間神社へ、初めて子供がお参りに行く「初山」の風習が盛んなのは、東上州の特色を示している。

夏を前にして各地で日を決めて厄神除けの祭りが盛んに行なわれるのは、流行する悪病を除けるための熱意の表われであろう。例えば四月十五日に南大島、六月二十八日に新里、七月十六日に川俣、七月二十八日に江口などと、それぞれの地区でそれぞれの祭りが展開される。

他地域における同じ時期の精進講などに通じるものを感じられる。

旧七月一日(現八月一日)のカマノクチャウの行事名を、ここではカマツバタと呼び、焼餅でなくてまんじゅうを作るという。

七夕にカツモ馬を作るのも、東毛地方の特色を示している。仏様がこのカツモ馬に乗って、盆においでになるといわれ、カツモ馬を飾った下をくぐることは禁じられた。七夕が終ると笹飾りとともに川へ流したが、屋根へ上げたり、下屋の軒下へ下げて置いたりしたという。

七夕にはよく雨が降るので「七夕アレ」とか「水神アレ」とかいいうのは、この日が雨との関係が深いことを示している。

先祖の御霊を迎えて祀る盆棚は、戦後に普及した祖立式のもの、多くの家々で設置している。盆の前方の左右や四隅に笹竹を立て、張り回す縄はマコモを用いる。盆棚の両側と後方の、三方を障子で囲う形式が見られたが、そこを囲って聖域にしようとする意識の表われと思われる。正月のシメ縄は年神棚だけなく、その座敷全体に張り回す風習が各地にあるのと対照的に、座敷の一面である南側だけに、盆棚が区画されるのはなぜであろうか。

この時期に紫色の小花をたくさんつけるミソハギが盆花と呼ばれて、笹竹に結び付けられたり、花びんに飾られたりする。ミソハギの小束をどんぶりの水に浸して、供え物に水をふりかけたりするのにも使われる。ミソハギは盆花として庭園や畑の隅などに栽培している家を見かける。

盆棚に数くマコモゴザは、一尺×五寸ほどの大きさに編んだものから、三尺もある大きいものまでさまざまであるが、「十王様のふとん」ともいわれ、盆棚の上一枚、下に一枚敷かれる例が多い。このマコモゴザは盆送りの時に、供え物を包んで家のカドや道端に送り出すのに用いられる。

盆棚の下には無縁仏・精霊様またはガキドン様などと呼ばれるものを祀る風習が見られる。子どもの仏ともいうが、家の仏のお伴に来

たものともいわれ、棚の上よりはやや略した形で、同じものを供えている。

座敷から庭へ降りる所の植え込みの隅に、無縁仏を祀る家もある。盆棚を立てた器にばた餅など供え物を入れて供えている。盆棚に供えた茶は庭へあけろともいわれ、庭に来ている精霊を想定して記っているのは、無縁仏の性格を知る手がかりとなろう。

盆に餅をつけて盆様に供える所もあり、大佐賀では供え物を分家から本家へ持つて行って供えるというのは珍しい風習といえよう。一族の祖霊を祀る意識があるものと思われる。

盆送り時、墓場から手を後ろに回しておぶらまねをして家まで迎えて来たり、家の入口や縁側の下に足洗い水を汲んで置く家があるのは、祖霊を遠来の客として生きているもののように迎えて接待する作法によるものであろう。

盆のノマワリが盛んな地域で、盆の十五日の朝、線香に火をつけて持ち、杖をつき草刈り籠か、ざるをしょって田畑を回り、先祖に今年の仕事を見てもらう風習がある。その時に稲穂やサト芋・綿(昔)などを抜いて籠に入れて来て、盆棚に供える。これらは盆送りの時に盆様のみやげ物として送り出す。籠のかわりに社日ザルを使い初めにする家もあった。

盆送りは、盆棚をこわして供え物をマコモゴザに包んで、ナス・キュウリの馬ととも道端に送り出して、そこで変わらや笹竹を燃やして送り火とする。最近、道端を汚すというので申し合わせて、家のカドや墓地の隅などで燃やすようにしている。送り火は盛んに燃やすが、迎え火はほとんど燃やさない。

送り火を屋敷の入口(カド)で燃やす時、そこに土まんじゅうを作る風習が、千代田村に見られるが、明和村でも千代田村に近い大輪の斉藤イツケが作っていたという。(二、三年前から止めて、現在はしていない。)ところが、利根川の対岸、埼玉県行田市下中乗(旧北埼玉郡

須賀村)などでは、各家々がカイドウ盆の土盛りを作つて、盆を迎えたり送つたりしていることは驚くほどであり、こちら側との交流の深さを示している。

盆の施餓鬼が盛んなことは、寺の積極的な働きかけにもよろうが、寺が各大字にあつて墓地と接し、人々の信仰心を集めているためである。無住の寺でも、盆の送迎のために墓参りが盛んで、人々が本堂にお参りして行く。寺によつてはエンマ様の地獄図などを掛図にして、本堂に展示して観せている。

盆の十六日には「十五様ノゴレ飯」を作つて、茶碗に十杯も盛つて仏様に供えるのは東毛地方に盛んな行事である。そのかわり、地藏盆や生き盆見舞いなどの行事は見られなかった。

八朔の節供に嫁は実家に「御節供」、「金一封」を持ってお客に行き、帰りに実家からお返しとして、オケイハクボタ餅をもらつてくる。オケイハクは「お経薄」のことで、おべつかを意味している。実家の親が娘の縁先の者に対して気嫌を損ねまいとする気持ちがよく表われていることばといえよう。

旧八月十五日の十五夜にボタ餅を供える風習があり、ボタ餅は仏事とは限らないことがわかつて興味深い。

秋祭りのころ、小宮祭りをする所がある。

明治四十二年ごろに神社合併で、集落にある小さい宮はほとんど合祠したが、合祠以前の小宮をイツケの神として祀る所があり、日を決めて重箱に赤飯を入れて行つて供えてから、互いにやりとりをして祝う。これをコビマチという所もあり、正月のセチビマチと同じように祀る所もある。

神無月に神々が出費へ出かけた留守居をするのは、オカマ様とエビス様といわれる、オカマ様は子供が十六人もいるので、留守居をするから、オカマのだんごを作つて供えるのだという。

十日夜の餅は新米でついで、昔は庭の稲東の上に供えたというが、

最近は何月が見える縁側に供える。そこに十五夜・十三夜に続く月夜の祭りという意識が見られる。また、カエル・蛇・その他の虫にわびるという、供養の意識も残っていた。なお、十日夜の餅を、新仏の出た家では、四十九個か、十個・十二個・十三個などと数は違つて、仏様に供える風習もあった。

秋のエビス講は百姓のエビス講だといひ、柿の実をよく熟させて柔かくしたものを、コウセン(香蕉)に混ぜてこねて作つた柿餅を作つて、エビス様に供えたという。

秋の取入れ後に、嫁婿を呼んで「オカマノダンゴ」を作つてご馳走するのは、東毛地方の特色ある風習で、神無月に神様が出かけて留守居をするため、ルスンギヨウだともいふ。

そのころ、五十五歳になつた親を子供が呼んで、「五十五ノダンゴ」を作つてご馳走する風習も、東毛地方に特色のある風習である。

秋の収納祝いとして、稲刈りが終つた晩に「カマアガリ」といって、鎌を洗つてカマド(ヘツツイ)に上げて米の飯を供える行事がある。

また、庭の干し物が終ると「ニワアガリ」といって、米の飯をオカマ様に供える行事がある。これらの風習も東毛地方に著しいものであるといえよう。

冬の暖かい日を「オヒナク」と呼ぶのは、栃木県野木明神との関係を示す語といわれる。そちらの信仰圏との関連を調べる手がかりとなる。

師走八日は一つ目玉のヤクジン神が通るので、目の多いメカイ(目龍)を竹竿の先にかけて立て、魔除けにする。この夜は静かに慎んで家の小者は早く寝るように「ネロハ」というのも東毛地方の特色である。小麦粉をこねて、「八日ヤキピン」という焼餅を作ることも顕著な風習である。

なお、師走八日を「コト始メ」と呼び、「奉公人の出替り」の期日に當つた。「出替りダンゴ」で転がし出せ」といって、奉公人にだんごを馳

走して、一月十六日のヤブイリまで暇を出したという。他の地域では二月始めを出替りにしている所が多いのと対照的である。

十二月十三日はススハキの日で、シノ笹二本をいわえてススハキホウキを作つて、家の中を掃く。もし、十三日に大掃除ができなければ、「ササイリ」だけでもして、すずを払うまねをしておこうという。十三日はススハキの日として、昔から行事化していたのであろう。

冬至に庭の真中に臼を逆さにして、その上に餅を供えてお天道様(太陽)に供える行事は珍しい。冬至別火といつて、この日にコウチ(組)ごとに集まつて飲食したというが、この日に特別の意義を認めていたのであろう。

なお、北上州の山間部に盛んな伝承のある「太子ガユ」を全く知らないというのも、平坦部のせいであらう。

正月の松飾りは平坦部で山林が少ないためあまりやらなかった。その代わりにシメ飾りを作るのに二日間もかかったというのは豪華なことであった。ここで「八丁ジメ」というシメ飾りは、横長の縄の八カ所に紙シデを垂らしたものをいい、年神・カマ神・屋敷鎮守・玄関など、特別の場所に張つたものである。他の地域で道の三本辻など、道切りとして立てる八丁ジメとは名称は同じでも別の性格のものである。八丁ジメを神主が作つてくれる所もある(川俣など)。

大晦日の晩に、ナスのがらを燃して「借金をなす」縁起を祝つたり、大きな木の根っこをカマドや火鉢にくべて、一晩中火を絶やさないようにする風習が、山村ならぬ平坦部にもあつたことは珍しい。

各項目の記述については、水系の上流から下流の方へと順に並べて、地区ごとの行事の類似や変化が比べて見られる便を考慮した。

(関口正巳)

## 一月 日

新正月 戦前は旧正月をしてしたが、終戦後から新正月になった。すてに対岸の武州(埼玉県)では新正月をしていたので、新正月に合わせて餅をついて、親戚に持つて行つた。(大輪)

モノビ モノビには、半日仕事をして、半日休んだ。一日、十五日には、番頭さんなど、半日仕事を休んでよかつた。(矢島)

年神 歳神様は卯の目をきらう。卯の日の六時をさかいにしてかえら。天へのぼるといふ。そのために、六時前にうどんでもこしらえて、歳神様にそなえろといふ。

歳神様が十二日もあると、長居だといつて早く帰つたほうがいいといつた。

長居をしているとき、口げんかなどするとうまくないといつた。(大佐賣)

年神は卯の日卯の刻に来て、卯の日卯の刻に帰るが、期間の短い方が汚れを起さないで、早く上がった方がよいといふ。(大輪)

初卯の日は年神が上がる日で、朝うどんを供える。

年神様は卯の日に上がるので、年神様の回りのオシメ(縄)は取つてしまう。(大輪)

年神はどういふ神といふことはわからないが、元日には恵方を向いてまっ先に拝むといふ。卯の日にはお帰りになる——六時には立つといふのでその前にごはんを供える。(江口)

年男 世帯主か長男が、年男になる。正月の三日間は料理も供え物も、飯番もふる番も年男がやつた。

三が日や年月様の上がる日、クワイレなどの食事は、年男が全部作つ

て供えた。(大輪)

一月一日の朝男衆が先に起きて、イロリに火をつけ、湯をわかす。

(梅原)  
年男は悴がやることになっている。大晦日の夜から四日までで、調理もする。(斗合田)

若水 朝早く井戸から、ツルツコケ(釣り小桶)で若水を吸み、手桶に移して家へ来た。その若水をコップに入れて神・仏に供えた。若水はかき回さない。(大輪)

若水は話には聞かぬが、習慣としてはなかったのではないかという。

(江口)  
朝湯 年男は夜中の十二時が過ぎると、朝湯をわかつて入り、身を清めて供え物をする。それから近所へ「湯がわいたよ」と迎えに行く。(大輪)

三が日の間は、近所の三々五軒が共同でふる番をして、朝湯をたてた。朝、暗いうちにふるをたてて、「お湯ができたからお出なさい」といって隣近所を呼んだ。近所からは何人でも呼ばれて行く。

町の銭湯屋(営業)でも朝湯をたてた。ご年始としてお祝い金を包んで行つた。以前は床屋にもご年始(金)を持っていった。ご年始を受けた方は横んで置いて見せびらかした。(大輪)

三が日は朝ふるをたてて、年男は毎日一番先に入れる。その家だけでよその家は入りに来ない。(江口)

初参り 元日は朝湯に入つて身を清めてから、暗いうちに鎮守様へお参りに行つた。長良神社や不動様にお参りしたが、神社には明らかにはついていなかった。(大輪)

恵方参りはその年のアキノ方の神社へ、もよりの者が話し合つて参拜に行くが、これは元日とは限らない。埼玉県妻沼の聖天様によくお参りに行く。(大輪)

年始 セチともいい、三が日が終えて四日から十五日ごろまでに、

親戚が話し合つて回り番で日を決めて、年始に集まった。番の家では、酒・きんぴら・きんとん・芋の煮こめがしなどの精進料理と、ザツコ(フナなど)の甘露煮等、できるだけのご馳走を作つて待っていた。

年始客は手ぬぐい一本、半紙二〜三帖を持って行くが、お互い様で、ご馳走になつて来た。セチの日が決まらない家はアイダ(間)の日に行つた。戦争中に絶えた。(大輪)

セチ招びは、正月うちに日をきめて村うちの親せきを招いてごちそうをする。互いに招き合うもので家が何日ときまつていて、手ぬぐいの手土産で「上」と書いた半紙の上のせて持つて行つた。(江口)

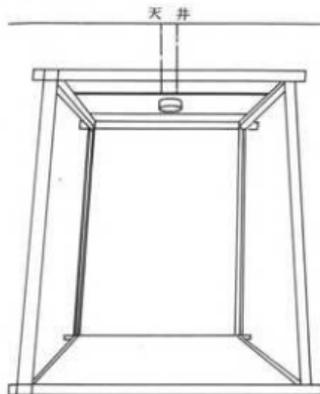
セチ(節)はカレイ(家例)ともいう。近しい親戚の人をよぶ。兄弟・叔父・甥・近しいことなど。だいたい四日から七日ぐらいの間、これは御馳走するだけで特別の行事はない。家ごとの年始日である。

(斗合田)  
寺へ二日か三日に檀家から年始に行く。大判(一升<sup>ノ</sup>升)の下の大きさの餅を二枚と金一封を付けて持参したが、戦後は米・うどんでもいいことになった。(大輪)

寺への年始は二日の日、オオパンという大きなもちを二枚かさねて半紙に包んで寺へ持つてゆく。(江口)

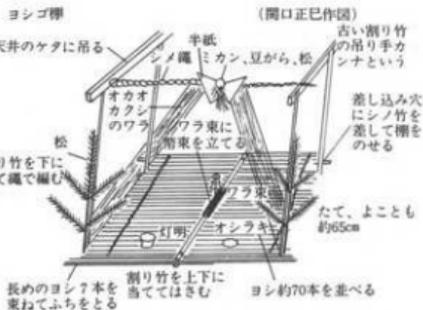
年神棚 真竹を三本に割つてたてに並べた上に、谷田川から刈つて来たヨシ(アシ)を並べて、三カ所編みにして二尺角の大きさに編んで棚を作つた。割り竹を三角形にして、両端に掛けて座敷の天井のネダに吊して、アキノ方に向けた。木で組立式の棚を作つて、こたつやぐらを逆にしたような形で、天井に吊るす家もある。オミタマ様も一緒の棚に祀る。踏み台を使つて供え物上げる。(大輪)

川から取つてきたヨシを二、三尺の長さに切り揃えて、年神棚を作つた。親骨はシノ竹をたてに三本渡して、横にヨシを七・五・三本に並べて、ほぼ真四角の形に縄で編む。左右にシノを折り曲げたカシナ(吊り手)を付けて、天井から吊るす。年神棚の奥に幣束を二本立てる。



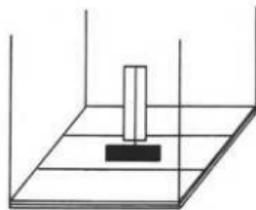
年神棚 (回転式) (大輪)  
(早川久美 作図)

大きさに編んだヨシゴ棚を、床の間・大神宮・エビス・仏壇・屋敷稻荷・便所・井戸・炊事場などに上げる家もある。そこにはシメ縄を二本ずつ並べ



年神棚は戦争前後から、板で作るようになった。戦前はヨシゴで年神棚を作った。(大輪)  
ヨシ(アシ)で二十×三十センチほどの大きさに編んだヨシゴ棚を、床の間・大神宮・エビス・

年神棚の四周をシメ縄で囲うが、七・五・三にわらを垂らして飾る。  
年神棚はアキの方を向けて、前方の垂らしたわらを左右に分けて中が拝めるようにする。前方のシメ飾りに、松と笹竹と豆がらを飾り付ける。年神棚に立てた二本の幣束は、年神様とお天道様だろうという。(大輪)



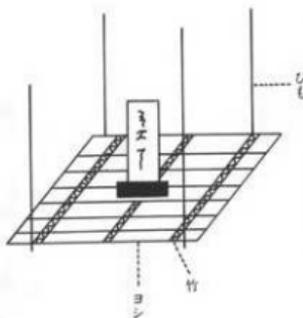
年神棚 (オタナ)

オタナは二尺角くらいに板を組みあわせてつくつていた。中に年神様のお札をのせる。(上江黒)

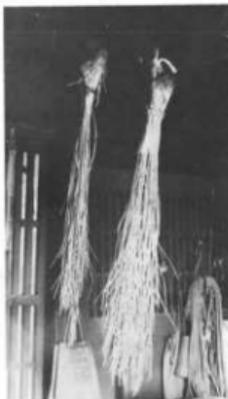
て編んだ特別の太いシメ縄を掛ける。ヨシゴ棚の上に供え物をオシラキ(木皿)に盛って供える。(大輪)  
正月棚は組立式の棚を一つ作って、心柱で天井から吊した。年神様もオミタマ様も一緒に祀つた。オミタマ様には飯を丸めてウツギをさしたものを供えた。(川俣)  
正月様の棚は暮の二十八日頃、ヨシと竹でつくる。竹を二つ割りにしたものを両側に二本ずつ並べ、そこにヨシをわたして二本ずつ結わいつける。二尺から二尺五寸四方くらいの大きさである。それを垂木から竹でつくる。棚は毎年新しくつくるが、このつるす竹だけは、同じものを使う。つるしたまわりに注連縄をはり、みかん、コンブ、豆殻、松を結わいつける。棚の一番奥には神主が切つた幣束をたて、その前に家中で一番大きい供え餅を飾る。正月様の棚は、大黒柱の翼の方角に東向きに飾る。  
正月様が立つまでは、男が料理し、毎日一番先に供えた。正月様が立つのは卯の日、卯の刻であるというが、確かではない。雲に乗って天に行くという。立つたあとも、オルスイ様といつて、お供えをした。(新里)



馬頭観世音  
お供え餅、オシラキ(飯) おサゴ  
(散米)を供える(正月)(大輪)  
(関口正巳 撮影)



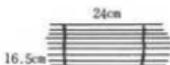
正月棚に飾った稲の株  
(南大島下)  
(阿部 孝 撮影)



馬頭観世音に正月の供え物  
「文政七申年」銘、道しる  
べを兼ねる(斗合田)  
(関口正巳 撮影)

ヨシゴの小箱

(各所へ供えるコダナ)



ヨシは奇数で差べて  
わら編で編む

ツツキゼン

(神棚、床の間に供えるコダナ)



供え餅やおシラキ(飯、うどんなど)  
を載せて供える

(関口正巳作図)

オタナはヨシでつくる。形は図のごとくで中央に天照皇太神のお札をのせる。四隅を紐でつる。これに供えるものは、お供え、お燈明、お茶などである。このオタナは、大正月からそのまましておいて年越し(節分)が終わると屋根の上にはおり上げる。どこの家でも男しが力にまかせてぶん投げたもんだ。(斗合田)

供え餅 年神様には大きい重ね餅を供え、ミカンを重ねる家もある。ほかの神々の所へある数だけ供え餅を上げた。(大)

供え物 元旦にはうどんを、七、八枚のオシラキに盛って、年男が神々に供えて回る。元旦の夕飯は小鉢に入れて、朝供えたオシラキの上に重ねて供えて回る。三が日の間(朝うどんの家が多い)くり返して供え物をオシラキの上に重ねていく。それを三日の夕飯を上げてから下げる。「四日の風に当てるな」という。四日の朝はオ棚サガシで、供えた物を集めて、焼いて食えといわれた。焼き飯と同じで、集めて煮て食うとうまかった。(大輪)

家例・縁起 正月三が日は餅を食ってはわるい、おできができるというので、朝うどん、昼ごはん、夕ごはんを食べて、餅は食べない。



シメ飾り (大輪)  
(関口正巳 撮影)



シメ飾り (玄間) (大輪)  
(関口正巳 撮影)



シメ飾り 松葉、大豆カラ、  
ミカンなど付ける (大輪)  
(関口正巳 撮影)



ヨシゴ棚 (年神棚)  
(下江黒 柴崎春雄家)  
(早川久美 撮影)



ヨシゴ棚 (年神棚) (南大島  
関根正万家) (早川久美 撮影)



正月のヨシゴ棚  
年神棚はヨシゴ (ヨシ) を編んで吊し、  
八丁シメをはり回す  
(千津井 長谷川清一家)  
(関口正巳 撮影)



年神棚 組立て式で、左前方に松を立てる  
(大輪 駒宮はる家) (関口正巳 撮影)



年神棚 (回転式) (梅原 恩田万吉家)  
(早川久美 撮影)



年神棚 (回転式) 松、竹、大豆カラ、ミカン、  
シメ縄で飾るヨシゴのコダナ、オシラキに供え  
物を載せる (大輪 松本陽三家)  
(関口正巳 撮影)



年神棚 (組立式) 普通に見かける形 (大輪)  
(関口正巳 撮影)



正月飾り  
(左) 年神棚 (右) 神棚のシメ飾り  
(奥左) 床の間 (奥右) 仏壇  
(千津井 長谷川清一家) (関口正巳 撮影)



正月のシメ飾りをした大神宮 (梅原)  
(早川久美 撮影)



年神棚の供え物 餅に幣束を立て  
供え餅の上に切り餅を重ねる  
(大輪 駒宮はる家)  
(関口正巳 撮影)



(左) 床の間 (右) 仏壇の供え物  
床の間に供え餅5組とツツキゼン (長いヨシの  
コダナ) にオシラキを載せて供える (正月)  
(千津井 長谷川清一家) (関口正巳 撮影)



屋敷鎮守の供え物 (正月)  
正月の重ね餅とオシラキに盛った飯をヨシのコ  
ダナに載せて供える (千津井 長谷川清一家)  
(関口正巳 撮影)



井戸の松飾り  
(大輪 早川久美家)  
(関口正巳 撮影)



納屋へ正月のシメ飾りと供え物  
ヨシのコダナの重ね餅とオシラ  
キをのせる。  
(千津井 長谷川清一家)  
(関口正巳 撮影)



便所のシメ飾りと供え物  
柱に小棚を付けオシラキに飯  
を盛って供える  
(大輪 早川水門家)  
(関口正巳 撮影)

(大輪)

奈良イッケはウドン縁起であった。三が日に餅を食べるとオデキができる。(田島)

矢島の石川某家では、元旦の朝里芋を焼いて、泣きながら食べるのを縁起としていた。(田島)

玉井家は雑煮家例であるが、夜はごはん、おかずと称してごほう、人参などを入れたスープをつくって上げた。(江口)

うどん家例の家が多く、男衆がやるもので、暗いうちにうどんをゆでさせられたも、女衆はゆつくり休ませる。三が日はもちを食べない。食べるとオデキができるといわれた。(江口)

斎藤家 餅は昔一俵もついたが三が日食えなかつた。朝うどん、昼・夜ごはん。餅を食べるとできもんができるといつた。

多田家 右同様について餅はついたらけれど食べなかつた。大みそかに、三日間食べられないから食べておけ、などといつて餅を食べた。

三が日間朝そばであった。なお三日間そうじをしない。

森田家 森田家では元日だけ餅を食べなかつた。やはりはれもんができていた。大みそかはけんちん汁。正月にはその残りものを食べた。風呂へも入らない。(下江黒)

柿沼家 大みそか夜御飯、飯五カンニチ(一日〜五日)朝そば、昼餅、夜御飯。その餅は、大みそかの晩は食べてはいけない。

青山家 正月三日、朝はうどんのウチイリ(にこみ)を神々に供え、家人はこれにノツペ汁を食べる。ノツペは、ごほう、にんじん、大根など入れた汁。餅は食べてもよい。夜は赤飯、ウチイリ。

佐藤家 三が日間餅を食べるとできもんができるといつて食べない。朝うどん、昼も。夜御飯。なお大みそかは年越しそば。

二十里 元日朝うどん、夜赤飯、餅は元日だけではできもんができるといつて食べない。

中村家 大みそか夜は赤飯。元日朝はうどん、ひもかわ、昼は赤飯を

あため、夜は飯。餅は三が日間食べるとオデキができる、という。

小林家 三が日間朝芋と餅を雑煮して食べる。夜は飯。

青山家 三が日間餅を食べない。できもんができるという。(以上下江黒)

禁忌 元日は不浄日なので、金でも出すなという。(大輪)

三が日のうちはホウキを持たないことになっていて、掃き出さない。この間は針を持たず、ハサミも持たない。(江口)

二 日

謡初め コウチ(集落)ごとに、祝いごとのあつた家や回り番の宿

に集まって、謡の練習をした。「高砂や」「四海波」「庭のイサゴは金銀の玉を連ねて敷き……」などと謡う。(大輪)

謡初めは一月二日にするの

が当り前で、一月十四日に葉師堂で練習をした。(大輪)

書初め 二日に子どもたちが書初めを書いて親せきも持って行き、お年玉をもらうのが楽しみだった。(江口)

コト初め 年始めで、寺へご年始に行く。(大輪)

仕事初め 二日にわら仕事

や縄のない初めなど、まねごとをちよつとした。

トロ口飯を食う家例は聞かない。(大輪)

二日には仕事始めとして少しでもわら細工をするものとして、俵の一俵くらい編むとか、なわないをした。



うたいぞめ 1月2日に集まる (大輪) (関口正巳 撮影)

またセチ（正月の招待）の用意として男たちがコブマキをつくった。コブマキの中にはシャケとこぼろ、にんじん、ごまめなどを入れた。のり巻きのようなものであり、切って出した。玉井家では小ブナを入れて、こぼろを一本入れた。（江口）

### 三 日

三ガ日 台所を掃いてもごみは片隅にまとめて置いてはき出さず、四日になってから棄てる家もある。（大輪）

三ガ日の間にトロロ汁を食べるといふことは聞いたことがない。（江口）

厄落し 佐野の元三大師へ厄落しに行く人もある。神主の所から人形（ヒトガタ）が来るので、家内中の者がそれで身体をなでて、けがれを移して川へ流す。人形は年三回、正月と天王祭り、秋祭りに流す。（大輪）

厄落しに佐野の元三大師に行く。（江口）

### 四 日

才棚サガシ 年神棚のお供え餅などは、四日の風に当てるものではないといつて、三日中に下げる。ヨシゴの棚はモノツクリの十四日に下げて飾り替える。（大輪）

四日から雑煮餅を食べる。朝、昼、晩とも食べる。

四日の朝は雑煮で、十四日まで朝は雑煮のわけだという。（大輪）棚ざらいで四日に三ガ日の間供えたものを全部下げる。オジヤはつくらない。ほしておいて食べたこともある。

山盛りにしておいて十四日に下げて捨てる家もある。（江口）

才棚探して四日になると供えたものを下げる。番頭さんが喜ぶ、というのは、供えたお供えが番頭に与えられるからであろうか。（斗合田）寺の年始 一月四日に寺から坊さんが親子で家々を回ってくる。お

供が「おめでとう」といつて付いて来る。土間（台所）に入って挨拶をし、座敷には上らない。大般若のお札、針、手ぬぐいなどが入っている和紙の包みを置いて行く。（大輪）坊さんの年始は四日、寺から坊さんが小マッチをもって年始まわりに来る。（江口）

ナベカリ いわない。（大輪）

### 六 日

六日年 聞いたことがない。（大輪・斗合田）

山入り 六日に屋敷山（セ

ド山ともいう屋敷ぞいの木

立）へ入る。それまでは入らない。（大輪）

山入りまで山に入つてはい

けない。山といつても屋敷近

くの竹林などである。御幣を

もつていつて木を伐つてくる。

（上江黒）

山入りは六日。山といつて

もろくな山はないから竹林な

どへしめのお飾りを飾つてく

る。（斗合田）

七草採り 夕方七草を採つ

てくる。七草はナスのこと

をいう。（大輪）

### 七 日

七草ガユ この日芋の先にメケイをつけて出す。鳥がとんできてと



屋敷山に囲まれた家（大輪）（関口正巳 撮影）

まるようにという。また「七草ナズナ、トウドのトリガ、日本の国に波らぬうちに、ストントントン」とナズナを切れという。これをお粥にまぜてたべる。(大佐實)

餅とナナクサ(ナズナ)を入れて七草ガユを作る。(大輪)  
ナズナは七つに葉が切れているのでナナクサという。ナズナをどんぶりの水に浸して置いて、出してから年神棚の下でバタバタたたいた。その時に、次の唱え言を三べん繰り返す。

「七草ナズナ唐土ノ鳥ガ日本ノ国へ渡ラヌヨウニ」

ナズナと餅を入れて、七草ガユをたいて食べる。

どんぶりの水に手の爪を冷やして切る。七日に爪を切るの、それまでは爪を切つてはいけない。(大輪)

おかゆに餅とナズナを入れて七草ガユをつくる。普通は味をつけないうが、塩を少し入れる家もある。ナズナやセリを叩く家はない、話に聞いただけである。(大輪)

七日がいはひとつで七草という草が田ンポに生えている。それをとつてきて食べた。(大輪)

七草がゆにはナナクサとよぶナズナを一つ入れればよい。前日に摘んで来る。ナナクサはまないたの上で切るが、その時「七草なずな、唐土の鳥が……」とうたう。(江口)

七草粥はナナクサという草(なずなでもなし、せりでもなし、はこべでもなし)をとつてきて白のお粥に炊きこむ。餅も入れる。が、せりは使わない。七草の唄はない。ナナクサはふだんの日には食べない。(斗合田)

## 十 一 日

クワイレ 一月十一日畑にクワイレをして松一本を立てオシメをつけてサクキリの真似をする。(大佐實)

さくいれは一月十一日の行事。これが正月になってからの仕事はじ

め。

十一日の朝、近くの畑へ行つて、松かざりをして、さくいれとて畝で三きくばかりきつてくる。これをするのは親方。野良仕度で行つてこの行事を行なう。

お松は、「さくいれ松」といつて、おかざりのお松をとつてくるとき、べつにとつておいたもの。それを畑にたててきた。

一升ますにオサゴをいれてもつていく。おそなえ(ひとかさね。それも暮につくつておいた)をもつていく。

畑にはお松を立ておがんで(そのとき文句をいう)そなえものをし、おみきをあげて、さくを切つてから、そこでおみきをいただいてくる。まずは、「ますますはんじょう」というので一升ますをもつていった。

この行事をすれば、この日から、百姓仕事をしてもよい、番頭をつかつてよいといわれた。(大佐實)

一月十一日をクワイレと言う。主人が御神酒とオサゴ(洗米)を持つて畑へ行き、畑に畝を入れてサクを立て、オサゴと酒をサクに供える。

酒は飲んで帰つてくる。(中谷)

畝立ては十一日、松かざりを下げたものを麦畑に立て、オオパンの餅を一枚と一升ますに米を山盛りにしたものを持って行き、オサゴ(米)をまいて酒をそそぎ、一杯のんで帰つて来る。麦畑に三きく、三尺ほどさくを切る。(江口)

クワイレ様は一月十一日にする。台所の小黒柱に俵神様のオシメを飾り付ける。(以前は台所の土間に米俵を積んで置いた)。松飾りする時に飾り付けて残つたオシメが、十本も二十本もあるのを勘定しないで、小黒柱に縛り付けて置く。「勘定できないほど(数知れないほど)物が取れるように、勘定するな」という。クワイレ松とヨシゴ棚を小黒柱に縛り付けて置き、供え物をする。

十一日の朝三時ごろ、クワイレ松とオシメ一本を持って、親子二丁四人で提灯ついで田んぼに行く。田んぼでクワイレ様に三がい松を立て、

半紙を切つてシメ縄に挟み、松葉・笹葉・コンブ・ゴマメ・豆がらなど五色をシメ縄に挟んで松に掛けた。ヨシゴの棚を前に置いて、その上やまわりを懸をすえてお神酒とおセチ料理（お供え餅・ゴマメ・キンピラ等）を供える。米を一升ますに一杯持つて行つて、お散米として一握り供える。主人公が歎を持つて凍った土の上を長さ五尺くらいずつ、サクを三本をきる。そこで立つたままお神酒を飲んで、謡を一つ謡う。

「四海波静かにて……」

持参したお神酒を汲みかわして、立つたまま酒もりをして、帰る。

（大輪）

「百姓のクワイレ」で、畑に行つて歎で三本のサクを切る。この時に畑に松を立てて、お供え餅・酒・魚を供えた。クワイレ松は正月に台所の柱にしぼり付けて置き、朝晩に餅などを供えたものを、畑に持ち出した。おみきは酒を二合びんに入れて行き、松に供えてからいただいた。そこで謡を歌つた。

「高砂や……このよの松も年古りて、元木をうつつて白にして、ウラムを切つて杵にして、つくぞや餅を、めでたかりけり」

この行事を「クワイレ様」と呼んでいる。（大輪）

クワイレ様は一月十一日で、その前までは、家で米俵編みや縄ないなどをして田畑には出ない。（大輪）

クワイレは一月十一日、歎をもつていつて畑にサクを切つて、松枝に幣束をつけたのを持つていつて立ててくる。その時、台所の作神様も持つていつた。台所では、四斗桶をさかさにして三階松を供え、またお供え餅なども供えておいた、それを畑に持つてゆくのである。（上江黒）

クワイレは正月十一日、しめこまめ、こぶなどつけて、畑に飾つて手敏でヒナツツアクに三本切つて拝み、おみきを一杯飲んで帰つてくる。（斗合田）

倉開き 倉にお供え餅とおみきを上げて、お参りする。（大輪）  
倉開きは一月十一日だが、別にしなかつた。倉に入れるほど取れなかつた。（大輪）

#### 十 四 日

小正月 いうけれど、別に行事はない。（大輪）

オカザリカエ 一月十四日に年神棚に畳一枚ぐらいの大きさの木の枝をしぼり付けて「オカザリ」をする。朝、餅をついてアラレやマユ玉にして、木の枝に縛り付ける。初市で買つて来たハナやオ宝ガシなども吊るす。アクトから刈つ切つてきたヤナギやケヤキの枝を使って飾つた。

竹を二つに割り、片方にハナ木（ニワトコ）を一芽ずつはぎつてさし、もう一方にハナをかいてさした「オカザリ」を十、二十本も作り、幣束の数だけ作つて（奇数にして）、幣束を立てた所に供えた。（大輪）  
オカザリカエは十四日、しめかざりを外し、まいだまやワタノハナを供える。ひと枝にさすもので、一本に三十個や四十個はついている。十四日にはワカモチをついて神に上げるが、これとは別に、綿で紅白のオソナエをつくつて神だなに上げる家もある。（江口）  
成り物の木 十四日のお飾り替えの時に、八丁ジメを取つて成り物の木の枝に下げた。（大輪）

オカザリのシメ（キリハギ）を柿の木などにしぼりつける。  
オカザリのわらはは上の方を切つて田植えの時に苗を束ねるのに使う。ある家では十五日のおかゆをたく時の燃料にする。（江口）

モノツクリ 十四日の午前中にモノツクリをする。米の粉一升も使わないが、こねてマユダマ・シラタマ・ワタノハナの形などを作る。マユ形をしたマユダマは十個から二十個くらい作る。それらをふかしてから木の枝にさした。垣根のケヤキの枝など、長さ三尺くらいの枝を利用した。その木の枝には色のついたお宝菓子（マユ・千両・小判



クワイレのシメ飾り 台所の柱にまとめて置く  
(梅原 恩田万吉家) (早川久美 撮影)



クワイレ松を納屋の柱に付けて置く(以前は台所に置いた)  
(大輪 早川久美家)  
(関口正巳 撮影)



クワイレ様 一サク切って角餅を供える(南大島 関根正万家)  
(早川久美 撮影)



クワイレ松 梅原 恩田万吉家  
土に立てゴマメ・餅・オサゴ  
(米) 線香を供える。  
(梅原 恩田万吉家)  
(早川久美 撮影)



クワイレ様  
オサゴ(一升ますの米)、大判餅の四隅、お神酒(松にかける)ゴマメ、コンプを供える。畑の土を三サク切る。  
(大輪 早川久美家)  
(早川久美 撮影)



クワイレ松を立て、畑を三サク切る(下江黒 佐藤家)  
(関口正巳 撮影)

神々に供えた。  
ハナカキナタがあった。(大輪)  
ハナ木で花の形を作って供えた。(大輪)  
ハラミバシは作らない。



マユ玉飾り

(左) 年神棚 (右) 神棚  
(奥) 床の間と仏壇 (千津井 長谷川清一家)  
(関口正巳 撮影)



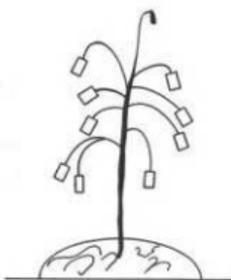
クワイレ松 庭木を代用した  
(大輪 島田誠作家)  
(関口正巳 撮影)

ハナギは家の裏に生えているニワトコを切って皮をむいて、削ってちぢめてかっこうをつけた。ほかに、館林の初市(一月八日)から、ハナギを買って来て供える家もある。竹を割って、先端にダンゴとハナを飾ったものを買ってきて、小さい

などを形どるも付けて、年神棚の前に吊るして、お飾り替えをした。(大輪)



マユマユ形の中にワタノハも見える。(千津井 長谷川清一家)  
(関口正巳 撮影)



神宮さまに上げた。菊の花のようなものはダンゴと一緒に上げた。アーボヒーボはつくった話もない。(江口)  
ハラミバシをつくったことも使ったこともない。(江口)  
道具の年とりはやらない。(江口)  
モノツクリは一月十四日。ハナ(菊の花の形)は売りに来た。繭玉は座敷にいつぱいになるほどたくさんつけた。形は丸い、繭形、繭の花などである。十四日に飾り、十九日か二十日にはずす。(上江黒)

モノツクリは一月十四日。マ  
イダマは繭形・丸い・繭の花形  
などあるが、十二、十六などい  
れない。これを檜の木の枝にさ  
す。えこの枝にもさすが、これ  
らをボクとはいわない。ハナは  
ハナ木(ニワトコ?)でつくる  
が、実際は柳が多い。売りに来  
た。十六花もある。堆肥場には、  
竹の枝に、木の枝を切ったもの  
をさして立てた。(斗合田)

アワボヒエボも知らない。(大輪)  
マユ玉のゆで湯を庭にまくことは  
しない。(大輪)  
初市でモノツクリのハナを買う。  
目なしダルマを買って来る。春蚕が  
取れると片方に目を入れ、秋蚕が取  
れると、もう片方の目を入れる。も  
し、秋蚕が外れると、片目だけのま  
まで、鎮守に納める。(大輪)  
ハナは館林の初市で買って来て大  
神宮さまに上げた。菊の花のよう

マユ玉 十四日に正月のお飾り(シメ縄)をはずして、マユ玉を木の枝にさして供えた。マユ玉は丸形が多く数は不定、赤く染めたものもある。綿の花のかわりにマユ玉で形を作って、三、四個も上げる。お宝菓子といって、小判形などの飾り物を、菓子屋や行商が売りに来た。(大輪)

マユ玉は柳の木やケヤキ・サトングの枝など、細かい枝の多い木にさした。マユ形・丸形・綿の花の形などを作った。ワタはかなり栽培していたので、円形に平たくしてくぼめた真中に丸くつまんだ形を入れて、綿の花を表わしただんごを作った。ゆでて木の枝にさしたマユ玉は大宮宮棚の前や大黒柱に縛り付けて供えた。大黒柱の上にはエビス・大黒が祀ってある。(川俣)

一月十四日はモノツクリの日である。米の粉で籾の形や綿花の形をしただんごを作り、大神宮さまに供える。むかしは綿花を栽培したので、綿花の形のだんごも作ったのである。だんごは、ケヤキの木の枝にさして神さまに供えた。この日は餅をつき、ごちそうを作って食べた。(中谷)

一月十四日に団子を作って年神様と各神様に供えた。米の粉を熱湯でこねて、ものつくりをし、丸いまゆや綿花の型などのものを作ってゆてた。このときオミタマ様へは重箱に十六個の団子を入れ、その団子一つずつウツギの木をさして仏様のところに供えた。あとでさげて、粥のようにして食べた。(南大島上)

若餅 時にはついたが、決まっていない。つく家もある。(大輪)  
オミタマ様 一月十四日のモノツクリの日におにぎりを十六個作り、重箱に四個ずつ四列に並べて、ウツギの箸を一本ずつさす。ウツギを割ったものなら二本ずつさす。それを年神棚に上げてオミタマ様に供える。米五合の重ね餅も二組作って、年神棚に上げておもちもあり、一重ねだけの家もある。供え餅は二十日正月に食べる。(大輪)  
オミタマ様は正月十四日に握り飯を六個作り、重箱に入れてウツギ



オニタマ  
重箱に16個入れて仏壇に供える。  
(千津井 長谷川清一家)

(関口正巳 撮影)



オニタマ  
14日ににぎり飯16個作りウツギ箸をさして仏様に供える。ヨシのコダナやニワトコハナも供える。(下江黒 佐藤敏夫家)

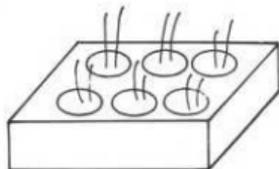
(関口正巳 撮影)

の箸をさして供えた。  
(大輪)

正月十四日のモノツクリの時にむすびを十六個つくって重箱に入れて、ひとつひとつに三寸位のウツギの枝をさした。このおむすびは一合ますで四杯の計四合で炊くものであった。これをオニタマといつて仏様に供えた。十六日に下げた。田島

十四日にオニタマとよおむすびを十六個つくり、これに一本ずつハナギを立てて仏さまに上げる。(江口)

正月十四日の夜、飯を煮てオムスビ十四個をつくり、これにハナギをさして供える。オニタマサマという。(千津井)  
オニタマは正月十



四日のモノヅクリに、ゴハンをたいて小さいムスビにしたものを十六個つくって重箱に入れ、十六個にハナギを一本づつさした。これは仏壇に供えた。(千津井)

オシダマは十四日の朝、御飯をにぎって六個、これに一本あるいは二本ずつうづぎをさして仏様に供える。(斗合田)

オタキアゲ 一月十四日の晩の行事。子供(男子)だけで行なった。コウチ(この)の行事。

子どもたちが、コウチ内の各戸を、「おかざりくんな」といってまわって、正月のお飾りとか、竹、わらなどをもらった。これを材料にして田を借りて、大小の小屋をつくった。火の見やぐらのように高い小屋をつくった。青年団員に手伝ってもらって小屋をつくったこともあった。

はじめにだましのほうに火をつけた。小屋の燃える火が、高くあがるほどいいといった。

これをオタキアゲといった。オタキアゲの火で、もちをやいて食べた。こうすると、風邪をひかないといった。(矢島)

一月十四日若衆が各家からオカザリをもらって竹を三、四本立ててしぼりつけて、夕方になると火をつけてオタキアゲをした。この火で餅をやいてたべた。ドンド焼のことだが、ここでは道祖神とは関係がない。これは適当な田をかきやる。(大佐置)

お飾り替えをして正月のオシメ(シメ飾り)を外して置くと、青年が集めて回った。田んぼ中に積んでオシメヤキをした。家から餅を一つでも二つでも持って行って、その火で焼いて少しづつ食べると、かぜをひかないという。ここでは道祖神祭りの意識はない。(大輪)

正月のシメ飾りなどは、十四日のオ飾リカエにはずして、自分の家

でまとめて燃した。灰は屋敷の回りにまいて、残り灰は屋敷鎮守に納めた。(大輪)

ここには松山が四、五十年も前にはあったから、正月のカド松も少しは立てた。しかし、ドンド焼きはしなかったし、道祖神も祀らない。(川俣)

道祖神は長良神社の北に祠があるが、お祭りはしない。結婚式の行列が村社へお参りに行く時に、道祖神の前を通ると、しつと心が強いので不縁になるといいうので、わざと遠回りをして行く。今でも婚行列は前を通らない。(大輪)

正月十四日の夜、正月のお飾りを子供たちがもらって歩き、集めたものを田の中で燃やしてオタキアゲをした。その時、餅を家から持っていて焼いて食べると風邪をひかないといった。(新里)

斗合田ではボンボンヤキといって十四日に何かやっているが、ここでは、戸毎におかざりのシメなどを塩で清めてオタキアゲして処理する。ドンドンヤキはない。(江口)

葉飾様 一月十四日は葉飾様のお祭り、嫁は一日早く里帰りをした。四月八日には葉飾様を祀らなかった。(大輪)

蚕神 蚕神をまつる行事はない。オシラサマということばも聞いたこともない。養蚕は大正から昭和の初年にかけて何軒か飼った程度で古いことはない。(江口)

## 十 五 日

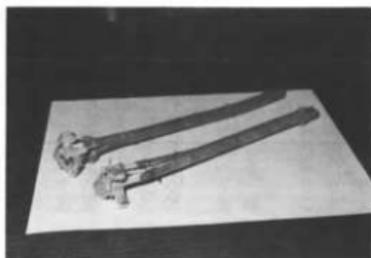
烏追いや水祝いの行事は、昔からない。(江口)

アズキガユ 元日から十四日まで、年神様におみきや食べ物をお供えた。うんとたまったのを十五日の朝下げて、小豆がゆをつくり、みんな入れてかき回す。これをゴハイ(御幣)だからといって食べた。(大輪)

小正月のあずきがゆは熱くても吹いて食べてはいけない「吹かずの



カユカキ棒  
15日後は年神様からエビス様へ移される。  
カユが多く落ちると不作という。(大輪)  
(早川久美 撮影)



カユカキ棒  
ニワトココ先端を四つに割り、若餅を十文字に  
挟み、十五日カユをかき回す。(大輪)  
(早川久美 撮影)

き、カユカキ棒にオオバンをはさんでかゆの中をかきまわし、それをトボグチ(玄関)に上げた。(江口)  
嫁の年始 一月十五日に嫁は大判の餅二枚を半紙二枚で包み、水引を掛けたのを持って、実家へお客に行く。(大輪)  
十五日は嫁の里帰りの日。嫁は大判の餅(一升ますの大きさや一尺五寸角の大きさ)を二枚持って手ぬぐい一本も付け、実家へご年始客に行った。嫁に来た一年めには行く人が多い。長い人で三年間も行く。ナベカリ行事はしない。(大輪)  
正月十五日には、嫁に行つた娘が里帰りするユサンビ。オオバン(一升ますの大きさの餅二枚)餅を持って行く。(梅原)

#### イモ祭り

旧千江田村某コウチでは小正月に、一戸一人ずつ出て宿に寄り、一日中里芋だけ食べて過ごした。里芋は切らないで丸ごとゆでたものを食べる。(川俣)

休む日 正月の十五、六日はカギツツルシも休む日だから何もするな、といった。(上江原)

まいだま外し 十五日にまいだまをとる。十六日の風に合わせるなといわれる。(江口)

#### 十 六 日

十王様 盆と正月の十六日には、寺で地獄の十王様の掛軸を飾るので、お参りする。

家では「ヨグレ飯」といって、しょうゆ飯や五目飯、または小豆飯を作って供える。(大輪)

一月十六日は、白粥を炊いて食べた。これをジオウ粥という。その後寺にお参りに行った。(斗合田)

かい」と言った。わたの花や稲の花を吹き落すから。(須賀)

十五日がゆは小豆と塩を入れたおかゆをつくり、十五日の朝食べる。食るとき吹いて食べると秋大あらしがあるといわれる。(江口)

正月十五日の朝、小豆粥をつくった。この粥は吹いて食べてはいけない。小豆を煮た湯は家のまわりにまいた。盗難よけという。(千津井)

十五日粥は小豆粥。ふいて食べると稲の花が落ちるといって禁じられた。(斗合田)

カユカキ棒 ニワトココ先を十文字に割って、餅を挟んだカユカキ棒で十五日のおかゆをかん回した。二本一組にして、稲荷様に供えた。(大輪)

十五日の朝、かゆをたいてカユカキ棒でかん回した。そのかゆを食べる時、熱くとも吹かずに食べる。米の花を散らかしてはならないからという。(大輪)

カユカキ棒 ハナ木(ニワトコ)でつくり、十五日の小豆がゆのと

一山様 十六日に松林寺にあるイツサン(一山)様にお参りした。寺には「血の池地獄」などの掛軸が何枚もあって、掛けて見せた。ご飯をこぼすと、茶碗から火が出る絵などがあつた。(大輪)ウマヤコイ 正月と盆の十六日には馬屋肥いを出した。手もつことにせて、肥やし場(堆肥小屋)へ出した。(大輪)十六日は特別に仏さまに供えものをすることはない。墓参りもしない。

この日には既履肥を出した。奉公人はこのあと休みになった。(江口)

十 七 日

馬頭観音 一月十七日に一山様で余興に芝居などをしたこともあつた。最近はいうだけで行かない。(大輪)

十 八 日

十八日がゆ ここでは十八日がゆはしない。(江口)

十 九 日

水神祭り 一月十九日が水神さまのまつり、江口の中が四コウチ(組)に分かれ、各コウチに水神さまがあり、コウチ毎のまつりである。当番が三軒ずつで、その中の一軒の家が宿になり、ごちそうをつくってお祝ひした。水神さまにお灯明とごちそう、オサイ銭を上げてやる。

去年(昭和五十五年)、水神さまを諏訪神社に納めた。(江口)

二 十 日

エビス講 エビス講は一月二十日と十月十日にする。

正月のエビス講は、商人のエビス講で、農家ではそれほどさかんにまつらない。

秋のエビス講は農家ではさかんに祝う。膳立てをして、ご馳走を供える。エビス様と大黒様にあげるといので、二膳つくる。米のめしをして、おてんこもりにしてあげる。ほかにけんちん汁、酒やサンマもあげる。生きたさかな(かけおな)をあげるともいいう。エビス様に供えたご馳走は、うちのものが金をだして買って食べる形をとった。(大佐賀)

エビス講は一月二十日。この日は、お金かふえるようにと、餅にお金を入れて、エビス様にあげた。米のめし、酒もあげた。このときは、こまかいぜにをたんとあげるといふ。(大佐賀)

エビス講は都合の人が正月に祀り、農村では十月に祀るといふ。エビス・大黒を座敷に出して、茶ぼ台に載せて飾る。エビス様の掛軸も掛ける。白い飯にケンチン汁、尾頭付きのサンマを膳に載せて供える。この膳をエビス膳とはいわないし、たて膳にもしない。(葬式の際に仏様には飯と汁を左右逆にした左膳を供える。)

家族は財布の口金を開けて供え、お金をふやしてくるようにお願ひする。

エビス様が出かせぎに行くとはいわない。(大輪)

エビス様の膳を下げて食べる時、「二万円て買う」「二千万円で買います」などと、いくらで買うといつて下げる。主人が「おみきを先に買うべや」といつて下げる。

エビス様に上げた物は、未成年者は食べるなどとはいわない。(大輪)館林市代官町の長良神社境内にエビス神社があり、初エビスにお参りに行く。戦前は小室翠雲の描いたエビス・大黒の掛軸が五十銭で買えた。そこでは酒も飲み放題で、酔いつぶれるほど飲めた。(大輪)

恵比須様に供えものは箕を使用し、その中に供えた。油揚げ寿司を供えたが、かんびょうを用い、芯はゴボウであった。この時「生きている魚を供えるものだ」ということで、生きた魚を二、三匹供えた。(新里)



年神送り  
ヨシゴ棚(年神棚)を二十日正月の後、物置の  
屋根に上げる。(下江黒 柴崎済家)

(早川久美 撮影)

年中行事で箕を使う時は、恵比須講のとき恵比須、大黒の像をこの中に飾る。

鎌あがりのとき、鎌を、この中に並べて釜の上に飾る。

十日夜、十三夜の供へ物も、この中に飾ることになっている。

結婚式で嫁が来た場合、門で箕でもってあおぎ込むまねをしたり、杵でつき込むまねをし

た。箕を売りに来るところは、足利の西が本場であった。直しにもそこから来た。(新里)

正月のえびす講は、ごはんにサンマをお膳にのせてふつうの供え方をする。またカケバナといって生きたバナニひきをどんぶりに入れて供える。これは翌朝井戸の中へ放す。こうすると井戸の中の虫をとるといふ。フナは板倉ザッコといい、板倉の方から売りに来た。

あるだけのお金を一升ますに入れて供える家もある。お膳はタツ膳にはしない。(江口)

エビス講は、一月二十日、夜、尾頭つきを供え、けんちん汁、俵がとれるように稲荷ずしなどつくる。十月の方が盛大にやった。(上江黒)

えびす講は一月は商人のえびす、十月は百姓のえびすといつて、一月に店に買物に行くとか景品をくれた。そばをうって食べる。膳は二膳つくって供える。尾頭つきをつける。身上を一升ますに入れて供える。「小正月の臘玉は二十日の風にあわせるな」といって、その前に

外す。(斗合田)

二十日正月 お正月が終わると、正月棚を屋根にぶちあげた。

二月のとしとりが終わってから、正月棚を屋根へぶちあげる家もある。(矢島)

竹で歳神様の棚をあんだがこれをウダツといった。歳神様の棚は座敷につるした。この棚を、一月二十日にはずして、束ねて、屋根にほうりあげた。これを「ウダツをあげる」といった。(大佐賢)

一月二十日は、二十日正月といつて、正月のおわりだといった。二十日正月には、しるこをつくって、朝でも、昼でもしるこを食べた。

二十日正月まで、もちがあればいいといった。(大佐賢)

二十日正月の一月二十日に年神棚を下げて、屋敷稲荷様に納める。屋根に投げ上げる家もある。(大輪)

二十日正月は一月二十日、初めて神仏へおしる粉をこきえて上げたり、食べた。小豆を煮て、供え餅を焼いて入れておしる粉を作った。わら仕事はしない。(大輪)

二十日正月に年神様のお供え餅を下げて、汁粉にしてエビス様に供える。朝エビス。(大輪)

エビス講に、下げたお供え餅を焼いて供えた。二十日以後は大麦のヒキワリ飯になった。(大輪)

## 二十三 日

三夜様 一月二十三日、千代田村の三夜様がとくに正月には盛つたのでお参りに行った。嫁とは限らず年寄りも行く。目の神。(大輪)

## 二十五 日

天神様 板倉町の天神様へお参りに行った。三里ぐらいの道を、わらじばきで弁当持ちで、連れ立って行き、お参りして帰ってくるだけ

だった。字が上手になるという。

天神講はしなかった。(大輪)

天神講 三月二十五日のわけだが、学校の卒業式後の春休みにした。小学生が金や米を持ち寄って、年上の学年の子供の家を宿にしたが、この後、集会所でした。母親が来て手伝い、餅をついたり、赤飯や五目飯を作ったりする。天神様にお参りして来たら、昼飯を食べた。

(須賀)

天神講は正月二十五日、高鳥の天神さまの日には、昔は小学校が早じまき、または休みになった。子どもたちが男女一緒に組をつくって宿をさき、出し合いで子どもたちが料理をつくって食べて泊る。大さわぎで夜具を用意したりした。また「正一位高鳥天満宮」という習字をした。お参りとは別である。(江口)

## 二十七日

不動様 一月二十七日に、長良神社の境内の不動様のお祭りをりっぱにした。戦前は浪曲師を年間雇っておいたので、毎月のように盛った。(大輪)

## 二月

### 次郎の一日(二日)

次郎の一日 いわない。(大輪)  
年かさね 年まわりの悪い人が二月一日にもう一度年をとり直すことは、話にも聞いたことがない。(江口)

### 節分(三日)

年取り 節分のことをいう。「大根の年取り」などとはいわない。(大輪)

トシトリには、マメガラにイワシの頭をさして「畑の虫の口を焼き申す……」などと言いながら唾をつけて焼いた。豆はホウロクで炒った。年男が豆まきをした。いちばん最後は便所であった。

この日は、冬至につくったユズで福茶をのんだ。「今年もユズウがきくように」という意味である。

なお、焼いたイワシの頭はカガシといって魔よけになるとトボグチにさした。(田島)

年越しは二月三日。冬至につけておいた袖子を食べる。融通がきくように。豆は年の数だけ食べ、とっておいてスミツカリにも使う。豆投げは、家人がみな帰らないうちはしない。外へ出たものが鬼になるというところ(田島)がある。(上江黒)

豆まき 節分まめまき。これで年があけるといった。

大豆をほうろくでやいた。主人がやく。豆をいりながら唱えごとをする。田畑の虫の口をやくという意味のことをいった。このとき、イワシの頭を豆がらにさしてやいた。これを歳神様のところと、とぼ口のところに一本ずつあげておく。虫のやくはらいのためという。豆まきは、はじめは家の中をまき、あとで外へまいた。歳神様のところからまきはじめた。まめまきは、年男(主人)がする。



節分のヤカガシ 年神棚に上げて置き、後にトボグチにさす。  
(梅原 恩田万吉家)  
(早川久美 撮影)

しまいに、稲荷様（屋敷神）や神社へ行って豆まきをする家もある。もとは、神社まで行ってままきをした。

厄神を送りだすといって、自分の年齢の数だけの豆を、息をふきかけて、紙にくるんでもって行って、辻へ捨ててきた（送りだした）。

節分の日には、歳神様にあげておいた豆をとって置いて、スミツカリをつくった。

冬至につけておいた冬至ゆずを、この日だして、おちやぞつべとして食べた。うち中の者が食べた。

ボクをきいているときには、としこしをしなかつた。（大佐實）

節分は旧暦正月でやつた。

豆をいれる時は、土ほうろくで豆がらを燃している。豆は少しずつ何回にも分けている。（大輪）

いり豆を一升ますに入れて、「福は内」二回、「鬼は外」一回唱えて豆をまく。（大輪）

「福ハ内、福ハ外、鬼ハ外」と唱えながら、戸を明けて置いて豆をまき、すぐ戸をたてる。年男と二人で豆をまいて回る。

回る順序は、年神・大神官・仏壇・エビス様・オカマ様・屋敷稲荷・井戸神・物置・便所を最後にする。その後、鎮守様へも行ってまいりた。（大輪）

節分の豆は、豆ガラを燃してホウロクでいる。いった豆は一升ますに入れて神棚に上げておく。このとき、イワシの頭を豆ガラの茎にさし、ツバキを吐きかけて焼いて、一つは大神宮さまのところにかざり、他方はトボグチに厄神除けとしてかざる。

豆まきは年男がする。先ず恵方に向けてまき、どの部屋もまわるが、「福は内」で障子を明け、「鬼は外」で障子をしめる。

年越イワシといって買って来て食べる。（江口）

節分の豆はよくいって、年神様のオタナに供えておいてから投げる。順序は、座敷の年神のオタナ、大神宮様、夷様、ウジガミサマ（屋敷



ヤキカガシ（大輪）  
（関口正巳 撮影）

神、井戸神、蔵などである。豆投げがすむと年をとったという豆を拾って自分の年の数だけ食べる。豆は取って置いてスミツカリに使う。柚子を冬至に丸の

ま味噌づけにしておいて、福茶を飲みながら食べる。（斗合田）  
ヤキカガシ 豆がらのジクにイワシの頭をさして、豆をいれる時に、ツバキをかきながら焼き焦がす。その時に、「農作業の害虫の口を焼く」といって焼く。

ヤキカガシは二本こさえて、一升柄の豆と一緒に入れて、年神様に上げて置く。豆まきが終わると、カイドにおつ立って来た。悪魔除けで、こちらへ入るなという呪いである。カイドの門の向かって左に立てる。右へ立てると上からきた悪魔が入るといい、左へ立てて追い出すという。

母屋の入口の上に鬼神様の絵馬札を貼って置く家は、そこへヤキカガシを二本揃えて上げておく。ヒイラギはささない。（大輪）

イワシの頭を大豆の木の枝にさして、カドグチにさす。（大輪）  
節分に豆の茎に、いわしの頭をさして二本作る。これを唱えごとを

いいながら焼く。「百日の虫を殺してくれ」といいながら焼いた。二本とも年神様に供え厄神が来ないようにと願った。その後、入口にさしておいた。（南大島下）

福茶 豆まきが終ると、豆を入れた福茶を飲みながら、家族が自分の年の数だけ豆を食べる。大人は十を切り捨て、はしの数だけ食べ

る。冬至の時にユズをみそに漬け込んだ冬至ユズを出して、節分のお茶受けに食べる。(大輪)

豆 取って置いて、夏の雷の時に食べると、雷が落ちないという。(大輪)

正月棚はずし 節分の年越の晩に年を取れば、夕飯後、正月棚はずす。次ぐ日の風に当たらないようにする。はずした正月棚は、クス屋(草ぶき)の表側の屋根にぶち上げた。幣束は床の間へ納めた。(大輪)

立春大吉 坊さんが年始の時に回って来て、お札を配ったこともあ  
る。(大輪)

### 初 午(午の日)

屋敷稲荷 「屋敷鎮守」といい、五色の色紙をつないだ旗に「奉納正一位稲荷大明神」と書いて笹に付けて供える。スミツカリと初午のダンゴを、ワラツトッコに入れて供える。

スミツカリは節分の豆の残りに、オニオロシで大根をついておろし、ニンジン・油揚・酒粕などを混ぜて煮つけて作る。(大輪)  
節分後の午の日に屋敷鎮守を祀る。屋敷鎮守は稲荷様が多い。木の



初午祭り  
屋敷鎮守の前に「奉納正一位稲荷大明神」の紙旗を立てる。  
(梅原 恩田万吉家)



初午  
屋敷稲荷にシメ縄をはり、紙旗を立ててワラツトッコに入れて供える。  
(大輪 早川久美家)  
(早川久美 撮影)

祠の中に稲荷様だけ入れられたり、稲荷様と八幡様を入れられたりする。明治時代はわらのお飯屋が多かったが、今は木の宮が多い。終戦後、急に変わった。基礎を高く築いて、その上に木の宮を建てるが、座敷より高くしろなどとはいわない。屋敷の北西の隅にあるのが多いが、日なたに出すなどとはいわない。

二の午、三の午は別に考えない。(大輪)

屋敷鎮守は家々にある。田口元一郎家(本家)だけに「正一位田口稲荷大明神」が祀られる。田口イツケは田口のヒツバリ(縁続き)だが、金毘羅様を祀る家もある。「田島様」が田口家の先祖様だったという。(須賀)

屋敷稲荷は木製の祠が多い。中のご神体は笠間や成田など、どこかの稲荷様を借りて来て祀ってある。初午には屋敷稲荷に色紙の旗を立てて祀る。赤飯やだんご・スミツカリ(シモツカリ)を供える。(須賀)  
屋敷稲荷は家を守ってくれる神で、木の宮が多く、屋根にトタンや銅板が張ってあり、石垣を築いた上に鎮座するものが多い。ご神体として、白ひげの老人が稲を担いで、狐の上に乗っている像を祀る家もある。初午にはお宮を掃除して幕を張り、両脇へ「正一位稲荷大明神」と書いた旗を立てる。赤飯・スミツカリを作って供えるが、魚は供えないで油揚げを上げる。スミツカリは節分の豆に大根おろし、油揚・酒粕などを入れて煮たもの。(川俣)

屋敷神は稲荷様を祀る家が多く、屋敷の西北隅に祀る。神棚に大神宮



屋敷鎮守 (左) 弁財天 (右) 屋敷の西北隅に祀る (大輪) (関口正巳 撮影)



屋敷鎮守  
屋敷森の中に鎮座する八幡宮  
という (大輪) (関口正巳 撮影)

ラのツトッコに入れて供える。

玉井家では、アブラゲとトウフ、赤飯で、二膳上げる。スミツカリはオニオロシで大根人参をおろし、大豆、酒粕、アブラゲも入る。砂糖、しょうゆで味つけをするが、砂糖を使わないのがうまい。たくさんつくってタネをとっておいてつくり足すようにして一カ月以上食べられるようにしている。この日は使用人も休みにする。また風呂をたてると火に立つといつて風呂は休みである。

初午が早いと火早いとか、桑が外れるといい、おそい年は桑、即ち蚕が当りという。(江口)

二月の初午のとき、分家の人たちは本家の稲荷様(屋敷神)へ赤飯をあげに行く。(下江黒)

初午にスミツカリを食べる。大根おろしに節分のときの豆、人参、鮭の頭に酒粕をせて煮る。これと赤飯をツトッコに入れて稲荷様に供える。屋敷鎮守のまつりはそのときだけで、九月や十一月には祀ら

様と並べて祀る家もあるが、特別である。(川俣)

初午には屋敷稲荷の祭りをする。スミツカリと赤飯をワ

いた) シヤケのあたたま。

右の材料を一緒に煮た。味はしょうゆでつける。うちによつては、ネギとかシヤケをいれる。

スミツカリをつくるのは、二月の初午の晩だけ。ふだんはつくらない。ほかの日につくるときは、初午のときの材料をのこしておいて、それになしたつくった。初午のときのをすこでもまぜれば、ふだんでもつくつてよいという。

初午のときにはスミツカリをわらのツトッコに入れてあげる(だんごとスミツカリを一緒にする)。

スミツカリはおかずとして食べた。

初午のときには、屋敷稲荷さんと仏様に供える。(入ヶ谷)

スミツカリは節分の豆を取って置いて、初午に豆・大根・塩引きシヤケを細かくして入れ、酒粕で煮付けて作る。

初午の食べ物で、ふだんは食べない。初午の次ぐ日に食べるとおいしい。(大輪)

初午にはわらを折り曲げて、元をしぼり、左右にくぼみをつけて、ワラツトッコを作る。ワラツトッコの左側にだんごや赤飯、右側にスミツカリを入れて、(神棚や床の間には供えないで)村社へ持つて行っ

ない。屋敷鎮守には、弁天様だの八幡様を祀る家もある。(斗合田)

スミツカリ 二月の初午のときにつくる。材料はつぎのとおり。

大根：大根おろし(オニオロシ)でおろした。

人参：これもオニオロシでおろす。

大根・人参のおろした残りはきざんで煮た。あぶらげ：小さくきる。

酒かす・節分の豆(これはつぶして皮をむ

て供える。

初午のどんごは米の粉で作リ、小さく丸めて、あんどでくるんだもの。今でも朝作っている。(大輪)

初午には、年越し(節分)の豆の残りに、大根をすって入れ、シヤケの頭を入れて、酒粕を加えて煮込むスミツカリを作る。スミツカリは初午の食物だが、ふだんでも、残り物に具を足して作る。(須賀)

スミツカリは初午の日につくる。材料 鬼の豆(節分に使った煎り豆の残りを一升マスに入れたまま年神様に上げておく。スミツカリを作るので豆は多目に煎っておく) 大根、人参、油あげ、酒カス 作りかた。

①鬼の豆はミの中で、一升マスの底でころがすようにこする。皮がむけて、二つ割りになる。これをミであおいで皮をとり除く。

②鬼おろし(木製のおろしがね)で大根・人参をおろす。

③①と②をナベかカマに入れ一晚おいとく。

④翌朝、小さく切った油あげと酒粕を混ぜて加え、砂糖、醤油を始めから入れてコトコトにする。途中で煮返したりしながら幾日も食べるので大きいナベやカマで煮る。

ツトツコに入れて屋敷稲荷様に上げる。アズキごはんか赤飯も上げる。朝こしらえて、できたら稲荷様に上げて、家族は一人一人皿に盛ったり、ドンブリに入れて皆で食べたりする。(川俣)

初午に、オニオロシで大根をおろして、節分の豆と人参、油揚げを混ぜて煮こんだ。これをスミツカリという。(田島)

初午にスミツカリをつくる。スミツカリは大根をオニオロシでおろし、これに人参、油あげ、酒粕、鮭の頭などをいっしょにしてぐつぐつよく煮る。これと赤飯をツトツコにして稲荷様に供える。このスミツカリは残しておいてそれを入れて二の午にも食べる。もし途中で食べなければそれを少し入れてつくって食べるので、そうでないときに新しく作ってたべてはいけない。

初午には、風呂をたてない。火にたつといっている。(上江黒) 火にたつ 二月初午の日には、風呂をたてるな。火にたつといつた。

初午の日には、埼玉県の騎西の明神様へ行つて、その池から水をもたらってきた。その水を入れて風呂をたてればよいといつた。

なお、子どもにくさができたときには、騎西の明神様からもらってきた水をつければよいといつた。(矢島)

初午は火にたつから、ふるをたてるなどという。武州騎西町の明神様の境内にお湯屋があり、湯のたて始めだといつたので、行つてお水もらつて来る。一升びんに入れて置き、夏に雷様が鳴っている時、お水を盥に入れて飲むと火難除けになる。ふだんでも腹が痛い時には、「お水をいだけ」といって飲まれたが、治るという。(大輪)

初午に風呂を立ててはいけない。火事になる。(斗合田)

#### コト 八 日 (八日)

コト八日 この日はメケエを竹の竿の先に伏せた形で立てた。このようにして庭先に立てておくとも鳥が逃げるのだといわれた。なお、ざるをかぶると目かごが出来ると言われてかぶることは禁じられていた。

葬式の出棺のあと座敷をざるを転がすことが行なわれている。(新里)

針供養は二月八日。ミカイ(目籠)を竿の先につけて立てる。ひとつ目の鬼が、天からそれを見て、目がいくつもあるんで怖がつて下りて来ないという。(上江黒)

二月八日に竿の先にミケイ(目籠)をつけて屋根に立てておく。長い竿がよいと言つた。魔除けだといふ。前日の夕方立てる。(斗合田) 針供養 お針を習う人をオハシンに行くので、ハシンコという。ハシンコたちがまとまって、針を豆腐に刺して、塚の天神様へお参りに

行った。お針の師匠の家で祝い、おしなど作ってご馳走を食べた。

コトというこは聞かない。(大輪)

二月八日は針供養で、欠けた針や古くなった針を裁縫の師匠の家で供養した。(田島)

ヤキビン 二月八日のヤキビン」といって、小麦粉を水でこねて残飯やネギ・みそなどをに入れて、二寸丸ぐらいの大きさにしてほうろくで焼く。

ふだんにも焼いて、おやつ代りにした。(大輪)

### 上岡観音(十九日)

上岡観音 二月十九日に上岡観音(埼玉)へ行く人もいるが、これは個人の意思で行く。軍馬に出した馬がたびたび夢に出るのでお参りに行った人もいる。

村には観音講はない。(江口)

### こしきだおし

こしきだおし 酒つくりは十一月から開業して、二月ころ酒つくりが終ったとき、こしきだおしといってお膳立てをしてすごいごちそうでお祝いする。クミアイにはお配りをした。

羽附ではクワイレマツリという例がある。(江口)

## 三月

### ヒナの節供(三日)

三月節供 赤飯か、草餅をつく。餅をのして菱形に切つて、下が白、中が草餅、上が白い菱餅を、それぞれ三枚ずつ重ねて(大きさは同じにする)ヒナ飾りの前に供える。

草餅は細長く円筒形に伸して、太いマナ箸でつまんでヒシ餅をつく

る。円筒形の餅を半回転させては箸でつまむと、四方にツノが出てヒシの形になる。そのまま食べたり、黄粉に砂糖を混ぜて付けて食べたりする。(大輪)

ヒナ祭りには三月三日、モチ米とウルチ米の粉を半々に混ぜ、モチグサ(ヨモギ)を入れてついで、草餅を作る。草餅は丸め餅にしてヒナ様に供えた。ヒシ餅にはしなかった。細長く棒状に伸ばして、箸で直角にちぎってヒシの実にした餅に、キナ粉を付けて朝食として食べる。ふつうはあんを入れて丸めたり、あんを入れなくてキナ粉を付けたりに食べた。手数ははぶくため、キナ粉を付けて食べる人が多い。(大輪)

三月の節供の餅は丸餅にするが、これは中にあんを入れずお供え状態で、これに黄粉をつけて食べる。(斗合田)

ヒナ人形 初節供には方々からヒナ人形をもらうので、二月のうちにヒナ人形を飾る。(大輪)

ヒナ人形は昔は坐りヒナが多かった。鍾馗・神武天皇・高砂のじいさんばあさん、桃太郎・浦島太郎などの人形だった。座敷にヒナ壇を作り、毛せんを敷いてその上に人形を飾る。前にモモの花やアラレを供える。

ヒナ祭り後、ヒナ人形をいつまでも出して置くと、その子は縁遠いといわれて、五、六日には蔵う。外遊びや流しヒナは、したことがない。(大輪)

すしはあまり作らないが、餅の代りにすしを作る場合もある。餅とうどんが多い。(大輪)

正月の餅の切れっぱしを干して、炒つてアラレをつくる。ヒナ様に供える。

魚はヒナ様には供えない。(大輪)

三月節供は三月三日で女の節供という。ヒナ様は早く飾つて早くしまふ。そうしないと早く嫁に行けない。「娘と大根は早く抜かれる方が

よい」といった。古くなったヒナ人形は燃したり、利根川に流したりした。(江口)

初節供 嫁の実家から内裏ビナを届ける。婿方でヒナ壇を初めて作る。親戚や隣組からも、桃太郎・浦島太郎などのヒナ人形を贈ってくれた。

二、初節供のお返しとして、一日に赤飯を重箱に詰めて、スルメイカを二、三枚付けて、ヒナ人形を贈ってくれた家に配る。近親者は節供の日に呼んでご馳走する。(大輪)

ひなまつりにひなさまをかざり、草もちと白いもちをつくって供える。きな粉をつけて食べた。(あんこを入れるのは近年のこと)初節供の子どもには親せきからひなさまを買って届けるが、親の実家からオヤモトといつて一番いいもの―親王さまのいるものを買ってやる。お返しは手土産などで、お節供にはひな様をくれた人を招いてごちそうをする。古いひな人形は利根川に流したこともある。お節供が終わるとなるべく早くしましう。(江口)

ヒナ市 館林や妻沼のヒナ市へヒナ人形を買いに行った。(大輪)  
ひな市は村の中はもちろん、まわりにもなかった。(江口)

### ヒョウ祭り(中旬)

ヒョウ祭り 雹が降らないように、ご馳走を作って祝う日。常使いが「あしたヒョウ祭りだよ」といって、ガナツテ(どなつて)回った。常使いは所得のない人で、役場とムラから手当てを払って伝達をいふらしてもらう役で、村の納税切符なども配った。区長が使令して常使いが伝達した。区長―区長代―評議員(村会議員)―隣組長(昔は伍長・十長)―常使いの組織があり、常使いが「あした、おしめり祝いで遊ばれよう」などといいふらすと、番頭や女などは遊べることになった。(大輪)

### 春の彼岸

彼岸 三月春分の日を挟む七日間  
入り口 墓掃除をして、だんごを作って墓に上げたり、地蔵様に供えたりする。丸い米の粉のだんごで、くぼめない。(大輪)

中日 寺へぼた餅を持って行き、先祖の墓に上げてお参りする。晩はうどんを作る。(大輪)

走り口 寺へ行って、先祖の墓にだんごを供えて送り出す。(大輪)  
彼岸や盆には寺へボタ餅を持って行ったが、最近では現物(米・うどん)を持って行く。(大輪)

彼岸の入りの日に墓そうじをし、墓参りする。中日にはぼたもちをつくる。

新仏のあつた家では春(秋)の初彼岸に岩舟山(栃木)にお参りに行き、寺で拜んでもらい、塔婆を書いてもらって山へ登る。なるべく上の方に上げると後生がいいという。行く場合には戒名をメモして行くが、彼岸が近づくとも岩舟の寺から手紙が来ることもある。(江口)

念仏 一般に念仏が始まると不景気になる。不景気になると念仏が始まる、ともいわれている。(江口)

天道念仏は江口ではない。(江口)

くされ彼岸 「暑さ寒さも彼岸まで」「くされ彼岸が七日ある」などという。気候の変わり目で雨が多い時期とされる。前々から雨が降り続く、中日には晴れる。前々から照り続くと、中日には恵みの雨が降るなどという。(大輪)

### 社日(戌の日)

社日 小泉の社日様のお祭りなので、お参りに行く。農具の市や植木市がたつが、その苗木はあまり信用できない。湯に付けておくから。(大輪)

村では社日の祭りはない。小泉の社日さまにお参りに行く人もある。ここでは農道具を売っていたが、「社日道具」といって安物があった。かご類も売っていた。いまは植木市のようにである。(江口)

春秋の社日には大泉の社日様に行った。農具や植え木を買ってきた。(江口)

#### ア ソ ビ (中旬)

アソビ 春と秋と二回あり、青年(男衆)が決めて集会所や個人の家に集まってオゴリをして遊んだ。米を持ち寄って飲み食いし、八木節を踊ったり、鼓・太鼓・笛などではやしたりした。ヒシチヒトバン(二日一晩)遊んで、宿にころ寝して泊ったが、二日連続のこともあった。(大輪)

南大島の中コウチでは、三月の中・下旬の仕事が忙しくなる前に、二日間、コウチ中の家の戸主が集まり、昼、夕、朝、昼、夕の五食を一緒に食べた。今は夕食一食きりである。仕事がこれから忙しくなるという意識で行う。これを「春のアソビ」という。

これに対して「秋のアソビ」は九月ころ、仕事が一段落したところ春のアソビと同じように行う。(南大島中)

### 四 月

#### 花 祭 り

お釈迦様 寺の本堂にお釈迦様(誕生仏)を出して飾り、参詣人が甘茶をかけて供養した。寺では甘茶を飲ませてくれた。ヤシャウマは知らない。(大輪)

花祭りは、四月八日、藤の枝葉を取って来て、家のひさしにさした。餅はつかない。(大輪)

旧四月八日にフジのつると、ヨモギをとってきて、軒下にさした。

(矢島)

四月八日には、寺に住職がいたころは甘茶をつくり、花まつりをした。住職がいなくなつてからは何もしない。(江口)

四月八日はオシヤカサマの日で、寺ではレンゲソウの花できれいに飾りつけた屋根の下にオシヤカサマをタライに入れ、参詣者にヒシヤクで甘茶をかけた。この甘茶を目につけることはなかったという。(江口)

四月八日に宝寿寺をきれいにして釈迦の像をかざり、甘茶をかける。(上江黒)

四月八日は旧暦。茶王寺にお釈迦様を飾って花で飾る。お釈迦様に甘茶をかけて拝む。目がよくなるという、目の悪い人はとくに甘茶をかければよいという。(斗合田)

#### 春 祭 り

春祭り 四月十五日に、区長、区長代理、村番(順番制)四人等十三人程が神社に集り、神職が修祓、祝詞奏上、神饌をあげるだけで、村中が寄ることはしなくなった。(大佐貫)

村社長良神社の春祭り(四月十五日)には、行列が出てオネリをする。

長良神社は大輪の鎮守で、鳥居の内側に立てる大輪は館林藩儒山下雪窓(明治三十五年没)の揮毫による。なお、境内に接して八坂神社があり、大輪は弟子岡戸明堂・早川欄舟がそれぞれ揮毫したもの。(大輪)

鎮守長良神社にお参りして、餅や赤飯を供える。自分の家から出たものに赤飯や餅を配る。お客が来る。(大輪)

天神様の春祭りは三月二十五日、秋祭りは十月二十五日だったが、神主都合があつて、それぞれ四月十五日、十月十五日に変わった。戦前は神主や世話人が装束を付けて、ショウ・笛・太鼓を鳴らし、行列を

組んでオネリをした。昭和初めごろまでしていたが、戦争中に中止した。今は神社で祭式をして終る。家では赤飯をふかして、親戚とやりとりした。(須賀)

春祭りは三月二十五日に鎮守で神主が祝詞を上げ社寺総代や役員が参列する。特別の行事はなく、村人がお参りするだけである。

この日、草もちをついて親せきや、嫁いだ娘の家へ配ったもの。(江口)

### 厄神除け(十六日)

厄神除け コウチごとに春と夏の鎮守の祭日(現在は新の四月十五日と七月十五日)の次の日に行う。各コウチの協議委員が梅原の三島神社の神主に厄神除けのお札をもらい、それを竹にはさんでコウチの境の辻にたてる。たてる本数はコウチにより異なる。

その日の晩、コウチ全戸の戸主が集まって飲み食いをする。(南大島)

五月一日に村境にシメを張り、獅子を村中まわして厄神除けをした。この日ツラガケといって村人一人一錢ずつのお金を集めて村中一戸一人が出て玉井酒造の庭にござを敷いて、ニシンの煮たものを肴にして酒を飲んだ。厄神除けのキヨメである。

今は一人二〇円ずつ家族の人数分もらってまわり、キヨメをしている。(江口)

### 梅香講(二十一日)

梅香講 四月二十一日に宝光寺(庵寺)へ年寄り(老婆)が集まって、大師様を台に乗せて、その前で念仏を唱える。世話人が世話をやいて茶がしを出し、持ち寄ったものを飲み食いして過ごした。最近、松林寺で復活して、梅香講をつくった。(大輪)

井戸替え 井戸ザライは、春の清潔の日によった。(江口)

## 五月

### 雹乱除け(一日)

雹乱 五月一日に板倉の雷電様から雹乱除けのお札をもらって来て、苗マに立てる。(大輪)

モメンボウ 五月一日をモメンボウといい、綿の種をまく日になる。また田んぼの苗代づくりの日でもある。(江口)

### 八十八夜(二日ごろ)

八十八夜 五月二日ごろ、「八十八夜の別れ霜」という。苗代に「八十八夜ブリ」といって、モミ種を蒔いた。(大輪)

「八十八夜のおかれ霜」ということは聞いたが、この日、行事としては何もない。(江口)

### 五月節供(五日)

節供宵 節供の前の晩をセツクエという(祭りの前の晩をマツリエといい、同じいい方をする)。四日の晩にショウブ・ヨモギを軒下のひさしにさして、悪魔除けをした。ショウブを刻んでふろへ入れてショウブ湯をたてて入る。女衆が先に入れてはいわぬ。フキゴモリともいわぬ。石合戦・たこあげなどもしない。(大輪)

四日の夕方、ショウブ・ヨモギを取ってきて、母屋のひさし、屋敷稲荷など、正月飾りをした所にさして置く。フキゴモリとはいわぬ。ショウブ湯に女衆が先に入れてはいわぬ。(大輪)

ショウブとヨモギ 五月四日にショウブとヨモギをとってきて軒下にさした。(矢島)

五月節供は五月五日。萬蒲とヨモギを軒に三カ所さした。この日は男の節供といい、鍾旭様ののぼりを立てた。のぼりの家紋は上が婚家

で、下が実家。頭の痛い人は葛蒲をまくと治るといった。葛蒲湯、葛蒲酒をした。(江口)

五月節供に屋根を蕨、葛蒲、蓬でふく。葛蒲で鉢巻をして葛蒲湯に入る。頭痛しないといふ。(上江黒)

五月の節供にはよもぎとしょうぶを屋根ぐしにさした。またしょうぶを丸めてふるふが植えて入れたのでいい香りがした。ケエバ切りで切つて入れる家もあり、体をこすつたものだった。

昔は屋敷のどこかに防火用水と洗たく場をかねた二坪くらいの池があり、そこしょうぶが植えてあつたが、土地改良で池がなくなり、しょうぶもなくなつた。(江口)

五月節供は男の節供という。葛蒲で鉢巻をして風呂へ入ると健康で過せる。柏餅をつくる。そのために柏を植えておく家があつた。(斗合田)

カシワ餅 カシワの葉をふかして、湯に入れて置く。米の粉をねつてあんこを入れ、カシワの葉に包んでせいろでふかす。五日の朝作つて、神・仏に上げたり食べたりする。(大輪)

初節供 実家の親もとから五色ののぼりをもらい、輪にして吹き流しにする。近親者からは種旭様の絵を描いたのぼりをもらった。絵のぼりは子どものころ(明治・大正時代)が多かつた。絵の上部の上方にもらう家の紋、下方にくれた家の紋が入つていて、二本一組だつた。ほかの親戚からは紙や布のこいノボりをもらう。のぼり竿の先には杉の葉を付けた。(大輪)

男の子が生まれた家は四月中にこいノボリなどを親類からもらうので、内祝いを五月一日にした。近親者を呼んだり、赤飯を配つたりする。(大輪)

男の子の初節供には、幟と鯉のぼりを贈る。親元は吹き流しを一組つくつた。昔の幟は種旭さんの絵だつた。昔は家紋をつけることはなかつたから、紋をつけるのは最近のことである。

お返しには柏もちをつくつてお配りしたものでうまかつた。いまは業者のものを配る。(江口)  
旗じまい 八日ごろ、こいノボりをしまう。(大輪)

## 六 月

### 初 山

初山 六月一日、母親の実家から初山着物が贈られる。それを着て六郷の富士原の浅間神社にお詣りする。ここで子供の名前を書いた団扇を買い、組内には一本、親戚には二本お土産として配る。親戚が多いとかなりの数になる。今年是一本三百五十円であつた。(入ヶ谷)

初山は五月三十一日・六月一日、館林の浅間神社・富士岳神社へ、生れて初めての子どもを連れてお参りに行く。子どもの額に判を押してもらい、幸福を折り、お札を受けてくる。「初山」と印刷したうちわをみやげに買つて来て、裏にその子どもの名前を書いて、親戚や近所に配る。(大輪)

館林の浅間神社へ子どもを連れてお参りに行き、「初山登山記念」のうちわを買つて来て、出産祝いをもらった家々に二本ずつ配る。子どもも名前が刷り込んであるうちわで、子どもが生れると「初山祝」の注文を受け付けた業者が用意してくれる。近所や親戚に配る。(須賀)

六月一日に富士浅間(小桑原の富士嶽神社)に赤ん坊を連れてお参りに行く。額に判を押してもらう。参拝の記念にウチワを買つて来て親せきや近所に配る。昔は苗字も書いてあつたが、最近の名前だけを書いて配るので、どこの子だかわからないことが多い。(江口)

六月一日は初山で、館林市六郷の富士浅間神社まで子供を連れて行った。赤子は丈夫に育つようにと赤い印を押してもらつた。帰りにウチワを買つて親戚などに配つた。(千津井)

六月一日に赤ん坊をつれてオ山ノボリをして、ひたいに印を押して

もらつてくる。破魔矢をもらつた家に団扇をくばる。これには、富士山、恵比須様、宝船などの絵がかいてあり「初山」の印がおしてある。それに子供の名前を書いて配る。(上江黒)

館山の富士嶽神社と村の富士嶽神社へ行く。去年の初山以来生れた子をつれて参拝して顔に神璽をおしてもらつてくる。帰りに団扇を買つてきて、それに子供の名前を書いてくばる。団扇の柄は丸いものでないといけない。丸く育つように。(斗合田)

#### コトビ

夏場の一日、十五日をいう。午後が休みになる。二十十日やオシメリ祝いの日という。夏、雨が欲しい時に雨が降ると、常使いが「あしたはオシメリの祝いで遊ばれよ」とどなって回る。すると、オシメリ祝いをするので、農家を手伝う次男坊や奉公人にひまが出て、遊ぶことができた。(大輪)

蛋祝い 蛋のはき立て祝いや、休み餅などはしなかつたが、上簇祝いに餅をついて、隣近所に配つた。(大輪)

穂かけ この辺ではやらない。(江口)

夏越し 特になし。(江口)

雨乞い 田植えのころ雨が降らないと、村の人が鎮守の庭に集まつて、太鼓をたたいて、百万遍の大数珠をつくつた。大玉(水晶玉)が回つてくる、息を吹きかける。そのうち、大雨が降つた。(大輪)

#### 田植

苗代をオヤ田といひ(山間部)、モミマキ祝いはしない。苗が育つと、近所や親戚に手伝つてもらつて田植えをする。マキタ(時き田、じかまき)は草がえらく出て取れないので、ほとんどしない。田植えまんじゅうを買つて、田んぼに持つて行つて食べる。(大輪)

田植えは六月二十二日ごろから始まり、六月いっぱいくらいかかる。

その前に植えるともシが出るので、病虫害の発生を防ぐとこのころになつてしまふ。(江口)

サナブリ 田植えが終わると、苗を一つかみ家に持つて来て、オカマ様に供えて、作つたボタ餅などを供える。田植えに手伝つてもらつた人を呼んでご馳走をし、苗が不足した時にもらい苗をした家にご馳走を持つて行つたりする。牛や馬にもご馳走して、ボタ餅を食わせた。マンガ洗いはしなかつた。(大輪)

#### 祇園(十日・十一日)

祇園 六月十日・十一日に長良神社の北にある八坂神社(天王様と)の祭りをす。祇園といい、盛大に祭る。

十日午前中に村中の人が出てハナコシラエをして、午後飾り付ける。ナス・キュウリを供えろといつて、ナス五本・キュウリ三本ずつ出して十日に品評会をしたこともある。夕方、酒を一杯飲んでから、山車(ダシ)を出して村中をねり歩き、夜十一時ごろ社務所に戻る。それから舞子連がヒョットコ踊りを一時間する。

十日には年番が豆腐を買つてきて「スリヤッコ」を作つた。豆腐をすつてショウガやトウガラシで味付けをしたもので、この日の酒の肴にした。

翌十一日はゆつくり休んだ。

十二日は厄神除けで、再び村中の人が出て祝う。供えたキュウリやナスを集めて料理してキュウリモミやナスヨゴを作、ヤッコ豆腐も用意して、酒の肴にして共同で飲み食ひした。

神主が大幣束を八坂神社に上げた。役員が家々を回つて祭り費用をもらい歩き、祭りのハナを丸めた輪を配つた。(大輪)

厄神除け 六月二十八日が厄神除けだつた。六月二十四、五日が天神様のまつり、二十六、七がギョウパン上人のまつりといつて、二

十八日が厄神除けとなった。

このギョウパン上人のまつりには埼玉からも来た。渡しの舟頭は寝ず、に働いた。このまつりに来ると流行の病気に効くということだった。

(新里)

石経さま 旧五月二十七日、現在では新暦の六月二十七日を石経さまという。この日はやはり病にならないよう休んだ。大正初めまでは、新里でこの日仕事をする人は一人もいなかった。この日に働くことが罰が当たるといわれた。(新里)

## 七月

半夏 (七月下旬)

半夏生 七月初旬の忙しい時期だが、半夏には田と畑の仕事をひとりと一緒にすると、変りことがある。どちらか片方づいてするならばよいという。以前は田植えが遅かったが、半夏に植えると、「半夏半作」といって、あまり取れなかった。旧暦のころ、「五月半夏は後で植えろ、六月半夏は前に植えろ」といった。(大輪)

半夏生の日には田や畑に両方入ってはいけない。片方だけならばよい。ハンゲという人はオカ(畑)と田へ片足ずつ入れて死んだという。

半夏の日は野菜が安くなる日として知られている。この日までは初物として取引されるが、この時期になると量も多く出荷されるようになってくるからである。(江口)

半夏には、田丘両方に入るなどという。半夏どんが田んぼに片足、オカに片足のまま忙しくて亡くなってしまったといわれ、この日は畑か田のどちらかに一方づけてやれといわれた。なお、半夏でも田んぼに入るだけなら田植えをしてもよかった。(千津井)

## 農休 (上旬)



農休みの知らせ (大輪)  
(関口正巳 撮影)

農休み 村で日取りを決めて一斉に休むようにしている。  
(大輪)  
農休みは田植えが終わると、七月六、七、八、ごろの三日間、仕事を休んで遊

んだ。小麦まんじゅうを作って食べる。(大輪)

農休みは七月六、七、八日ごろ、田植えが終わって仕事を休む。農業委員会が田植えやシロカキの手間代の基準をいくらと決めるので、麦を出荷して得た金で七月に田植えの手間代を精算した。基準にいくらか色をつける人もいる。(須賀)

農休みは七月六、七日のころ。田植えが六月いっぱいかかるのでそのころになる。最初の日に厄神除けをし、大獅子をまわす。

新しい小麦粉でマンジュウをつくる。粉は近所に分けてやることもある。(江口)

## 厄神除け (十六日)

厄神除け 七月十六日にする。道路の東西から子供が一入ずつ出た。小学校五、六年生の男子が選ばれ、白衣を着て冠を付けた。祭り番が十軒ずつ代って当番になり、そこから男の子が出た。白衣を着た子がサカキに幣束を付けて持ち、手分けをして各戸を回る。「お戯りに来ました」といって座敷に上がり、座敷中を敲って回った。家の者はお賽銭として、お金をオヒネリにして上げた。額は二百〜五百円くらいだったが、各戸回ると、集まった金額の半分をその子供にくれた。八年は



「夜神除」のお札 (南大島上)  
(阿部 孝 撮影)

ど前から大人が出るように切り替えた。四組に二人ずつ八人が出て、四組で手分けして回る。最初リヤカー、今はトラックに太鼓を載せてたたきながら、村道を三回往復して後、毎戸を回ってお祓いする。神主も来て祝詞をあげ、午後回る。社寺総代(四人)の指示で祭り当番が働いた。以前は男が出たが、今は女でもいい。賽銭は毎戸千円ずつもらい、集まった金額は祭典費にくり入れる。以前は昼食も家へ食べに行った。(川俣)

七月十六日に村境の四カ所に厄神除の札を、高さ二mほどの青竹を割って挟んで立てる。(川俣)

七月十五、六日に厄神除けを行なった。ムラで二人の世話人がいた。この人を厄神除けの当番といつた。

明和村梅原の三嶋神社からお祓いのお札をもらって来てムラの四方に立てた。しの竹の先にお札を差して立てた。ムラとムラの境だから隣りムラと同じ場所に立てることになった。八丁目はしない。ムラの四方から悪病が入らないことを願った。(南大島上)

厄神除けは七月二十七日が本まつりでササラをし、役員の家でやる。二十八日は希望者の家をまわる。夜中の一時〜三時に、時には

夜が明けたこともある。まわってもらった家ごとに酒などの接待があり、御神酒や金巻封が出来る。

二十九日に当番の人たちが集まって飲む。四つのコウチのうちでその年の当番がきまるが、まつり番と獅子の組は別々で、飲食も分れて行われる。

(江口)

### 土 用 (七月土用)

土用 土用餅をつく家もある。土用の丑の日にはウナギを食べるので、買って来た。

土用干しをして衣類の虫除けをした。家の中に綱を張って、衣類を掛けて干した。

梅干しは「三日三晩の土用干し」をするので、外に出し放しにする。土用に薬草取りをする人もいる。灸をすえる人もいる。七日火などは燃さない。(大輪)

土用には土用もちをつけて力をつける。アンコを入れたアンピンを食べる。どの家でもつくというのではなく、つかない家もある。

特別の行事はない。(江口)

土用は「三日三晩の土用干し」といつて梅を干した。土用の三ツ目にはゲンノシヨウコをとりに行く。これはよく効いた。また、ウナギも食べた。(江口)

土用の三ツ目に薬になる草をとった。この日にとった草はよく効くという。(千津井)

土用にはウナギやドジョウを食べた。(千津井)

### 落 雷

落雷 ライサマ(雷様)が落ちると、「雷電さまが落ちると縁起が悪い」といい、落ちたところにシメナワをはる。こうするとひろがらない。雷が落ちたときには「おめでとうございました」というあいさつをした。(江口)

### ミソギ・ハライ

二回、七月末と十二月末に人形を一戸一枚配る。神主が

紙を切つてヒトガタを作り、世話人が隣組を通じて希望者に配る（今は八十円を払う）。ヒトガタには家族の名と年齢を書いて神主の所へ納めると、神主が拝んで、ミソカッパライをして利根川へ流し、厄を流した。以前は自分で川へ持つて行って流した。その時、お威いして、その幣束を丁字路（四つ辻ではない）のカドに立てた。（川俣）  
茅の輪くぐり この村にはやるところはない。（江口）

## 八月

### カマツブタ

カマツブタ 盆月に入ると、カマツブタマンジュウをこしらえて、仏様にあげた。

カマツブタがあげたから、川へ水浴びに行くなどといった。カッパに川へひきこまれるといった。（矢島）

盆月の旧七月一日に新盆（ニイボン）の人が高灯籠を立てる。隣村の千代田村ではコイノボリのように竿で立てるが、この村では軒下で下げる方が多い。

「カマノクチアケ」のことは知らない。

盆月になると、仏様があつた世から一足ずつ出てくるという。（大輪）  
カマツブタは八月一日、仏様が地獄から出発する日だという。赤飯やお饅頭をつくつて仏様に供える。（斗合田）

### 七夕

七夕飾り 色紙に字を書いて笹竹に付ける。文字は「天の川」とか、歌を書いた。（大輪）

芋ッ葉の露を碗にためて墨をすつて色紙に文字を書いて笹竹に付けた。ネムツタの葉は付けない。まんじゅうを作つて供えた。（須賀）

七夕飾りは朝、里イモの葉のつゆを集めて墨をすり、「七夕や」「天

の川」などの歌を書いて、笹竹に吊るした。ネムの葉などはつけない。（川俣）

七夕飾りの竹の枝葉は利根川に流し、竿は洗濯竿に使う。ウラ（元）の方は墓の線香立てにした。線香立ては墓印しのある所（二本ずつ立てるのに、十組も作った）。（川俣）

笹竹に短ざくをかざりつけるが、短ざくには願いごとを書いてお願いするとか言うといわれ、芋の葉にたまった露をとつて墨をすると字が上手になるといわれる。六日の夜はうどんをつくつて供える。七日はまんじゅうをつくる。この日髪を洗うとよく落ちるといわれる。かざった竹は七夕が終るとかざりものと枝を利根川に流すことになつていった。（江口）

カツモ馬 七夕の前の日に、カツモ馬を二頭つくつて、相むかいにして、庭先に飾つた。この馬に乗つて、仏様がやってくるといった。

カツモ馬のところへは、まんじゅうをあげた。

七日の夕方、カツモ馬は矢田川へながした。

むかしはどこの家でもカツモ馬をつくつた。七日には、子供がこの馬をひいてあそんだものである。（入ヶ谷）

でも、軒なみ、カツモ馬をつくつて飾つた。

仏様が、この馬のつて、盆にうちへやってくるといった。

七夕の日に、夕飯をあげてから、馬と七夕飾りは川へ流した。

あるいは、カツモ馬を屋根へあげるうちもある。（矢島）

七夕の前の日にカツモ馬をつくつて飾つた。この日、カツモ馬の下をくぐるなどといった。厄神がたかるといった。

七日の朝赤飯をしてあげる。

七夕の夕方、まんじゅうをしてあげる。夕方カツモ馬をはずした。

（大佐賀）

八月一日にカツモ（マコモ）を谷田川から刈り取つて来て、干して



七夕のマコモ馬 (大輪) (関口正巳 撮影)



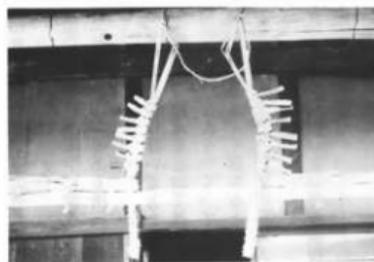
七夕のマコモ馬 (大輪)  
(関口正巳 撮影)



七夕飾りとマコモウマ (南大島下)  
(阿部 孝 撮影)



カツモ馬 (南大島 今成久雄家)  
(板橋春夫 撮影)



マコモウマ (南大島下) (阿部 孝 撮影)



マコモウマ (南大島下) (阿部 孝 撮影)



まこも馬①(斗合田) (都丸九十九 撮影)



まこも馬②(斗合田)  
(都丸九十九 撮影)

おく。六日にマコモ馬雌雄二頭作って飾る。たてがみの数を雄は奇数、雌は偶数にする。早川家では手綱の所に色紙で、それぞれ牽牛星・オトコボシ、織女星・オンナボシと書いて下げた。長さ一七〇cmにもなっているマコモ馬を、七夕飾りに立てた枕に横に渡した竹竿に乗せて向き合わせて飾り付けるが、天の川の車に織姫、西に牽牛の星があることによるという。

(大輪)  
七夕は戦前は旧七月七日だった。

本、たてがみは七本ずつ付ける。二頭を向かい合わせたり、一列に並べたりして、竿を横にした上に乗せる。または、たてがみの上のツリ手に縄を通して吊した。

最近では作る人が少ない。(大輪)

七月一日にカ  
ツモ(マコモ)  
を川から刈って  
来て、干して置  
き、六日にカツ  
モ馬の雌雄を作  
る。雄には腹帯  
の所に生殖器を  
付ける。足は四

カツモ馬を雌雄二匹作り、竹竿に渡して相向かいに並べる。色紙に歌などを書いて、笹竹に吊す。イエの晩(六日)、宵祭りにつけて飾り、夜はうどんをオシラキ二枚に入れて、七夕飾りのそばに供える。翌朝もまんじゅうや赤飯を供え物にする。

八日の朝、七夕飾りと一緒にカツモ馬も川へ流した。厄病をのがれるように流したが、川につかえて困った。七夕飾りを田畑には立てない。(大輪)

カツモ馬は七夕のあとで川に流したが、今は用水が一杯になってつかえるので、流し場所がないから燃してしまふ。最近あまり作らなくなった。

水に溺れた時にカツモ馬を燃して暖めると蘇生するとか、カツモ馬で身体をこすると助かるとかいう。(大輪)  
古いマコモ馬は物置などの屋根裏に吊るして置く。家内安全、盗難除、災難除になるという。(大輪)

カツモ馬はたてがみを七シダに作る。二頭作るのがおす・めすは不明、手綱の縄を結んで二頭向き合わせる。カツモ馬は七夕のあと、オロシ(下屋)の棚木などに掛けて取って置く。子供が水難で溺れた時に、逆さに吊してカツモ馬でなでると、生き返るといふ。(須賀)

マコモのことをカツモといふ。昔はどここの家でも七夕にはマコモ馬を作った。そのころは西池にマコモがたくさん生えていたが、今は埋め立てで無くなったので、谷田川まで行かなくてはならない。七夕の二、三日前にカツモを刈って来て、六日にカツモ馬を作る。笹飾りの脇に竹竿を横たえて、その上にカツモ馬を相向かいに置く。特別に供え物はいしない。(川俣)

八月に入るとカツモ(マコモ)をとって乾かしておき、六日の日にカツモ馬をつくる。一對つくるもので、七夕かざりの下に竹を横にわたし、向かい合せてかざる。七夕が終ると片付けるが、とっておいて水難でなくなった人をこのウマを燃してあたためると生き帰るとい

われている。

ウマをつくった残りの葉でマコモのゴザをつくり、盆かざりのむしろとする。(江口)

カツモは前もつとておき、六日の晩にカツモ馬をつくった。七日の昼すぎには立てておいた。

七夕に雨が降ると水が多い。七夕の日に墓掃除をやった。(江口)

七夕の二、三日前に川に行つてカツモをとつてきて干しておく。それで七夕の日の朝、カツモ馬を作つてトボグチの所に飾つた。魔よけといつた。

七夕飾りの竹は花立てや線香立てに使つた。(千津井)

墓掃除 七夕の日の早朝、組の人が出て墓地の草を刈り、墓の回りの掃除をして線香立てや花立てなどを新しくする。(大輪)

七夕に墓掃除をする。草刈りをして、線香立ての竹を立てる。(大輪)



七夕の香立て、花立て長いのが花立て、短いのが香立て(下江黒)

(郡丸九十九 撮影)



七夕の墓掃除(下江黒 金剛院)

(郡丸九十九 撮影)

盆前の墓そうじは農休みの日とか、お祭り前(七月二十五日ころ)やり、神社と寺をきれいにする。(江口)

ネブタ流し 子どものころ、朝早く起きてネムの草の葉で顔を洗うと、ネブタ流しになるといつた。(大輪)

七夕に髪の毛を洗うと、髪の毛がよくになるといつて、女衆は利根川へ洗に行つた。(須賀)

七夕の朝早く利根川や用水堰へ行って頭を洗つた。これを「ネムタ流し」といい、一年中寝ぼけろしいという。娘たちも川へ行って頭を洗つたり、顔を洗つたりした。

また、朝早く笹山に行つて、笹の葉の露を浴びると、眠気さましになるともいい、男が露をかぶつた。(川俣)

ネブタ流しは旧七月七日の朝早く谷田川で水あびを大人が行なつた。意味はよくわからなかつた。(新里)

七夕の雨 七夕の晩に雨が降ると、疫病神がこないといつた。七夕の晩には、三粒でも雨が降ればいいといつた。(矢島)

七夕は年に一度、七夕の星が会う日だといふ。カツモ馬を二匹つuckingて庭に出したが、今は作る人はないだろう。これは天の川が雨で水がふえるので、この馬に乗つて越えるのだといふ。

前日の六日の晩はうどん、七日朝は饅頭、雨は降つた方がよいといふ。(上江黒)

七夕の前六日の晩に饅頭をつくつた。またマコモで馬をつくる。お盆さまを迎え出るわけなんだろう、といふ。竹に「天の川」などと書いて下げる。雨はその日降らない方がよい。が、よくそのころ荒れるので、これを「七夕アレ」とか「水神アレ」といつた。

七夕には墓掃除をし、そのとき竹筒で香立て(短い)と花立て(長い)を墓石などの前に立ててくる。盆のときにそれぞれ線香、花をたてるのである。(斗合田)

## 盆 (十四日～十六日)

盆 以前は旧の七月であったが、現在は新暦の月遅れて八月に行う。七日に墓掃除を行い、十日にコウチで道草刈りをする。十三日は、新盆(アラボン)の家だけが、夕方、お寺へお盆さまを迎えに行く。新盆以外の家は十四日の朝迎えに行く。施餓鬼もこの日である。十六日は送り盆で、早昼を食べて送りに行く。米の粉で土産団子を十個くらい作る。また、ナスにアシガラ(アシガラ)の足、トウモロコシのけぼの尾、うどんのたづなをつけた馬を二つつくる。アシガラはお盆さまの箸という。(南大島)

盆買物 盆前に盆花(造花)や線香などを雑貨屋などで買うと、おがらを付けてくれる。おがらは盆様の箸にする。(大輪)  
盆市はない(江口)  
村の中には市は立たなかつた。羽生の市は四、九の市、館林の市は三、八の市だった。(江口)

盆前 盆前に館林へ盆買物に行く。ござ、花、提灯、オガラ、かわらけなど買ってくる。(斗合田)

盆棚 組立式の盆棚は新盆の時に大工に作らせる。組立式でない場合、雨戸などの戸板を立白や酒だるの上に載せて盆棚にする。うどんをのすめん板をつかう家もある。盆棚の上には新しい盆ゴザを敷き、その上にカツモゴザを敷く。盆棚の両方と後方の新しい障子を立てかけて囲うようにする家もある。盆棚は表座敷の廊下に近い方に設置する。

盆棚の前の両端へ笹竹を立てて、笹竹の間にカツモの縄を上下二段に張り渡し、縄には色紙のオンペロと、ホウズキを吊す。新盆の場合にはスギの葉を吊す。竹の葉については、あまりいわない。ミソハギを盆花といつて供えるほか、買った造花の金、銀色と盆花も飾る。十三仏の掛軸を出して盆棚の後方の縄などに掛けて並べる。不動

様・阿弥陀様・隠元大師・常陽大師などの掛軸を吊す。

お膳は盆棚に上げる膳と、ルス仏に上げる膳と、つねに上げる膳と三種ある。盆棚には高杯で上げ、つねにはチョコで上げる。仏壇の中はルス仏にもボタ餅を供える。(大輪)

盆棚は笹竹の間にカヤの縄を張り回して、スギの葉・ホウズキの実を吊り下げる。盆棚の上にはお水やミソハギの花を供える。おはぎにはオガラの箸を添えて置く。(大輪)

盆棚は幅一間、たて三尺ほどで組立式になっており、前の柱に笹竹を一本ずつ付けて、上下にそれぞれカヤの縄を張り、ホウズキ・色紙のキリハギを下げる。下に提灯を置く。盆棚の上には奥に位牌を出して飾り、背後に掛軸を並べて吊す。左の花瓶に生き花(盆花)をさし、右の花立てに造花の盆花をさす。行灯を右横に置く。前には盆を置き、燭台にろうそく、線香立に線香を立てる。水をコップに入れて供えるほか、井にも水を入れて、ミソハギの小束を浸して供え物に水を振るかける。重箱におはぎを六個、膳にひき茶(盆迎えの時に寺から貰う)を入れた茶碗を六個供える。盆送り用のだんごも重箱に入れて供えて置く。西瓜・カボチャなどの野菜や果物、芋の葉の上にナスをさいのめに切り刻んだものを乗せて置く。十五日のノマワリで取つて来たイネ株・サトイモ・サツマイモなども供えて置く。寺の施餓鬼でもらつてきた塔婆も載せて置く。(大輪 松本家)

組立て式の盆棚はふつうの時よりも新盆の時に作る方がいいという。盆棚を組み立て、左右の柱に竹を一本ずつ結び付ける。竹は下の枝をわざと暗くして置くと、あの世から来た亡者がそこに隠れている「隠れ場所」になるという。棚の上にマコモゴザを二枚敷いて、供え物を載せる。(大輪)

組立式の盆棚を持っている家が多い。何でもない時に作るもんではないというので新盆の時に盆棚を注文して作る。盆棚の回りに笹竹を立てカツモの縄をはり回して巻く。仏壇から位牌を全部出して、盆棚



盆棚  
障子で3方を囲う(大輪)(関口正巳 撮影)



盆棚  
前方に笹竹2本立てる。棚の外に、  
ナス・キュウリの馬やノマワリで取  
つて来た野菜を供える(大輪)  
(関口正巳撮影)



盆棚  
上に位牌を飾り供え物をする  
下にもマコモゴザを敷き、芋の葉にナスを刻  
んで供える(大輪)(関口正巳 撮影)



盆棚 組立式(大輪)(関口正巳 撮影)



盆棚の供え物(大輪)(関口正巳 撮影)



盆棚  
縄にホオズキ・スギの葉を吊す(大輪)  
(関口正巳 撮影)

に並べる。十三日夕方盆様を迎えて、十五日夕方送り出す家と、十六日昼食後に送る家とがある。普通、墓所へ送り出す。(須賀)

盆棚は組立式の木製の棚であり、竹の枝を前面の左右に立てる。五年前に盆棚を作るとをやめて、仏壇の前の左右に笹竹を立てるようになった。カッモ縄を笹竹の間に張って、色紙の幣束を下げる。オガラを盆様の箸の代りにしたり、ナス・キュウリの馬の足にした。(川俣)

いまま盆棚はつくる。笹竹を四本立て、なわでつくったシメナワをはり、色紙を切ったものとホウズキをかざる。玉井家では、これに生ウドンを折り曲げてぶら下げ、ナスの花どまり小さいものとホウズキを交互にかざる。棚の上にお位牌をかざり、棚の下に里いもの葉をおき、かわらけに供える。精霊さまといひ、どこへも行けない仏さまをまつという。(江口)

盆棚は組み立て式のものできてある。しかし、エビラ(蚕籠)の上に乗せてすませる家もある。(上江黒)

盆棚は毎年新しくつくる。蚕の桑くれ台の上に蚕の棚をのせた(しかし今は既製品の組み立て式が多い)。その上に位牌を出す。後と横の三方を障子で囲い、後に仏様の掛軸を下げる。新しいござをつくってすいた。棚の前に竹の柱をたてる。それをまこも縄でしぼり、杉つぼもつり下げる。また色紙とホウズキも下げる。盆棚の下はムエンボトケまたはガキドンサマを祀る。これは家の仏のお伴に来たともいう。上に供えたものと同じものを下にも供える。(斗合田)

位牌 盆棚の上に位牌を出す。位牌は位牌堂から経木を出して並べて置く。(大輪)

マコモゴザ 一尺×五寸ほどの大きさのマコモゴザを二枚編んで、盆棚の上と下に置く。マコモゴザは、「十五様ノ布団」ともいう。(大輪)

カッモのごはカッモ(マコモ) 七本を編んでござにする。カッモござは盆棚の上や下に敷く。(大輪)

盆棚の敷き物をカッモを編んで作る。荒物屋などで、盆花と組んで



盆棚の供え物 茶・だんご・水 (井) (大輪)

(関口正巳 撮影)

売っている盆  
ござも買って  
来る。(須賀)  
マコモで盆  
棚の縄をなつ  
たり、ござを  
編んだりする。  
マコモござは  
一、二尺×一  
尺ほどの大き

さで、盆棚の上に敷き、盆送りに供え物を包んで送り出す。(川俣)

盆のおそなえ 盆のとき、十三日に分家の者は、本家へおそなえ(餅)をもつていく。

篠木家では、二かさねもつていく。あんびんの場合には四コもつていって、仏様にあげた。(大佐賀)

盆棚には野菜や果物を供える。初物などを上げる。親類から持つて来たものも供える。(大輪)

オガラ 新しい箸を添えて、供え物を盆棚にあげた。ソウリヨウ様には箸をあげない。ソウリヨウ様は子どもの仏ともいう。(大輪)

ひき茶 盆のときは、お寺から挽き茶が出されるのでこれを使って仏さまに上げる。(江口)

ミソハギ 盆棚の上にナスの切りコを芋の葉に盛って供えるが、毎朝ミソハギの束を井の水に浸して、その水を振りかけてやる。盆棚には必ずミソハギを供えるので、庭の花壇や、畑の隅などに植えておく。

盆のころ、紫色の小さい花がいっぱい咲く。ミソハギを盆花と呼んでいふ。(大輪)

ミソハギの紫色の花が盆のころに咲くので、盆花として取って来て盆棚に供える。小さい束にして、井の水に浸して振りかけるのに用い



庭に盆花を立て、無縁仏へ供え物  
(おはぎ)をする(大輪 駒宮家)  
(関口正巳 撮影)



盆棚の下に、餓鬼・亡者へ供え  
物をする。(大輪)  
(関口正巳 撮影)

寺に新墓地を買って無縁仏をまとめて納めたのを、無縁仏と呼ぶ。(川俣)  
盆棚の下にガキサマをまつる(いる)という。供えものは棚上と同様カワラケ(葉焼きの皿)の上に載せて供える。またガキドウという。(上江黒)  
自殺・流れ死んだ人などの新仏ができると、古い仏が無縁仏となるという。これらには盆棚の下に供物をカワラケに入れて進ぜられる。ショウリヨウ様ともい



ミソハギの花 盆花として飾られる  
(大輪) (関口正巳 撮影)

る。花壇や畑の隅などに植えて置く。(大輪)  
ミソハギのこをポンバナという。十三日にとりに行く。  
(斗合田)  
盆花はとって来るのではなく

いて、どんぶりに水を入れて供える。去年の盆花(造花)を置き、カワラケ(土器)に小さいボタ餅を載せて供える。盆花(ミソハギ)の花束をこさえて、どんぶりの水をつけて供え物にはらいかける。供え物はナスをアラレに切つて、ハスツ葉に載せて置く。(大輪)  
早川家では盆棚の下にマコモのごぎを載せて、盆花・ミソハギ・ナス・おはぎなどをあげ、ソウリヨウ様に供える。(大輪)  
ソウリヨウ様は無縁仏ともいい、頼りのない仏だという。盆棚の下に去年の盆花を飾り、芋の葉にナスを刺しだものや、小さいおはぎを載せて、おがらの箸二本供える。(大輪 松本家)  
無縁仏 縁側の先の庭の植えこみの所に、無縁仏たちのために盆花を立ておはぎを供える。(大輪)

買ってくる。(江口)  
ソウリヨウ様 盆棚の一段下にソウリヨウ様を祀る。それを無縁仏ともいうが、子どもの仏ともいい切れない。はつきりしない。盆様に供えた茶は庭へ棄てるといい。人に踏まれない所へ棄てる。  
座敷から庭へ降りた所の植え込みの隅に、盆花(造花)を立て、カワラケにボタ餅を入れて供えて置く家もある。(大輪)  
盆棚の下にショウリヨウ様を祀る。マコモゴザの上にハスの葉を敷

盆棚の下にもマコモゴザを敷くが、最近では略して新聞紙にした。あの世から盆様に付いて来たガキ・亡者は棚の上に着れないので、棚の下において供養するという。下にも線香・鉦・かわらけ・水・ミソハギ・おはぎ・ノマワリで取つて来たイネ株・トウモロコシ・トマト等を数物の上に並べて供えて置く。(大輪)  
盆棚の下にヒノキの葉を敷いて、盆棚に一旦供えて下げたものを、そこに供えて置くので、だんだん集まる。名称は不明。

う。(大佐貫)

ルス佐 新盆の時は、盆棚に新盆様を祀り、古い仏様は仏壇の中で  
ルスンギョウしているのだから出さなかつた。去年から盆棚を二つに分け  
て、新盆様と古い仏様と分けて飾るようになった。(大輪)

盆迎え 八月十三日の夕方、提灯に火をともして墓場に行く。そし  
て後に手を廻し、「お盆だからお客においでなさい」といって、背負つ  
てきて盆棚の前でおろし、線香をあげる。麦わらは燃さない。提灯の  
火で燈明をつけ、提灯は火を消さないで軒の所につるしておく。新盆  
の家では白い提灯を、七夕頃から火をつけて軒にさげておく。(入ヶ谷)  
十三日の夕方、坊さんがニョウ鉢たいたてお経唱えながら墓地を回  
る。小僧がついて回る。それを炎天下の野らで聞いて、「住職が迎え盆  
をしたから、早く夕飯の支度をしろ」といって、盆迎えに行く用意を  
する。

夕飯前に寺の墓地へ盆迎えに行く。以前は盆ブチといつて、金一封・  
ボタ餅(今は米一升)・ナス二個・ササゲ二〜四本・インゲン二〜四本  
を重箱に入れて、おしるしとして寺へ持つて行く。寺の本堂の灯明の  
火を迎え提灯(今晚提灯)の火にともして行く。その火で線香に火を  
つけて、墓の線香立てに二〜四本ずつ立てる。仏様はのどがかわくか  
ら、墓に水も供えるという。線香の残りを持ち帰るが、その線香の煙  
に乗せて仏様を迎える。片手に線香を持ち、もう一方の片手を後ろに  
回して、「おぶつちやうつしやい」とおぶまねをして来る。線香の煙  
が消えないうちに、一心に家まで帰る。(大輪)

迎え盆に寺へ行つて、盆ブチを納めると、ひき茶をくれる。それを  
三度三度の食事の食前食後に、お茶を入れて盆棚に供える。(大輪)

十三日に盆迎えをするが、迎え火はたかない。家の入口に足洗い水  
をバケツか洗面器に汲んで置く家もあるという。(大輪)

屋敷の入口のカドに土まんじゅうをこさえて、そこで迎え火として  
麦わらを焚く家もあった。千代田村に近い方の斎藤イッケは千代田村



寺の盆棚 (大輪 松林寺)  
(関口正巳 撮影)

の寺(真言宗)  
の檀家だから、  
以前は土まんじ  
ゅうを造つて迎  
え火をたいた。  
(大輪)

から提灯に火をつけて、墓所に行つて線香をあげ、残りの線香を家へ  
持つて行って、盆棚に供える。(川俣)

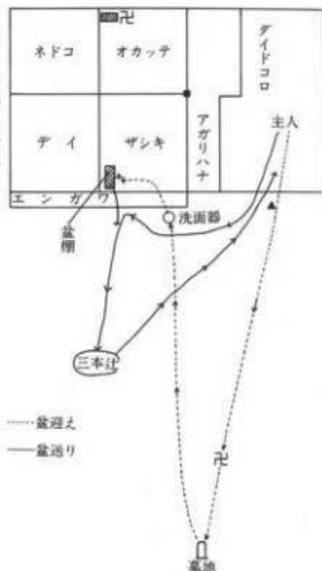
盆の精霊迎えは往還からカイドに入る入口のところで、カドビ(迎  
え火)をたく。(中谷)

迎え盆は墓に迎えに行き、線香・提燈つけて帰ってくるが、迎え火  
をたかない。(送り火はもす)。すり鉢で手を洗つて縁側から上つて、  
棚に線香をあげる。(上江黒)

八月十三日が迎え盆で、昼頃に盆棚をこしらえた。盆棚は新竹をつ  
かして飾りつけた。この辺では盆迎えはお寺に行く。お包みを持つて  
盆様を迎えに行くこと、寺で粉茶をくれ、提灯に明かりをつけてくれた。  
提灯の火は消さぬようにして家を持つて帰る。なお、寺から自分の墓  
地に行つて線香をあげてくる。その線香を盆棚にあげた。盆様は線香  
の煙にのつてやつてくるという。

縁側には洗面器を置く。盆様が足を洗うためという。図は盆送り、  
盆迎えの略図である。(江口)

盆迎えには昔は、米かおはぎのどちらかを重箱に入れて持つて寺へ  
お参りに行く。本尊さんの灯りで線香に火をつけて墓に供え、オアカ  
リをもらつてちようちんにつけて帰る。麦わらを燃すようなオタキア



ゲはしない。(江口)

迎え盆は八月十三日の夕方寺へ迎えに行く。墓へも迎えに行くが、いくつも墓があるから寺へ行けば間にあう、ともいう。もつとも寺に附属したように墓地がある。墓で線香をあげ、寺で火をもらって提灯をともして、それを消さずに家まで来る。縁から上って盆棚の照明に移す。迎え火は燃さない。家で牡丹餅をつくってきて本尊様に供えた。

(斗合田)

土ボツチ 大輪の斎藤家では迎え盆の時にカドグチに土を盛り上げた土ボツチを作って、そこから盆迎えをした。以前は真言宗で、千代田村にも近い方向に家がある。(大輪)埼玉県の羽生や行田市下中条(旧北埼玉郡須加村)などでは現在も盛んに作っているという。下中条では田の土を練り固めた土山を家の入口にあたるカイドに作ってあり、三センチ四方くらいで四角形のもの、前方を低くして二段にしたものなどが見受けられた。(関口注)

施餓鬼 盆の十四日に寺で施餓鬼がある。寺の代々の和尚の施餓鬼をしたり、檀徒の施餓鬼をしたりする。竹の棒に色紙のキリコを付け

て檀徒に配った。その竹を畑に立てて置くと五穀豊饒になるというが、最近では略した。

新盆の家は別に頼んで角塔婆を作ってもらい、新盆棚の脇に置き、盆送りの時に墓に立ててくる。(大輪)

八月十四日の午後寺で施餓鬼をする時に、坊さんがミソハギの小東を用意して、水を含ませて塔婆に水を振りかける。(川俣)

お棚参り 分家に出た子どもが盆棚を拝みに来たとか、隣の家の盆棚を拝みに行くとかする。新盆の家には親戚がお参りに行く。(大輪)

盆中の見舞いには「お静かなお盆でおめでとうございます」とアイサツする。新盆の時には、「お静かなお盆でございます」といった。新盆にはウドン粉とお包みを持っていた。(江口)

盆のときは、分家・本家とも、おたがいに仏様をおがみにいく。お棚まいりという。(下江黒)

親戚、近所などの盆棚のお詣りに行く。「お静かなお盆さまでおめでとうございます。」と挨拶する。アラ盆でも同様な挨拶をする。(斗合田)

棚経。盆の十五日に檀家の家々を坊さんが回る。庭から座敷へ直

接上る坊さんもあるし、玄関から家に入る坊さんもある。盆棚の前に

坐ってお経をあげ

て、位牌の戒名を

読んでくれる。お

礼にお布施を包んで出す。(大輪)

新盆 盆棚を普通の棚と新盆棚を別々に造り、二つ並べて座敷に置く。以前は新盆の棚を



新盆棚 (大輪) (関口正巳 撮影)



新盆棚  
マコモのゴザを二枚並べて敷く(大輪)  
(関口正巳 撮影)



新盆提灯を立てた墓地へ盆送りをする。(大輪)  
(関口正巳 撮影)



新盆送り  
墓地に角塔婆と施餓鬼塔婆を立てる。(大輪)  
(関口正巳 撮影)

特別に造らなかつた。新盆の仏も先祖の仏様の仲間入りをして、同じ棚で祀られた。

軒先へ新盆提灯を下げ、墓地にも新盆提灯を笹竹の先に付けて立てる。(子代田村では庭に高灯籠を立てるが、ここではしない)。(大輪)  
新盆には新しい墓に新盆提灯を立てて、盆の間は火をともし。新盆提灯は笹竹を立てて吊す。寺で角塔婆を作ってもらって墓の脇に立てる。(大輪)

新盆には組立式の盆棚を二つに分けて、向かって左にお盆様、右に新盆様を祀る。新盆の時は、常光寺で角塔婆を書いてくれるので、墓地に立ててくる。盆提灯を八月一日から軒下へ下げ、毎晩灯りをつけて、新盆様の来る道を明るく照らしてやるという。盆提灯を十三日の晩に墓地に立てる家もある。(大輪)

新盆の家では、餅を入れない丸い小さな餅を四十九個と船入りの大きい餅を十三個作り、お寺へ持って行く。小さい方は子供にくれてや

へ迎えようちんをつける。二つか三つ下げることもある。(江口)  
タカンドウロウは板倉の方でやる。

新盆の家では八月一日または七日からアラ盆提灯を軒下へ下げる。家によつては高灯籠をあげる。アラ盆提灯は白張りで、まこもで屋根をふいた。その他盆迎えについては他の場合と全く異なるところがない。(斗合田)

新盆見舞 親戚・隣組・懇意な家から、新盆見舞に来る。普通の盆のお参りよりは、範囲が広くなり、供え物もいくらか多く持つて来る。以前は干しうどん三〜五把、重箱にうどん粉を入れて来た。今は菓子箱などに金一封をのせてうんと持つて行く。

新盆見舞客に対して、酒・肴を出してもなすので、半日もご馳走になる。お返しのみやげ物は、以前はなかつたが、最近はお返しは何か出す。(大輪)

新盆は家によつては盆棚を別に客間などにつくることもあるが、同

り、大きい方はお寺の留守役が食べた。翌朝、寺の鐘が鳴ると、餅を子供にくれるので、「早く行つてもらおう」と、子供はかけて行つたものである。葬式の多くあつた年は、餅をたくさんもらえた。(中谷)

新盆のときは、七夕の夜から軒下

じ場合もある。新盆見舞は、昔は乾うどんを四把か六把、多くても八把くらい（箱入りではない）と線香一箱をもって行った。近年は「御仏前」の金包で、台に線香をそえてゆくようになった。（江口）

仏のノマワリ 盆の十五日の朝、線香に火を付けて持ち、草刈り籠をしょって、杖をつけて歩いて野らへ行く。仏様をおぶって行き、今年の作がらをよく見て下さいと、自分の家の全部の田や畑を回る。その時、作つてある稲株ツを抜いてきたり、里芋・サツマイモを掘つたり、豆や納も抜いてきたりする。四色取るものだという。取つたものは籠に入れて来て、盆様に上げ、お茶を入れて飲んで休んだ。（大輪）十五日の朝、線香をつけて田畑を回る人もいる。自分の家の田畑のよく突のつたイネ株やサトイモ・サツマイモなどを取つてきて、盆棚に供える。

「仏のノマワリ」といい、田畑を回つて、大豆・トウキビ・トマト・里イモ・サツマイモなどを取つてきて盆様に供える。この時に新しいこやしぎるをおろして、入れて来る。このぎるは三月彼岸のころ、小泉稲荷の「社日ぎる」を買つて来たものを初めて使う。仏様をおぶつて行くまねをする人もいる。（大輪）

盆の十五日の朝、何も持たずに行つて、作つてある畑の近い所を回つて来る。この時、稲の穂や野菜などを取つて来て、そのまま盆棚に供える。野菜はてんぷらにして供える家もある。（川俣）

八月十五日の朝早く、線香に火をつけて主人が杖をついて野まわりをした。自分の家の田畑を歩いてできた芋や枝豆をとつてきて仏サマに供えた。（江口）

仏の野まわりは十四日に百姓をしている人がする。その家の主人が、家を出るときは線香に火をつけて出て、田や畑などその家の所有地は全部（貸してある土地も）まわり、盆さんに農作物のできぐあいを見てもらおう。まわりながら枝豆とか、サツマイモ・稲穂とかをとつて来て盆棚に供える。（江口）

仏の野まわりは八月十五日の朝、メカイモをもって田畑に行き、稲穂・芋・サツマ・マメ（大）・とうもろこしなどをとつてきて盆棚に供え、それらは送り盆のときいっしょにカドまで出してしまふ。仏様のおみやげだという。（斗合田）

盆送り 十六日昼食にウドンをあげてから寺まで送る。そのときナスで作った馬の手綱としてウドンを背中につけてやる。（入ヶ谷）

送り盆は、盆の十六日に昼食を食べてから、家族の者が集まつて、盆棚をこわして、供えてあつた物をカツモゴザに包んで座敷から外へ持ち出す。盆棚の竹や盆花、ナスやキュウリの馬、供えてあつた稲・里芋・ナシなどの野菜や果物などを持ち、盆に供えるダンゴや水（やかん）・灯をつけた提灯などを持って出る。

屋敷のカドを出た道端や三本辻、墓地の傍の道端などで、竹や麦わら・カツモゴザなどを燃やす。仏様がその煙に乗つて帰るといふ。その場所にナス・キュウリの馬を外に向けて置くと、仏様がその馬に乗つて帰るといふ。そこに線香を立てる。

夕方、三時ごろまでに盆送りをする。あまり遅くすると、皆と一緒にに行けないという。夕立が出ないうちに送り出す。（大輪）

大輪の常光寺の墓地へ盆送りに行く。常光寺は無住だが、本堂に供え物の台が飾つてあるので拜んで来るが、墓地の方が主になって、本堂はついでに拜むくらいである。

十四日の施餓鬼の時に寺で作つてもらつた塔婆を墓地に立てる。（大輪）

送り盆は十六日の昼食を食べてから、ゆつくり送り出す。ナスの馬やキュウリの馬を作るが、箸で足を四本つけ、シッポはトウモロコシの毛を付ける。（二頭に付け、他方には付けない）。うどんを手綱のかわりに、ナスの馬に引掛ける。堅くゆでた半ゆでのうどんで、盆棚の縄にも吊り下げる。（大輪）

十六日の昼食後、休んでから盆棚をこわす。盆棚に敷いたマコモン



盆送り

道ばたで盆棚の笹竹や供え物、麦わらなどを燃して送り火とする。(大輪)

(関口正巳 撮影)



盆送り

盆棚を崩して、供え物を送り出す。(大輪)

(関口正巳 撮影)



寺の盆棚 (大輪) (関口正巳 撮影)



盆送り

家を出たカイドで送り火をたく。その後、墓参りをする。(大輪) (関口正巳 撮影)



盆送り

道ばたで、盆棚の笹竹やマコモゴザなどを燃して送り火とする。その後墓参りする。(大輪)

(関口正巳 撮影)



盆送りの供え物 (大輪) (関口正巳 撮影)



盆送りのナス・キュウリの馬 (須賀)  
(関口正巳 撮影)



盆送りの供え物 (大輪) (関口正巳 撮影)



盆送り  
マコモゴザの上にナス・キュウリの馬と供え物をのせて道ばたへ出す。盆棚の笹竹を立て、麦わらを送り火に燃す。(須賀) (関口正巳 撮影)



盆送り (大輪) (関口正巳 撮影)



盆送り  
マコモゴザに供え物をのせて、道ばたに出す。  
(須賀) (関口正巳 撮影)



盆送り  
ナス、キュウリの馬には、うどんの手綱をつける。(大輪)  
(関口正巳 撮影)



盆送り  
道ばたに笹竹を立て、供え物をする。(川俣)  
(関口正巳 撮影)



盆送り  
道ばたに笹竹を立て供え物をする。(川俣)  
(関口正巳 撮影)



盆送り  
墓に水、線香、花、だんごなどを供える。(川俣)  
(関口正巳 撮影)



盆送り  
道ばたに送り出してから墓参りする。(川俣)  
(関口正巳 撮影)



盆送り  
道ばたに笹竹を立てて、供え物をして送り出す。(川俣)  
(関口正巳 撮影)



盆送り  
道ばたに送り出す。(川俣)  
(関口正巳 撮影)



新盆送り (大輪) (関口正巳 撮影)



盆送り  
墓地の入口の六地藏の前で線香に火を付ける。  
(大輪) (関口正巳 撮影)



盆送り  
墓に線香、だんご、水を供える。(大輪)  
(関口正巳 撮影)



盆送りの墓参り (大輪) (関口正巳 撮影)

ざに供え物を包んで出る。イモの葉にナスをアラレ切りにしたものを入れて、盆様のみやげ物とする。米の粉のだんごを真丸く作って行く。(丸くないと根性が曲つているという)。盆棚に飾った笹竹や古い造花の盆花、生き花なども持ち出す。道ばたで笹竹や盆花などを燃やして送り火とし、ナスの馬を置き、供え物をする。水・線香を供えて盆様を送り火の煙に乗せて送り出す。それから寺の墓地へお参りに行く。  
(大輪)

須賀は十五日の夕方に送る。大輪は十六日の夕方送るので、隣の地区でも日が違う。マコモごに盆花・造花・生き花・トウナスやカワラケに盛ったおはぎ、ナス・キュウリの馬などを載せて、三本辻などの道ばたに送り出す。盆棚の笹竹をそこで燃し、線香に火をつけて供える。(須賀)

盆送りは墓地の北の十字路の道ばたに、持って来た笹竹や盆花、供え物などを並べて、笹竹などを燃やして送り火とする。笹竹を立てて、



盆送り  
盆棚の笹竹や提灯をもって、墓参りに来る。  
寺の入口の六地藏に供え物をする。(大輪)  
(関口正巳 撮影)

その前に供え物を並べる家もある。その後、墓参りをして水や線香を墓に供える。(川俣)

盆送りには家族がそろって水やかんか瓶に入れて持ち、提灯・線香を持って墓地へ行く。墓に水をかけ、線香を供える。(大輪)

松林寺の檀家は寺へ盆送りに来ると、入口の六地藏の所で火をつけた線香や水・だんごなど供えてから、墓地へ行く。墓に線香・水・だんごなどを供えて拜む。帰りに本堂に掲げてある地獄絵を見ていく。地獄絵は掛軸に極彩色で描かれている。(大輪)

盆送りはふつう十六日だが、須賀ではいつまでも盆様を置くと、水が出るというので、一日早く送るといふ。ふつうは十六日の昼食を供えてから二時ごろ送り出す。盆棚をこわして、笹竹や供え物を持って墓参りに行く。途中、四つ辻や堰堀のへいに送り出し、送り火を焚く。

迎え火はしないが送り火は焚くので、盆棚の笹の葉とマコモご、七夕のマコモ馬などを燃す。ナスをあられに切ってガワラケ(土器)に盛って、里手の葉に載せて、ナスの馬とともに四つ辻へ送り出す。造花の盆花の古いのも一緒に出して立てたり、燃したりする。だんごを持って行って、墓に供える。(川俣)

八月十六日の昼すぎに送った。送る時には、カイドウで小麦わらを燃した。馬は午前中につくった。馬はナスで、しっぽはトウモロコシの毛を使っていた。カイバといってナスを細かくサイの目に切つてあげた。(江口)

送り盆は十六日の昼食後送る。ナスとキュウリの馬をつくる。オガラを足にする。それに干しうどんを二〜三本かける。うどんは手綱だという。それを箕の上に載せて送り出し、家の門に置く。そこで送り火をたたく。そのケブのつて仏様がかえるという。(斗合田)

ナス・キュウリの馬 ナスやキュウリにおがらを四本ずつさして馬の形を作る。うどんを背に掛けて、手綱にする。仏様が乗って帰る馬だといひ、盆送りの時に持って行き、道端に置いて来る。(大輪)

ナスとキュウリで馬を二ひきつくり、なすをこまかく切つて馬のえさとし、蓮の葉(いまは里いもの葉)の上のせて送り出す。(江口)

盆送りの土盛 送り出す所には、わずかに土を盛ったところで送った。七夕の竹を切つて線香立てにした。土盛りは一尺四方の大きさと兼でつくった。高さは二寸くらい。(江口)



松林寺本堂の盆棚と、地獄絵(掛図) (大輪) (関口正巳 撮影)



エンマ様の地獄絵(掛図) (大輪、松林寺) (関口正巳 撮影)

十三日 盆の十六日の夜は「十五十杯」といって、ヨゴレ飯(しょうゆ飯)をお茶碗に十杯盛って仏壇に供える。ナスヨゴシを作つて供える家もある。(大輪)

寺に地獄・極楽の絵を描いた「ジオウ様の掛軸」を掛けて、盆の十六日に盆送りに来る人々に見せた。

家では茶飯と豆腐汁を夕飯に作つて供える。茶飯は米をといでしようゆやキガラ茶を入れて色を付けて炊く。ツラ

ヨゴシということばは使わない。(川俣)

盆中の殺生 盆中には生き物を殺してはいけない。盆が近づくとカッパに引きこまれるから水浴びをしてはいけない。(江口)

盆踊り 八木節やからかさ踊りという古い盆踊りもあったが、あまりなかった。(大輪)

アイノコ 旧暦七月と旧暦八月の間、新暦八月十六日をいう。(大輪) 地藏盆 やらない。(江口)

かかし 盆の十六日にかかしを立てる話など聞いたこともない。(江口)

生き盆 しなかった。(大輪) 生き盆ぶるまいはこの辺にはそういうことはない。(江口)

うまやこい 盆の十六日には、うまやこいを出してから遊ぶきまりになっていた。(江口)

盆月の死者 盆月に死んだ人には、頭に土ホウロク・シラジ(すり鉢)・カワラケ(土器)などをかぶせて、埋葬する。その訳は、先祖たちがお盆に来るのに、その人だけがあの世へ行くから、途中で行き合

う先祖たちにげんこをもらうので、かわいそうだからという。(大輪) 盆中に死者があると、頭にカワラケをのせてやった。盆様たちがお

客に行くのに何故行くのだとて頭をぶたれるからといつている。(江口)

盆中に死ぬとその死者の頭にシラジを被せる。仏様がお盆で帰ってくるのに、出かけていくのでけしからんとて頭をこすかれないように。

(千津井) 盆の食事 盆迎えの晩にもちをつく。もちは台所ですいた。もちはあべかわにして、仏様にあげる。また、よく日、もちをあた

ためて盆様にあげる家もある。(矢島) 盆の食事は「盆はボタ餅、昼間はうどん。夜は米の飯・トウナス汁

よ」と、盆踊り歌の文句通りに作る。(大輪)

	朝	昼	晩
13			キナコボタモチ
14	キナコボタモチ	ウドン	米の飯 トウナス汁
15	キナコボタモチ	ウドン	米の飯 トウナス汁
16	キナコボタモチ	ウドン	

盆中の食事は「盆にヤボタモチ、昼間はウドン、夜は米の飯トウナス汁よ」という。盆中は暑くていたみやすいのでキナコボタモチをつくった。(江口)

盆の食事

十三日 夕 キナコのぼたもちとうどん  
十四日 朝 ヒキ茶を供える。

十五日 朝 キナコぼたもち  
夕 飯

十六日 朝 キナコぼたもち (江口)  
夕 飯、ケンチン汁(玉井家)

盆の昼食にうどんをつくるがヒルパチエということばは聞いたことがない。盆

の客のもてなしはうどんである。(江口) あんこのぼたもちは彼岸のときだけで、盆のぼたもち

はキナコのぼたもちをつくる。(江口) 盆の牡丹餅はあんをつけず、黄粉をつけること

に黄粉をつけた牡丹餅をすると、「盆でもありもしねえに盆みてえだ」と

いった。八月十三日は夜、八月十四日は朝牡丹餅をした。(斗合田) 別火 盆の期間中屋外で煮炊きする行事もない。(江口)

九 月

二百十日(二日)

二百十日 以前は区長がオフレを出して、集落の者が農作業を休んだ。常使いという大輪の小使いがいて、フレを出す時は「アシタ二百

十日、アスバレヨウ」と、どなつて回つた。常使いにはムラから五十銭ずつ手当てをくれた。

風祭りはしない。(大輪)

二十十日には、「お静かでおめでとうございませす」という挨拶はしあつたりするが、二十一日も二十日も特別のことは何もしない。(江口)  
二十十日は荒れる日だといわれていた。二十二十日も荒れた。二十二十日が無事でよかつたね」という挨拶をしたものだ。「まだ、二十日があるから」などといつたりした。この日が無事だとボタモチをつくつて祝つた。(江口)

二十十日をオコトともいい、この日は嵐が来ないようにとまんじゅうを作つて祝つた。(千津井)

### 八朔の節供(旧八月一日)

ハツサク 嫁婿の節供で、嫁の実家と仲人の所へ、新しく取れたものをみやげにして、金一封を持って行く。ショウガを特別に持つて行くことはない。里に初めて行くについては、嫁にメリンズなどのいい着物を着せてやる。実家からはお返しに箕を二枚もらつてくる。「身を返す」とか、かつ込むためとかいう。(大輪)

八朔の節供はそういうだけで行事内容は不明。(川俣)

嫁・婿二人で嫁の実家へお客に行くが、お金を少し持つて行くほかは、何も持つて行かない。(南大島)

「御節供には嫁が、御節供」と書いた金一封をもって実家へ帰る。お客から帰るときには、実家で作つたオケエハクボタモチをオカエシとしてもらつて帰る。(江口)

江口では箕と柶を後から実家より届けることはなく、ことばだけが、斗合田ではやつてゐるという。(江口)

八朔の節供は旧暦八月一日。嫁は実家に帰つた。土産に箕や一升ま

すをもらつてきた。箕は「身が入るように」という意味。(江口)

### 十五夜(旧八月十五日)

十五夜 旧八月十五日の夜、廊下に十五夜花(シオン)やススキを五本、花びんに水を入れて飾る。供え物はまんじゅう(くず米の粉や小麦粉のまんじゅう・ぼた餅・イモの煮ころがし・生サツマイモ・里イモ・ナシ・カキなどの果物を十五個か五個、箕に入れて供えて置く。子どもが下げて歩くが、下げてもらえば縁起がよいという。(大輪)

十五夜にはだんごやまんじゅうを作つて、十五個または五個を月に供える。里芋・サツマイモ・カキなどの野菜・果物も一緒に縁側に供える。(川俣)

十五夜は旧暦八月十五日。梨・栗・里芋・サツマイモなどを箕に入れて縁側に飾つた。ススキ五本と紫色の十五夜花を花瓶にさして飾つた。お神酒とお燈明もあげた。ボタモチをつくつて供えた。子供たちがボタモチを下げに歩いた。下げられると縁起がよい。この日は何を盗つてもよいといわれていた。(江口)

十五夜にはすすきを十五本(または五本)と、十五夜バナとよんでいる紫の濃い花を一本とつて来てかざり、栗・梨・柿・ぶどうとぼたもちを供える。ぼたもちもあんこの家もあればきなこのぼたもちの家もある。玉井家では月見だんごもつくつて上げている。十五夜の供えものは早く下げられた方がエンギがよいといわれ、昔は子どもたちが大きい袋をもつてきて「下げに来たよ」とひと声かけてもらつてまわつた。(江口)

旧暦八月十五日は十五夜で、縁側に果物、ススキ、団子をお月様に供えるといつておいた。子供たちは団子を下げに行つたものだ。(千津井)

十五夜にはすすきを五本、果物五種(梨・柿・りんご・栗など何でもよい)、月見団子をつくらないで牡丹餅等を供える。子供はヌスツト

してよい。(上江黒)

十五夜は月祭りであるから丸いものをつくって供える。お萩・饅頭・十五夜団子など。くだものも、縁先に飾る。これの子供が下げにくく、とられた方が縁起がよいともいうし、また悪いともいう。十五夜に月を拝めれば大麦があたるし、十三夜に月を拝めれば小麦があたるともいう。(斗合田)

### 秋の彼岸 (秋分の日)

秋の彼岸 九月彼岸の日に春彼岸と同じように祀る。墓参りをして、墓にだんご・水・線香を供える。果物はまれに供える程度。

中日にはボタ餅やキナ粉ボタ餅(オハギ)を作る。(大輪)  
彼岸には近い親戚の者が彼岸参りに行ったり来たりする。牡丹餅をつくる。(斗合田)

### 社 日

社日 大泉の社日神社(先年から社日稲荷となる)へお参りに行く。長良神社の境内にも、東向きに社日様があるが、特別に家では祀らない。(大輪)

## 十 月

### 十三夜 (旧九月十三日)

十三夜 旧九月十三日に十五夜と同じに縁側に供え物をして祀る。供え物が十五夜と違うのは、ススキが十三本か三本になる。野菜・果物はカキ・ミカン・サツマイモなどを箕に入れて供える。(大輪)

十三夜は十五夜と同じ物を縁側に供えるが、数は十三個、または三個にする。大根を特別供えることはない。(川俣)

十三夜にはすすきを十三本(または三本)上げてやさいなどを供え

る。(江口)

十三夜は旧暦九月十三日。十五夜と同じようだが、ススキを三本にした。十五夜花もあげた。供えものは十五夜とほとんど同じ。(江口)  
十五夜に曇ると大麦が不作で、十三夜に曇ると小麦が不作という。

(江口)



十三夜の供え物  
ススキ13本、カキ、クリ、まんじゅう、うどん、里芋、サツマイモ、灯明、(大輪 早川水門家)

(早川久美 撮影)



十三夜の供え物一縁側に出す。

(梅原 恩田万吉家)  
(早川久美 提供)

月をすると親  
が欠けるとも  
いう。(江口)  
十三夜は十  
五夜同様の月  
祭り。十五夜  
をよその家で  
したものは、  
十三夜もその  
家でなければ

十三夜は旧暦九月  
十三日。団子とスス  
キを縁側にあげた。  
十五夜に天気がいい  
と大麦があたる十三  
夜に天気がいいと小  
麦があたるという。

(千津井)

片見月 片見月は  
よくないという。出  
かけた先で十五夜を  
したら、十三夜も外  
でしろという。片見

ばいけない。「片見月」はいけない。(上江黒)

十三夜は十五夜と同様である。嫁さんは片見月をするものではないという。つまり、十五夜を婚家で見たら十三夜も婚家で見なければならぬという。(斗合田)

## 秋 祭 り

秋祭り 旧九月十五日に長良神社の秋祭りがある。神社にのぼりを立てて記る。中ノクンチ(旧九月十九日)に何かする(お祭りをする)所もある。

イツケの宮(イツケごと)に記る石宮や祠)があつて、明治四十二年に神社合併で合祠したが、村祭りの後で、イツケごと)に記る。これを「小宮祭り」という。(大輪)

十月十五日が村の秋祭り・オ日待で、当番の人が神社へ行き、掃除してハタを上げ、半日は当番をしている。旧千江田地区の祭りということで、運動会の日とまぎらつていた。(江口)

オクンチはしない。(江口)

## 小 宮 祭 り

小宮祭り イツケの宮を記る行事をいい、旧九月の九日とか、二十五日とか、違う日を選んでイツケごと)にお祭りする。村祭りの後にするようにして、赤飯をたいて祝い、近在の親戚と重箱で赤飯のやりとりをする。

西浦組は五、六十軒あるが、大神宮(外宮・内宮)を旧九月十五日に記る。水道タンクの下にりつばな社)があつたが、明治四十二年に長良神社へ合併した。神社の土地は合併したが、祠は残っている。人形が一対入つており、若い衆が集まって祀つた。

下の衆は神社合併の時、三島・天神とも残した。松本イツケではゴ



鎮守正一位長良大明神(大輪)  
(早川水門 撮影)



長良神社(正面)に合祀した各コウチの小宮  
(左側)のホコラが建物中に入っている。  
(大輪) (早川水門 撮影)

リヨウ様とヒジリ(聖)様を記る。いい伝えでは、兄弟三人で大阪を見限つて、ここへ流れて来た時に、兄が大神宮、第二人がゴリヨウ様を祀つたという。個人持ちだが、イツケ四軒で記る。一反が少し欠けるくらいの土地があるので、土地の小作のあがりて、五人でモリをした。(大輪)

コビマチ コビマチはオヒマチ(旧暦九月十九日)のあとにやつた。たいてい里芋がとれてからだつた。カミコーチは旧暦九月二十三日、ウシロコーチは旧暦九月二十九日であつたので呼びっこをした。(田島)

十月中に屋敷鎮守をまつるコビマチがあつた。村うちの親せきの間の祭りで招んだり招ばれたりで行き来した。屋敷鎮守(稲荷さま)に上げものをした。



長良神社ののぼり 明治21年に作り、昭和29年に複製したもの。山下雪憲書（大輪）  
（早川水門 撮影）



八坂神社ののぼり明治21年に作る。  
早川備舟書（大輪）

（早川水門 撮影）



村の要所に立てるのぼり明治21年に作る  
関戸明堂書（大輪）（早川水門 撮影）

れないが、忙しくていかげんにした縁組は、あとではずれる。この月に家に残っている神様は恵比須様である。十月二十日には恵比須講をする。（梅原）

神無月は旧暦十月、神様が出雲の大社に行つて縁談の相談をしていく。留守居をする神様はエビス様とオカマ様で、日は

### 神無月（旧十月）

正月のセチヒマチと同じようである。（江口）

神無月 旧十月は、神様は出雲へ出かけていて、留守だという。神様は、出雲へ縁組みに行つてくるといった。

この間、留守をしているのは、かまがみさま（へつっいの神様）である。この神様は子どもの数が多いので、留守居をしているのだという。（大佐賀）

旧十月は神様が出雲国へ集まつて会議をするというので、旧十月一日には神送りのため、長良神社へお参りに行つた。朝暗いうちに送りに行くので、早い人は午前一時ごろ行つた。神様の道中の無事を祈るため、縁結びを頼むためとはいわなかった。（大輪）

神無月の十月は土地の神様がみな出雲に出かけて、ムラの若者の縁組みを相談してくる。神様にいいいに相談してもらつた縁組はこわ

不定だが、オカマの団子をこしらえて食べた。嫁は実家に泊まりに行つてもよかつた。旧暦十一月一日には神様が帰ってくるので、諏訪神社におまいりに行つた。（江口）

旧暦十月を神無月という。旧暦十月一日には、神々が出雲に出かけてしまふ、オカマサマは子供が十六人もいるので留守をする。それでオカマの団子をつくつた。

十一月一日は神々が帰ってくるので、鎮守様におまいりに行つた。（千津井）

「死ナバ十月十日ガイイ」という。取れ秋で米も芋も取れるし、陽気もいい。何不自由ない時期である。（川俣）

十一月

十日夜(旧十月十日)

十日夜 この日は、もちをつけて祝った。

わらでつぼうで、子供たちが庭先などをたたいてあるいた。こうすると、大根が首をもちあげるといった。(音にたまげて首をだすという)

もちはあんぴんで、箕にいれて、縁側のところに供えた。お月様にあげるという気持である。(大佐實)

十日夜はお餅をついてお月様にあげる。ワラデッポウを作つて庭をたたいて家々を廻る。そのときの唱え言は「十日夜ノワラデッポウ、麦も小麦もヨクデキロ」という。(大佐實)

十日夜は旧十月十日、餅をついて供え餅を十個作り、お膳いっばいに並べて、箕に入れて、野ら(田畑)から庭へ運んだ稲束の上に上げて供えた。今は月が見える縁側に供える。餅は十日に新米でつくが、「十日夜の餅はきめよくつけ、餅に粒があるようでは家にジャンカ(あばた面)の子ができる」という。大根などは供えない。(大輪)

ワラデッポウ 新わらを縄で巻いて、ワラデッポウをつくり、子どもが地面をたたき回る。兵隊ごっこみたいにして遊ぶ。その時に「十日夜、ワラデッポウ、勝ツカ負ケルカ、ヤツテミロ」という。(大輪)

十日夜は餅をついて神棚に供えた。餅は庭には出さない。数は不明。わら束の中にイモがらを入れて縄で巻いてワラデッポウを作り、地面をたたく。この時「十日夜、十日夜、十日夜ノワラデッポウ」と唱えた。モグラオイだという。(川俣)

十日夜の晩に、子供達はワラデッポウを作る。「トウカンヤノワラデッポウ、麦も小麦もヨクデキロ」と言いながら大地をたたき歩く。中にイモガラを入れると良い音がする。(中谷)

わら鉄砲の芯に里芋の茎を入れた。これで地面を叩くときに「オオ

シ(志、行田の地名か)ノデンボニ負ケルナ」と言いながらたたいた。(新里)

十日夜には外に白を出し、青空の下でもちをつき、会席膳に十二個のもちをつくつて表の戸を開け、月の見えるところへかざつて上げる。子どもたちはわら鉄砲をつくり「十日夜ノワラ鉄砲、麦も小麦もヨクデキロ」と唱えながら家のまわりをたたいてまわる。あとは放り出す。(江口)

十日夜は旧曆十月十日。稲わらでワラデッポウをつくつた。中には里芋のガラを入れて、いい音が出るようにした。「トウカンヤノワラデッポウ、麦も小麦もヨクデキロ、人参大根ハネノケロ」といいながら子供たちがたたいた。「もぐらがもたない」という。隣ムラの子とよくケンカをしたものだった。梅原とよくケンカした。千津井は旧千江田村で同じ学校に通っていたのでケンカしなかった。お月様のまつりで餅をついて縁側に進めた。(江口)

十日夜は旧十月十日。餅をついて箕の中に一〇こ入れて縁先に供える。かえる、へびその他あらゆる畑の虫におわびするのだという。子供たちはわらでつぼうをつくつて地面を叩き歩くが、その時の唱えごと。

十日夜のわらでつぼう  
麦も小麦もよくできろ  
人参ごぼうも太くなれ(上江黒)

十日夜には、ワラデッポウをつくる。中にはヤツガシラのじくを入れて良い音が出るようにした。

子供たちが「トウカンヤノワラデッポウ、麦も小麦もよくできろ、人参・大根はねのける」といいながら庭をたたいて歩いた。

十日夜には餅をついて、十日夜様にあげますすといつて縁側に出しておいた。(千津井)

十日夜の餅を十日の夜つく。その餅は仏様に供える。一〇個あるいは一三個。アラ盆の家ではその餅を寺へ持っていった。小さく丸めて塩餡の餡餅にして四十九個。この餅を「四十九」あるいは「十三仏」といって、寺ではお参りに来た人に分けてくれた。しかし買いに來る人が少ないので、餡餅をはたいて干しておいたものだ。子供たちは蕪鉄砲をつくって叩き歩いた。蕪鉄砲の中に芋がらを入れるとよい音がした。そのときの囀え歌。

十日夜の蕪鉄砲

麦も小麦もよくできろ

のらの大根つきぬけろ(斗合田)

### 七五三(十一月十五日)

七五三(十一月十五日) 明治時代には男児三歳(数え年)と五歳、女児は七歳になると、旧曆十一月十五日に、子供に晴着を着せて氏神に参詣して感謝の誠を捧げ、益々健康に育つ様に祈願をした。赤飯を作って神に供え、親戚・知己を招待し、酒肴を供して祝宴を行った。漸次簡略になり、男児は五歳の時持着の祝いとし、女児は七歳の時帯解きの祝いとして祝った。最近では男女共に数え年七歳の時に、単に七五三の祝いと称して祝う様になったが、近頃は大分派手になって盛大に祝うようになった。神詣や親戚・知己等を招待して酒肴を供して祝うことは変わりが無い。むしろぜいたくになっている。(大輪、早川水門)

### エビス講

旧十月二十日

新十一月二十日

エビス講 旧十月二十日の秋のエビス講は百姓のエビス講でカキ餅(柿の実をむしコウセンを入れて掻きまわし餅にしたもの)をエビス様に供える。その他御飯、吸物、オカシラツキ、ヨゴシ等二膳、足つ

き膳で横膳で供える。(大佐實)

エビス・大黒は神無月でも出かけないので、エビス講を旧十月二十日にする。オロシ(下屋)の棚にエビス・大黒様がいるので、そのご神体や掛軸を座敷に出す。本膳を用意して、ご飯・ケンチン汁・尾頭付の魚(秋はサンマ、正月にはイワシ)などを盛って供える。ご飯は春は少しだが、秋は収穫物がうんと取れるように、山盛りにする。カケ餅といって、生きたザツコ二尾(オス・メス)をそろえてどんぶりに泳がせて供える。(正月も同じにする)。エビス講という左膳やタテ膳にはしない。今は茶ぶ台を使う家が多くなった。

タネ銭を一升ますに入れて、「今度までに一升にしてくれ、倍にしてくれろ」といって、家中の者が金を供える。タネ銭は家の新築祝いの時に、一銭・二銭とかくれたものをしまつて置く。今はご縁があるように、五円を供える。(大輪)

秋のエビス講はいっぱい飯を盛って、夕飯の時に供える。(大輪)カケブナ 十二月二十日がエビスさまのお祭り。生きている鮒を、どんぶりに入れて、エビスさまに供え、翌朝井戸の中へ放してやる。(中谷)

エビス講は旧曆十一月二十日。エビスさまを出してザシキに飾る。ケンチン汁とゴハンをあげた。カケブナを二匹飾り、おわると井戸の中に入れて。供え物は「何万円でも買います」といって下げた。一升ますの中に通い帳を入れた。お神酒、お燈明もあげた。(江口)

柿餅 エビス講は十月二十日。秋は百姓のエビスといひ、朝祝う家と夜祝う家がある。このエビス講にかぎってカキモチ(柿餅)をつつくって食べた。そのため柿の実をウムして(熟さして)おきて、真赤に甘くなつたのを、大麦をいって香煎にした中に入れてかきまわして饅頭状にしたものである。中に柿の種が入っていると、「小判」だといって喜ばれた。もとは「オイベスコウが来るから香煎ひかねばならない」などよくいわれたものである。(斗合田)

## オカマ様

オカマノダンゴ オカマ様は神様ではないので、神無月でも、出雲には行かない。カマドが留守居するの祝ってやる。秋の取り入れが終わるとやつたので、霜月の行事だった。

嫁・婿にくれた人呼んで、新米のくず米でアンコロ餅やボタ餅・ダンゴをこさえてご馳走した。ダンゴといっても、新米をついて丸めてアンコにくるんだもので、アンコロ餅である。三升餅を一臼もついでこさえたり、手でこねたのもあり、オカマ様に供えてから下げて食べた。

嫁に行くとなかなか実家へ帰れないので、呼んでご馳走してやる。呼ばればお客に来られるから。以前は庚申様と一緒に祀ったこともある。(大輪)

秋のニアガリをしてから、オカマノダンゴをこさえて、かまどの上に供えて祀る。(須賀)

オカマノダンゴは十月のいい日に、親が嫁にやつた娘を実家に呼んで、米の粉でだんごを作つてご馳走する。嫁は実家へお客に来る日で、オカマノダンゴというだんごを、重箱に入れて買ってくる。(川俣)

オカマ様と隣りにエビス様を、台所の上に祀る。(川俣)

秋のとり入れがすんだ時に、嫁に行った娘を里によんで、米の粉のだんごに餡をまぶしたものを食わせる。これをオカマノダンゴと呼んでいる。神無月にするので神さまのいないルスンギョウだとも言う。

(中谷)

秋のオカマサマといったが、日は別に決つていなかった。嫁は実家に泊りに行った。家から外へ出た人たちは、招待され泊りに来た。「オカマの団子によばれる」といつて来た。この団子は、アングンゴといつて、アンを作つた中に団子を入れたもので団子の外にアンのついたものだった。(南大島上)

オカマノダンゴは一切の秋の作業がすんだところで嫁をユサン(実家)にやる。そして家から出た娘をよぶ。御馳走してくれる。嫁はゆつくり休んで帰る。オカマ様は神々が出雲へ行くのに残っているのでルスンギョウ(留守行)するのだという。(上江黒)

## 五十五ノダンゴ

五十五ノダンゴ 親が数え年の五十五歳になると、子どもの家に呼ばれて、だんごをご馳走になる。だんごは小さいのを五十五個作り、あんこにくるんでくれるが、食いきれないとよくないので、小さく作り、椀に盛つてくれる。(大輪)

## 取納祝

鎌アガリ 秋の稲刈りを終えた晩に、鎌を掃除してヘツツイに上げて、米の飯をたいてオシラキに盛つて供える。(大輪)

カマアガリは稲を刈り終つた後、箕の中に鎌をよく洗つて並べて、その鎌にごちそうを供える。(中谷)

ニワアガリ 庭の干し物が終ると、米の飯をたいてオカマ様に供える。鎌アガリと一緒にしている。(大輪)

穴ツブサゲ 秋の麦蒔きが終ると、ボタ餅をついて祝う。ネズツブサゲとか、モグラモチとかいわない。(大輪)

ツジダンゴ 足もとにこぼれているツジ米(石混じりの米)をためると、五く六升できる。布につけてはいたが、どうしても小石が混じる。それを洗つて石臼でひいて粉にする。ダンゴにして、みそ汁に入れて食べる。(大輪)

オナベ 夜なべ仕事は秋のモミスリ後、十一月に始まり、正月は休んで春の彼岸まで続けてやる。一晩に一ボウ二十尋の縄を五ボウずつなう。細いコデ縄なら二ボウ(膝を立てて足に五十回巻くと一ボウの長さになる)を一晩になうのが、オナベの一人前といわれた。(大輪)

オヒナタ 冬のあたたかい日をオヒナタといった。オヒナタは栃木県野木町の野木明神と関係あるという。板倉町高鳥では、「野木の明神様のお祭」というのを神無月にやっていた。(江口)

大祭のことをオヒナタともいった。この日を「オヒナタだからあつたかい」という。

明治末年には、栃木県野木町の野木様に行った。(千津井)

## 十二月

### カビタリ餅(二日)

カビタリ餅 十二月一日に餅を一日ついて、祝う。その餅の半分を取って、コウジを入れてついて、カメに入れて置くと餅甘酒ができる。正月までねかせて置いて、甘くてとろとろになつてうまいのを飲む。(大輪)

カワビタリモチは十一月一日に餅をついて、水神さまに供える。川へ行って、小さなお供えをひとかさね、キリツブ(水の流れを調整するための石)の上に置いてくる。水難よけのための祭りである。(梅原)

かわびたしもちというような話は聞いたことがあるが、もちをついたことはおぼえていない。もしついたとしてもまだあたたかいのでかぶるのが早くて長もちしないからつくらない。(江口)

川びたりは十二月一日。朝、餅をついて水神様にもついていた。(斗合田)

油餅 聞かない。(大輪)

油もちも聞いたこともないし、ついたこともない。(江口)

### 神迎え(旧十一月一日)

神迎え 旧十一月一日に神様が出国からお帰りになるので、神社

へ出迎えるためにお参りに行った。(大輪)

### 師走八日(八日)

師走八日 この日のことを、「音モナラサヌコト八日」といって、風呂もたてなかつた。メケエ(メカイ)を樺の先につけて庭先にたてた。これは、鬼がこれを見て、目が多いのでおどろいて、家へ近づかないといった。

師走八日の日には、機織りも早じまいにした。子どもの時のこと(大正時代)。(入ヶ谷)

十二月八日に、ミケエを竹の竿につけて庭先にたてた。これをコトハジメといった。二月八日には行事はなかつた。

この日は、奉公人のでかわりだった。奉公人はうちへ帰った。(大佐實)

十二月八日はメケイを庭先に立てる。コトハジメである。また奉公人のデガワリで実家に帰る日。奉公人のいる家では五日

一週間ひまをやる。(大佐實)

十二月八日にヤキビン(焼餅)をこしらえる時、メケエ(目籠)を逆さにして竹竿の先に掛けて、オモヤ(母屋)のひさしに立て掛けた。

この日はヤクジン神が通るので、厄神より目の多いものがあると見せるようにした。ネギは焼かなかつた。(大輪)

十二月八日を師走といひ、竹の先端にミケエをかぶせて庭先高くたてた。これは鬼よけといわれていた。この日は、だんごをつくって食べた。履物を外に出しておくと鬼に持つていかれてしまうなどといった。(千津井)

オコト またはコトビという。変り物をつくって食べる。またその日をいう。(上江黒)

物日や節日のことをオコトまたはコトビといった。特別なご馳走をつくるるときなどは「オコトやるべえ。」ともいった。

これに対して普通の日のことをツネという。(斗合田)

オコト、またシウス八日。十二月八日には竹の竿の先にミケ(目籠)を下むきにつけて掲げた。板倉町の榎谷では「マモノに反応されちゃあかなわねえから贈物はみんなくせ。」と書いていたという。(斗合田)

ネロハ 十二月八日には、竹竿の先にミケエ(メカイ)を立て、主家のひさしきわに立てる。この日「いつまでも起きているとネロハが来る」といわれる。(江口)

この日は竹の先にメカイをさして庭先高く立てた。「ネロハ」といつて早く寝るものだという。メカイは魔除けであった。(江口)

師走八日は番頭の出代り。一つ目玉が通らないうちに、竿の先にメケエを立てた。師走八日に寝る馬鹿と二月八日に寝る馬鹿といつて、二月八日には、「早く寝ろ」といった。(斗合田)

八日ヤキビン 十二月八日の夕刻、竹竿の先にミケエを付けて、庭から軒に立てかける。鬼が屋敷に出来ない呪いでミケエは目がえらいから、鬼が入らないという。ミケエは次ぐ朝倒す。

八日の夕方、小米の粉をこねて焼餅をつくる。これをヤキビンという。中にミソアンを入れて、ほうろくで焼く。真中がなかなか焼けないので、焦がしてしまいが、固くて食えないほどになる。「鬼の尻を焼く」といい、一人前四五个も食べられるように、三十〜五十個も作る。ほかにうどんか、オツキリコミも作って夕食に食べた。(大輪)

八日ヤキビンは旧十二月八日に小米を石臼でひいた粉をこねて、あんなこの代りにみそを入れて、ヤキビン(焼餅)を作る。人を使わず家では固くした。ほうろくで焼いた。二月八日にはヤキビンをしないので十二月八日だけ作る。

この日は鬼が家に入らないように、メケエ(目籠)を竿の先にかぶせて、家の軒先に寄り掛けた。鬼どんが目が多いのを見て、入って来ないからという。デエマンとはいわない。(大輪)

出カワリ 十二月八日は奉公人のでがわりの日。この日は、奉公人(番頭)のいれかえをした。年あきの奉公人はうちへ帰った。

また、この日、メケエを竹の竿などの先につけて、庭先に立てた。

これを、厄神除けといった。鬼が遊山にいくといった。(大佐實)

奉公人が休みで、家へ帰って休んで来る日。奉公の期間がアケの人はこの日に終りになる。(大輪)

八日ヤキビンの日は、百姓の奉公人の出カワリのフシになる。奉公人は実家に帰って休む。この日から正月十六日のヤブイリまで、実家で休んだ。(大輪)

十二月八日は作番頭のデガワリである。米の粉で、デガワリダングを作って食べた。(中倉)

出カワリを十二月七日にする。十三日に送って来て、ススハライのときに家の中をよく見るといつて仕事をさせた。(江口)

デカワリは十二月八日。奉公人の契約更新日。「デカワリダングでころがし出せ」といつて団子の御馳走。これでやめて行く者はよいが、継続する場合は、一週間くらい休んで帰ってくる。(上江黒)

#### ススハキ (十三日)

ススハキ 十二月十三日にする。縁起で、シノザサ二本をいわえて(縛つて)年神様をはらうまねをして、家じゅうを静かに持つて回る。十三日にススハキがどうしてもできない時でも、ササイリだけはして置く。

ススハキはまず家の中のものを外に出し、畳もはがして出してから、すずをかつばらう。ススハキホウキはシノザサ二本をいわえて、スス男が家の中の高い所のすずをはらう。続いて床を掃いて雑巾をかける。

神棚・仏様・エビス様などは、外に出してきれいにし、入れる時は神棚から順に入れる。ススハキが終ると、ススをはいたスス男が、

一番先に風呂に入る。夕飯は米の飯をたいて、ケンチン汁・キンピラゴボウ・野菜の煮つけなどを食べる。(大輪)

ススハキは十二月十三日にするわけだった。箆を使ってホウキをつくり、家の内外のほこりをはらって片隅に置いておき乾いたら燃した。その晩は特別なかわりものなどつくってなかつた。

ある家では翌十四日には油でつくった食事をするといふというのでケンチン(汁)をつくるという。(江口)

### 冬 至 (二十二日)

冬至 朝八時前に屋根に水をかけると、火難にあわないというので、ポンプで屋根に水をかけた。トウナスを朝十時前に食べると、中気にならないという。

冬至湯といって、ユズ湯を立てて入る。

ユズのみそ漬けを作り、節分の年越の晩に、福茶を飲む時に一緒に食べる。(大輪)

「冬至トウナス」という。ユズをこの日に漬けて節分に食べた。冬至の日には、五升餅をついて庭のまん中に臼を逆さにしてその上に餅を飾った。これは朝早くやる。オテントウサマにあけるといつていた。冬至の日は暦を見なくても良い日だといふ。(江口)

冬至には冬至ベツカをした。コウチごとに、米三合ずつくらい持ち寄って飲んで食べた。今はベツカはしない。柚子を味噌づけにする。冬至トウナスを食べる。(斗合田)

### 太 子 ガ ユ

太子ガユはしない。(大輪)

### 歳 末 諸 事

幕市 館林が三・八の市、羽生が四・九の市が立つので、正月買物

に行つた。男衆は年神に供えるオシラキ・オタマシヤクシ・ヤナギ箸(年神十家族数)を買う。女衆はオセチ料理の材料や、五月(田植え)のモロヒキを作る無地紺の布を買う。(大輪)

破魔弓 武者絵の掛軸を十二月に買って、子どもの生まれた家に贈る。箱入りの弓の飾り物を贈るは大尽の家だけである。(大輪)  
歳暮 セエボ鮭といつて、塩引き鮭を嫁・婿が買って、仲人親や親元へ贈る。(大輪)

歳暮に嫁が実家へ持つて行くのはシヤケで、何年も持つていく。仲人の家にもシヤケを届けるが、これは二、三年くらいの間である。昔は十二、三本並んだこともある。いまはいろいろ変わった、みかん、しょうゆなど思い思いのものを持つて行く。(江口)  
餅つき 暮にもちつきをするときに、正月のかさね(もち)をつくつておいて、元日にこれをうちの神様に供える。

ひとかさねずつあげる。歳神様には、大きいかさねをあげる。ほかの神様にはそれよりは小さいかさねをあげる。(大佐買)

暮の二十八日までに餅をつく。正月のお飾りに二日かかるので、早く決めておく。一夜餅は上げるものでないという。米一俵(四斗)つくのは普通で、十臼ぐらゐはつくが、九臼十一白と、奇数につく。モチ米のほかに、シキモンといつてくず米の粉三升とモチ米一斗を混ぜた餅をつく。古米でもつくが、お供え餅はよい米でつく。

臼の下に一クビ(一束)のわらを敷くが、穂を中にして円形に広げる。臼のなじみがよい。正月のセチ餅をつくには、必ずわらを敷く。つき手は一本杵でつく(二本杵はなかつた)。コネドりが手水をつけて、餅を寄せるが、調子を合わせるのが難しい。杵は手水の中につけて休める。

ついた餅は丸めたり、のしたりして切る。(大輪)

いい米四升を一日について、お供え餅に使う。(大輪)  
カキ餅はウルチ米の粉やモチ米を混ぜて、ノリ・ゴマ・塩を入れて

餅をつき、カマボコ形に長くして、端から切つてくしの形くらいにする。干してから、油で揚げて茶うけに食べる。米の粉が多くてモチ米を少しすると、形がつぶれたり、うっかけたりする。

里芋をふかして入れたり、ヤマトイモ（山芋）を少しすり込んだり、ミカンの皮や砂糖を入れたりして、味つけする人もいる。（大輪）

大根オロシ（スミツカレの時に使うオロシで大根をすり、ゴマノリを入れて甘じょっぱくしたものの）の中に、つきたての餅をちぎって入れてカラミ餅にして食べる。（大輪）

餅をつけない家は聞かない。（大輪）

正月の餅をつけない家はここにはない。モチ米を作つてはいけな家はあり、よその家のモチ米と交換して餅をつく。

川俣の粟島様が粟の畑に逃げ込んだ時、餅の穂で目を突いたら、粟をつくつてはいけななので、かわりにキビを作った。（川俣）

正月の餅つきは十二月三十日までにつく。三十一日につくのを「一夜餅」という。「一夜餅をつくらぬなら、一月一日につくともいう。（中谷）

暮れの二十七日、八日に餅つきをした。一夜餅はよくないといった。

苦餅のことは特にいわない。（田島）

正月のちはクモチは悪いというので二十九日につくことはせず、二十七、八日のころつく。東京の親せきへ送る都合もある。燃料に桑根っこを燃す。一夜もちは悪いという。（江口）

## シメ飾り

シメ飾り いわらを使つてオシメないをするのに、二日ぐらいかかった。わらははたたかないまま、もち米をといだ水にひやしておいて、オナベ（夜なべ仕事）になった。横つちよに水桶を置いて、わらが乾かないようにして、手に水を付けてはシメ縄をなう。手つばきはつけられない。（盆のカツモ縄は手つばきをつけてもかまわない）。（大輪）

シメ縄に松の枝と紙を折つて挟む。ゴマメとコンブを付けたリ、ミカンを付けたリする。大神宮・勝手元・水天宮・屋敷稲荷などへ供える。そのうち一本を十一日にクワイレ様へ持つて行く。オカオガクシといふことはきかない。（大輪）

大神宮・年神・井戸神・便所・穀物・物置・屋敷稲荷・オカマ様などにシメ飾りをつける。（大輪）

八丁ジメは稲わら六本でシメ縄をなつて、八カ所に紙のシメを吊した横長のもの。神主から受けてきて、年神・カマ神・玄閻（入口）の三カ所に付ける。（大輪）

八丁ジメは長いシメ縄を横にして八カ所に紙を十六枚折つて下げる。これを八丁ジメといい、屋敷鎮守の前へ横に渡して掛けた。オカマ様にも八丁ジメ（シメ縄）を掛けて、幣束を立て供え物をする。（大輪）

オカマ様には正月の前にシメを飾る。（大輪）

八丁ジメはシメ縄のことをいい、神主が作ったものを、各戸から受けに行く。八丁ジメは屋敷稲荷の前に張る。年神棚に巻き付けて置く家もある。（川俣）

おかざりはヨシゴムシロだけで他にはしない。（江口）

十二月二十三日に正月飾りのしめなをした。（斗合田）

年神の幣束 謙田の神主が切つてくれるのを、世話人が分けてくれる。家によつて何本か違つている。（大輪）

暮の二十五、六日ごろ、神社へ正月用の大神宮様のお札を受けに行く時に、幣束・お敵い・八丁ジメ・ヒトガタなども一組になつてくる。（川俣）

カド松 村には松山がないので、館林方面の山へ取りに行った。松はカドに二本立てる。松の葉をシメ飾りにさすくらいで、松がないから、あまり立てなかつた。（大輪）

カド松は屋敷の入口の左右に杭（何の木でもよい）を立て、松の枝と竹を縛り付けた。庭にも二本杭を立て、入口の方を向けて松飾りを

した。昔は松山があったので、そこから松を取って来たが、戦後は松飾りをしなくなった。(大輪)

お松迎えの日はきまつていない。松はかざるときにとるもので、一夜かざりはよくないというから三十日にとるが多かった。(江口) 門松というのは昔から立てなかつた。松かざりを釘でうちつけたオシルシだけのもので、一緒に竹を立てたり、根元に薪を巻くようなこととはなかつた。(江口)

#### 大晦日(三十一日)

大晦日 十二月三十一日には屋敷の掃除をして、最後に便所掃除をして上がる。夕飯は屋敷内の神々(井戸・カド・屋敷鎮守など)から、年神様・エビス様など、全部の神様に供える。年男がオシラキ十五枚くらいに盛って供えて回り、その晩に一旦下げる。

夜食にミソカボを食べる。大ミソカの夜は着物の下着などを揃えたりするので、早寝ができないが、「早寝すると白髪が生える」とはいわない。除夜の鐘はラジオが入ってから聞くようになった。赤岩では除夜の鐘をついたが、行かなかつた。

大ミソカの晩にご飯をたいたり、キンピラゴボウやイモ煮をしたりする時に、ナスガラを燃した。借金をナシキルようにした。(大輪) 大晦日のことは年とりとはいわない。(マメマキー節分を年とりという)。

昔は自家用のそばを栽培していたから、大晦日には必ず年越そばをつくった。本もの手打ちだった。最近では買物が、めしとそば両方を用意する。(江口)

ミソカツパライ 二十五、六日ごろ、神社から受けて来たヒトガタで、大晦日にミソカツパライをして、家族の厄を落してから川へ流す。

(川俣)

ナスガラ 大晦日にはナスの木を燃やす。「借りものをナス(返す)」

「借金をナス(返す)」というエンギがあり、新しい年を迎える気持がよくでている。ナスの木はよく燃えるもので、いいときになる。(江口)

大みそかの年こしの晩は、ナスガラを燃す。「借金をなす」という。(斗合田)

昔は大晦日に「借りをなす(返済)」というので、ナスがらを燃した。大尽の家では、「貸します」というので、カシの枝を燃した。(斗合田)

大晦日の晩にはナスのからをもす。「借金をなす」という。そばを食べる家が多い。その夜は、大きな木の根っこなどをかまど(または火鉢)にくべて火を絶やさないようにする。(斗合田)

## 口頭伝承

### はじめに

「板倉町の民俗」(昭和三十五年度)、「千代田村の民俗」(昭和四十六年度)の言語伝承と、昭和五十六年度の、この「明和村の民俗」の口頭伝承とを比較してみると、年を追うにつれて、減少して行くのがはつきりわかる。それにしても、この傾斜の激しさは、口頭伝承に限られるものか、それとも他の伝承とも共通しているものなのか、少からぬ関心事である。

伝説も昔話も数少く、諺だけが、やや多く集った。口頭伝承のうち、何が早く消え、何が残るか。今年の調査は、それに答えているようにも思う。

そうした中で、謎の解けない時に「おけえ(お粥)食った」というのは、一つの収穫だった。これまで知られていたのは、次の通りである。

利根郡では、答えられない時は、降参、駄目、知らねえ、知らない、分らない、ながした、ぬがした、まいった、酒を買った、しおなみ、塩なめた。(利根昔話集)

吾妻郡の六合村では、モンジアゲタ、モンジアゲマス、爛恋村では、モンジとかモンジアゲタという。(群馬県史 民俗3)

「ことば遊び辞典」(鈴木業三編)の解説には、

ナゾをかけられて解き得なかった場合、降参してそのナゾを返上する場合にも、一定の作法がある。それを「上げる」というのが、最も広い地域で行われている言い方である。山梨県では、「あげ申す」

といつてかぶとをぬぎ、相手から答えを教えてもらう。栃木県芳賀郡では、「上げてきましましょ」という。越後の三面村でも、わからないナズは、「あげて聞きましょう」といつてきく。福島県石城郡では、「上げます」という。(後略)

この「おけえ食った」が、明和村に限るものか、他にも事例があるものかどうか、「おけえ食った」といわずに、今後根気強く調査を続けなければならぬまいと思ふ。

### 一、昔話

ミヨウガ ミヨウガを食べるとドン(馬鹿のこと)になる。中国のミヨウガという馬鹿者が死んだので埋めたところに芽の出たのがミヨウガという。(江口)

話が終ると、「市がさけ申した」という(矢島)。

### 二、伝説

又太郎屋敷 永仁年間に堀之内に大輪又太郎という殿様が住んでいたといひ、城のような屋敷跡になっていた。後にできた家に崇りがあるといふので、先達が来て泊り込んで拜んだ時、そこらを掘り返したのが、何も出なかった。大佐員の配下だといふ。(大輪)

カンキヨ様 落合家の先祖様は法印で、屋敷内に先祖の土地が一坪ある。法印は慶讃といひ、諸国修業して来た修業者で、有泉寺と天満宮の神主を兼ねていた。大きな水害があつて、利根川の土手を作る時

に、あげ船に乗って陣頭指揮をして、人柱に立って死んだ。宝暦五年辰年? : だったというが、地元の人が感謝のためいまでも祭っている。命日は陰暦八月三日なので、四月三日と九月三日に、有泉寺の墓地の入口の五輪塔の所で祭る。

当番が出て世話をやき、大太鼓1、小太鼓2をたたいて、真言宗の经文「オンアホキアペイロシヤノナカボガラ……」を唱えた。子供に赤飯をくれた。この話を吉永正一氏が刺にしたこともある。(須賀) カツバ かくなて利根川に水浴びに行くと、カツバに引き込まれて、ケツメド(尻の穴)から入って血を吸われるという。牛洗いに利根川に行くと、後足で蹴って歩くようにする。(須賀)

### 三、謎

なぞ 朝早く起きてクネ(垣根)もぐりするもの——にわとり  
細でボウバナたらしめているもの——綿(斗合田)  
田ンボの中で白いハナたらしめているのなんだ。答綿。  
田ンボの中で赤チンコはなんだ。答とうがらし。(須賀)  
なぞが解けない時には、おけえ(お粥)食ったという。(斗合田)

### 四、諺 など

謎 今回の調査の中で聞くことのできた謎を、順不同でとりあげてみることにする。カツコ内がその意味。

- あいた口がふさがらない(あきれること)
- 兄弟げんかは鴨の味がする(きょうだいげんかはうんとやれ。それはつきもんという)
- 泣く口にははいるが、笑う口にははいらぬ(食べものこと。子どもは、泣き泣き食べてしまうという)

○垢で死んだもんはないから、風呂にはいるな(体の具合がわるいときという言葉)

○腹も身の内(あんまり大食するということ)

○笑ひ顔には福がくる。

○夫婦げんかにや口だすな。一夜あければ仲良くなる(夫婦げんかはとめるなという)。

○秋サバは嫁にくれるな(味がよいから)。

○朝雨にはみのをぬげ(かならずやむということ)。

○朝雨に女の腕まくり(大したことはないことのとえ)。

○悪銭身につかず。

○朝茶には福がある。

○朝寝坊の背のつっぱり。

○朝蜘蛛はかわいがれ。

○日暮の雨と四十男のもぼれ(女狂い)はやみそうてやまない。

○小豆は馬鹿がもせ(小豆を煮るときには、そろそろもすほうがよいということ)。

○東男に京女。

○あたまの黒いネズミ(うちの中の泥棒のようなものたとえ)。

○暑さ寒さも彼岸まで。

○乞食のはんさんあとばらやめる。

○乞食のはんさんがつかりがっかり。

○かまどの灰、縁の下の蜘蛛の巣までおれのもの(これはあととりがいうことば)。

○姉さん女房は身上が残る。

○あわてる乞食はもらいがすくない。

○家柄よりいもがら。

○石の上にも三年。

- 三年味噌が一番よい。
- あふない橋は渡るな。
- 居候三杯目はそつとだす。
- 居候いてあわずおいてあわず（どちらも損ということ）。
- いそがばまわれ。
- いたたく物は夏も小袖（ただもらうのは得だということ）。
- いたちのさいごつべ。
- 一姫二太郎（上の子が女の子、下が男の子がいいということ）。
- いとこ同士はかもの味。
- いとこはとこは犬の糞。
- 犬になるなら大尽の犬になれ。
- 犬は三日飼えば三年の恩を忘れず。
- 木もと竹うら（木を割るときはもとから、竹を割るときはうらから割れということ）。
- 惣領の甚六。
- 夕立は馬の背を分ける。
- 病いは口から（食べものを気をつけるということ）。
- 名主のあとはいもばたけ（むかしの名主はムラのために金をつかうのでそういわれた）。
- いもはかけの俵（いもは米の代りになるということ）。
- 娘三人もてば身立つぶす（娘を嫁にやるのにかかりがするということ）。
- 爪でひろつて箕でこぼす（けちの人が金づかいのあらうこと）。
- 盆と正月が一緒にきたようだ（いいことがかさなつたときにいう）。
- 夫婦げんかは犬もくわぬ。
- 乞食の子でも三年たてば三つになる（大佐買）。
- あぐつたらし 嫁が里へお客に行くときに、婿が一緒についていくと、むかしはあぐつたらしといつてわらわされた。嫁婿はそろつては

いかなかつた（大佐買）。

こぬか雨と、親の罰は当る。

草の見おきと女の見おきはできない。（斗合田）

メンが仕事をすする 昔、ある人が弁当が仕事をすると聞いてモグリ

（エンガ）に弁当をしりりつけておいたが、仕事をしなかつたという

話が伝わっている。（江口）

「小姑一人鬼八人」：小姑がひとりでもいると鬼八人居るのと同じ

だといつた。（千津井）

秋なすはうまいから娘にはくられても嫁には食わせるな。俗に「秋な

すは嫁にくわせるな」という。（千津井）

「鬼の留守に命の洗濯」：姑が出かけた時に嫁が一安心することを

いつた。（千津井）

「六十二年の不作」：頭の悪い嫁をもらうとこう言つた。六十二年

というのは嫁に来てから亡くなるまでの年月という。（千津井）

たとえ よしきりが土用に入つたみてえだ。今までしゃべつていた

のが、急に黙る。よしきりは、「お前（めえ）どこ行く、女郎買ひ女郎

買ひ」と鳴く。（斗合田）

しゃれ 「いも葉に小便」で、受けつけねえ。（斗合田）

## 五、命 名

屋号 昔、問屋だつた家は、今でもトンヤ、水車を使つていた家は、

クルマヤという。旧家には、ヘエエドンとか、ロクエンドンと、ド

ンの付く家がある。旧板倉町では、全部ドンが付いている。（斗合田）

屋号をもつ家がある。銀太郎という人の代に店を開いたので、銀店

と書いて、ぎんだなと呼んでいる。

本家、いんきよ、おけやどん、しんたく、きたんち、前やしき、か

どんち、しんやな、などの屋号がある。（南大島上）

名前 一人で二つの名前を持っていた人がいた。本名兼太郎、呼び名は信さん、信太郎さん。本名儀三郎、体が弱いので忠五さん。

あだ名としては、その人の特徴をとらえ、舌をよく出すので、「べろ長、徳さん」とか「足長勇助さん」、背が小さいので「なんちんせつさん」、道路の馬糞を集めて肥料にしたので「まぐそたけさん」などともラの人は呼んだ。(新里)

苗字八軒——本沢、島田、小松原、木村、野村、本島、小坂橋、酒井七軒——今成、町田、田島、鈴木、須水、小池、岩田二軒——岡安  
各字に各苗字があつた。(南大島下)

機村のぎむら。よく磯村(いそむら)とまちがえられるが、禾へんに幾で、のぎとよむ。

字七軒 字七軒には七苗字があつたので字名になつた。田島、今成、町田、砂川、鈴木、小池と岩田であつたが岩田は現在ない。(南大島上)

耕地名 下野田、火の口、中畑、向山、下田、お茶釜、田前、下浮谷、上地面などの耕地名がある。(新里)

斗合田 昔は計合田といい、計の草体から斗に変わった。水神宮には、計合田と書いてある。

## 六、方 言

あいさつ 食事時前後のあいさつは、「めし食ったかい。」「めし食つて来たか。」とか、「お昼る食べて来たか。」と言つた。

朝、八時か九時頃までは、「お早ようがんす。」といい、それ以後は「こんちや。」とか、「こんにちわ」といつた。夕方、日暮れまえからは「こんばんわ」というような言葉であいさつを交した。

近所の人の間では葬式に関して「ぢやんぼんかい。」「あぶなげかい」

と言葉を交わした。(新里)

日常の最初のあいさつは、「いたかい。」「夜は、」「寝たかい。」「はあ寝たかい。」「まだおきているかい。」「朝は「起きたかい。」「野良仕事から帰る場合「はあしもうべえやい。」「はあおひるにすべえやい。」「おかせぎなさい。」「かせくなあー。」「えらくかせくと体をぶつこすぞ。」などの言葉が交された。

店に寄る場合は、「こんちや。」と言つて店に入った。子供は「売つてくんや。」と言つた。(新里)

ハシャグ 排水路ができて地下水を汲み上げるため、畑の水が深くさしてしまい、ハシャグで困るといふ。乾くこと。(須賀)

どんぶくさ 畑に生える雑草のスペリヒユは、性がこわくて抜いてもなかなか枯れない。太いのを取つて軒下にかけて置くと、トンボがとまるので、ハエが来ないといつて、ハエ除けにした。(大輪)

ドンブグサはスペリヒユのことで、畑の雑草として生えるが、性が強くてなかなか枯れない。ドンブとはトンボのことをいふ。(須賀)

オオグイ 大飯食いのことをオオグイといつた。(田島)

しろつと しろつと  
じゅうくう 生意氣  
さんびと お産をする人  
きたいだ 感心だ。  
にわかに 突然に。  
けなるい うらやましい  
のたりきゅうり 這いきゅうり  
かしよう さそき  
えら たくさん  
むつむつする むしあついで。  
おなべ 夜なべ。  
がなる どなる。(以上須賀)

いすす 石うす。  
ひきりめし ひきわりめし  
たんねんしや 丹精する人  
つめりつこ すいとん  
めんいた うどんを打つ板  
みまいつと 見舞いに来た人  
おさまえて 押えて

はなつた はじめた  
おくナス 秋ナス  
まなばし お菜ばし  
あくぎ わるぎ

しよたれげ だらしなげ（に見える）

半たく帯 半巾帯  
ひるつたま になにく  
おぼんし 炊事・また炊事をする人。

じんじく 後座  
釣合いがとれること。（大輪）

上州名物 上州名物かかあ天下にからつ風とか、かかあ天下に外あ

などという（入ヶ谷）。

オサン銭（おさい銭）にオツリ（つり銭）なし。（江口）他に、「か

らつちやは、ムギつきより、量だ」といった。（大佐買）

ヒカリツキ 利根川から流れて来る流木を拾って、庭に置いておく

と、夜になって光る木があった。（斗合田）

一生末代 自分の持物について、大事なものを、一生末代と

いった。これは、自分が死ぬまで大事にしておくことである。  
（大佐買）  
ススタ 川で石をとってフカマになっているところをススタとい  
う。（千津井）

銭入れ 銭箱というのがあった。千両箱は土焼のものもあった。そ  
の外、銭を入れるものに一斗入るかめがあって地下に埋めておいた。  
主に床の間の下が埋めるところだった。（南大島下）

## 七、民 謡

（スットコ上州館林

お米のマンマが無いところ  
ワリメシ、ナツバのコウヂで

さあさら

この唄は、館部市赤羽あたりのことを唄ったものだといわれていた。  
（千津井）

（大島がおしゆれで

江口がおはね（オテンバのこと）  
なかにはさまるヤボ田島（田島）  
江口照る照る

大島曇る  
やぼの田島は雨がふる（江口）

子供たちはムラ同士のケンカをすると決まって次のように言い合っ  
た。

（梅島の学校はいい学校

千江田の学校はポロ学校（田島）  
万作踊り 明治時代のころ、万作踊りをしたという。「豊年だ、万作  
だ」という踊りをした。あるおじいさんは、ご祝儀の席で、よく万  
作踊りをしたという。（入ヶ谷）

# 明和村の民家

## はじめに

今回の民家調査は予備調査と本調査の二回に分けて行なわれた。予備調査は三五棟(表1)を取り上げ、本調査は一一棟について実施した。予備調査は七月一四日、村教委社教主事飯島茂雄氏の御案内に行なわれた。また本調査は八月六日〜九日まで、村誌編纂室長川上幸次郎氏に御案内と御協力をいただいたので、ここに記して両氏に厚く御礼申し上げます。また、農繁多忙中にもかかわらず、家の隅々まで快く開放し、見せていただいた各調査民家の所有者に、心から厚く感謝の意を表したい。最後に真夏の暑い中、予備調査と本調査に御協力いただいた田島豊穂氏に紙面を借りて、衷心より厚く御礼申し上げます。

(桑原 稔)

## 一、調査対象民家の選定

予備調査対象民家の選定は、村教委事務局によって行なわれた。選定に当たって注意されたことは、選定民家がある特定地区に片寄ることなく、村内全域からはば平均して選ばれることであった。その結果表1に掲げたような、三五棟の民家を予備調査対象民家としてとり上げた。

予備調査は、三五棟の民家を順次筆者が訪問し、外観および内部を簡単にながめさせていただきながら、建造年代等に関する簡単な聞き取り調査も実施した。

〔表1〕 予備調査民家の地区別件数表

地区(大字)	予備調査民家の所有者名(敬称略)	棟数
下江黒	関口昭一・柿沼源喜知・江森武治	3
上江黒	多田淳一・多田吉家・森田茅郎・多田団吉	4
千津井	奈良昭一	1
江口	柿沼英雄	1
田島	新井慶作・矢島源一郎	2
南大島	蓮見行男・小磯茂・今成明・島田誠司	4
新里	堀口治平・細田登一・関口清一郎	3
中谷	富塚富江・富塚春男	2
梅原	吉永としえ・関口とら・吉永政雄	3
川保	塩谷正邦・藤野アイ・中村利作	3
大輪	野本素司・原口幸	2
矢島	奈良原与惣治・渡辺茂	2
大佐貫	經沼兵吉・榎木勝次・折原隆雄	3
須賀	神谷憲・落合元宏	2
予備調査民家総合計		35

その結果、次のような諸点を重視して、本調査の対象となる民家を選定した。

- ① 保存状態のよい家。
  - ② 質がよく美しい家。
  - ③ 新しい家でも地域を代表すると考えられる家。
  - ④ 建造年代を明確にする資料（棟札・普請帳・墨書・古絵図など）が存在する家。このような家はまれにしか存在しないから明治末年頃の遺構でもとり上げる。
  - ⑤ 建造年代に関する伝承のある家。
  - ⑥ 建造年代不明で改造されていても、相当古そうな遺構と考えられる家。
- 以上の視点から選定された本調査の対象民家は、表2に掲げた一一棟であった。

〔表2〕 本調査民家の地区別件数表

地区(大字)	本調査民家の所有者(敬称略)	棟数
江口	柿沼一雄	1
上江島	多田団吉・多田淳一・多田吉家	3
下江黒	江森武治	1
新里	細田登一	1
梅原	吉水としえ	1
大輪	野本素司	1
大佐貫	篠木勝次・折原隆雄	2
南大島	今成明	1
本調査民家の総合計数(昭和五六年八月実施)		11

ここではこの一一棟の他に、筆者が個人で昭和四五年三月、一週間にわたって調査を実施した一二棟を加え、合計二三棟について記述す

## 二、調査内容

母家を中心に聞き取り、および遺構の実測調査を行なった。聞き取り調査は主にその建造された頃の家業・家柄・役職等をはじめ、建造年代に関する伝承、各種の改造年代、室名および各室の昔の使われ方、柱や各種部材の名称、その家に伝わる色々な禁忌等、多数の項目におよんだ。遺構の調査は、現状平面図・現状断面図および痕跡図を採取し、現場で復原平面図・復原断面図を画き上げること原則とした。写真は屋敷構えを始め、母屋の外観・内部等を一棟当り、二十枚程度撮影した。しかし、建造に関する古文書等を残している場合は、それらも極力撮影したので、さらに大幅に撮影枚数を増加した。

## 三、村内における古民家の残存状況

明和村は東西に細長い村であり、丁度そのほぼ中央を南北に、東武鉄道浅草線が走っている。そして村内のほぼ中心部にある東武鉄道川俣駅から、東京の浅草駅まで各駅停車の電車でも、一時間三五分で行ってしまうというから、群馬県でも最も東京に近い村である。したがって農家は、都会向きの野菜、草花、果樹などの園芸に力を入れ、近年大きな収益をあげている。また、兼業農家が目立ち、息子が東武線を利用して東京まで通勤している家も多く耳にした。このような経済的状況を反映してか、農家の新築家屋が目立ち、今回の調査で一九世紀初期よりも古い遺構を発見することができなかった。そして今日見受ける草葺農家の大半は、一九世紀中期頃から末期頃までに属する遺構であった。

なお、川上幸次郎村誌編纂室長の御教示によれば、昭和五六年一〇

月現在における草葺母屋の残存状況を見ると、村内の家持世帯二二〇戸中、草葺母屋数は九三戸であるので、草葺母屋数は約四・四％である。

#### 四、編年について

今回調査を実施した一二棟の遺構に、昭和四五年三月に調査を行なった一二棟の遺構を含め、合計二三棟の調査遺構中、建造年代の判明したものの、あるいはほぼ推定できるものは、多田団吉家・橋本実一家・細田登一家・江森武治家・野本素司家・多田吉家・今成シズ家・篠木勝次家・多田淳一家・柿沼一雄家・奈良義雄家・橋本政雄家・今成明家・今成一郎家・滝口喜慶家の一五棟（約六五％）であった。そこで、これら遺構の示す原形にみる各種特徴と、建造年代不明な遺構にみられる原形の示す平面・構造をはじめ細部等にみられる各種特徴等を、比較・検討して編年の指標を求め、調査遺構全体を平面形式別に区分し、階層差も考慮に入れて、編年系列表をつくと表3のようになる。

前述したように、この調査の場合、六五％もの遺構の建造年代が判明あるいは、ほぼ推定できたため、他の建造年代不明な遺構についての推定建造年代は、少し細分し過ぎるように思えたが、一世紀を初期・中期・末期の三等分に分割し、推定しておいた（表3）。

#### 五、平面形式の種類

調査遺構の平面は、どれも建造当初のものより室数を増加し、かつ開放的になっていった。これらを痕跡をたよりにして、建造当初の姿に復原すると、次のような五種類の平面形式に分類される。

(一) 一間の家―一間取型

- (二) 三間の家―広間型
- (三) 裏側の室が狭い田字の家―不整形田字型
- (四) 田字の家―田字型
- (五) 間取の多い家―多間取型

右上段のよび名は主に郷土の人達のよんでいる名称である。しかし、表3において間取の形式を記載するのに、上段の平面形式名は長過ぎるものもあるので、これを簡略化する意味で、筆者は矢印下段に掲げたようなよび名で仮称し、以後本文中においても、矢印下段のよび名にしたがうものとする。

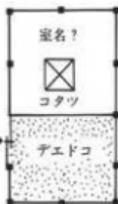
次に五つの平面形式に属する各民家遺構を、平面形式別に順次述べることとする。

#### 六、一間取型の民家

この形式に属する遺構は、多田団吉家ただ一棟だけであった。多田団吉家（写真1、図1）は、現在上手にトコ・トダナを設け、裏側にも下屋を付けている。しかし柱に残されている痕跡等について建造当初の姿に復原すると、その平面および断面図は図1のようになり、出入口に開口部を全く持たない、閉鎖的な屋内空間となる。

民家の歴史を溯れば、その出発点は原始時代の竪穴式住居に至るであろう。それは端的にいえば、ねぐら、すなわち寝るための場だけにほかならなかつた。つまり原始時代は、日常生活の大半を屋外で営み、住居というのは単なる、ねぐらであり、夜の機能を受け持つ役割しか負っていないが、

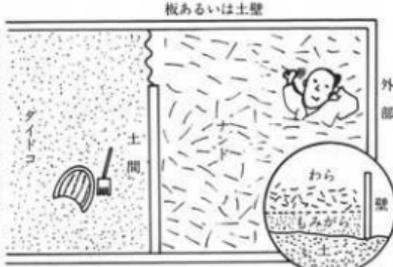
竪穴住居から発展した平地式住居の平面は、どのようなものであったのであろうか。それは就寝の場（ナンド）と炊事・仕事場等に当てられた場所（タイドコ）に分割された、一室住居であったと考えられている。一室住居の初期形態はナンドに干草や藁・楳殻等を厚く敷



多田団吉家  
(図1) 1間取型  
(復原平面・断面図)

き、その中にもぐって寝た。(図2)

その後上流階級の影響によって、屋内の片側に板張床の室を設け、ここを寝室にする家があらわれた。これに属する家が多田団吉家のよ



(図2) 一間取型の初期形態図  
(寝室の独立が計られた当初のようす)

うな平面遺構で、民家発展の初期的形態を知る有形的史料として、大変貴重である。

さらに多田団吉家の平面をみると出入口の他は、総べて土壁をめぐらし、開口部を全く持たない。このことから当家は、昼よりも夜の機能に重点を置いた極めて源初的な住居形態を伝えているものとみてよいであろう。寝るためには暗く静かな、そして外部から種々な危害を加えられる心配のない空間がよいので、窓を設けず丈夫な壁によって、外部と区画されたものであろう。団吉さん(明治三二年生)の四代前に移築したと伝える。そして団吉さんの父親は一八六〇年の生れであるというから、一九世紀初期頃に移築されたものとみておけばよいであろう。

## 七、広間型の民家

広間型の民家は四棟であり、いずれも昭和四五年に調査したものである。このうち蓮見一雄家が現存しているだけである。

橋本嘉平家(写真2、図3)は梁間三・五間、桁行七・五間の広間型で最も古い遺構と考えられたものである。平面をみると、デエ表の半分を土壁にし、ザシキ表にサマを残していたり、ナンド(寝室)は半間の出入口以外を土壁で閉鎖するなど、極めて閉鎖性の強い特徴を示している。

構造をみると上屋柱の省略が少なく、二重梁も使用されていない。棟通りでは大黒柱と対応して土間のほぼ中央に小黒柱をたて、床土でも大黒柱をはさんで小黒柱と等距離の棟下に柱をたてた。そしてこれらの柱上では小屋梁上に、棟を支持する棟束をたてている。また大黒柱はチョークで仕上げられ「逃げ」もない。表側の下屋はオダレといい、まだここにエンガワも設けられていなかった。以上のように当家は、平面・構造共に極めて古い様式をよく伝えている。

当家は寛保二年(一七四二)に起きた村の大火の際、当家の分家に当る西隣りの家(橋本実一郎家)まで火災を被ったが、かろうじて難を免れた縁起のいい家として有名であった。このような伝承や、復原された建築の原形の示す各種特徴等から、当家は一七世紀末期頃に建造された遺構と推定された。なお、当家は江戸時代に鷹師をした、由緒ある家柄であると伝えられている。

小松原一好家(写真3図3)は橋本嘉平家より梁間で半間、桁行でも四尺程度規模を拡大している。したがってナンドは梁間方向を半間ほど拡大し、土間も桁行方向を四尺程広くとっている。

平面をみると開口部少なく閉鎖的であるのは、橋本嘉平家と同様である。しかしデエ表の開口部を「サマ」にしているのは、より古風で



(図3) 広間型の民家(復原平面・断面図)

ある。また、デエとザシキ境の位置では橋本嘉平家同様に、棟通りに柱をたてているため、間仕切に柱が現われ、大変目ざわりである。大黒柱をカンナで仕上げているのは新しい特徴である。しかしまだ「逃げ」はない。

当家は建造に関する記録・伝承を残していなかった。しかし復原された建築の原形の示す各種特徴から、橋本嘉平家より幾分新しい遺構と考えられたので、一八世紀初期頃に建造された遺構とみておけば妥当であろう。

蓮見一雄家(写真4、図3)は梁間四間、桁行八間であり、デエ表に土壁を残し、寢室(ネドコロ)も閉鎖的である。しかし、デエとザシキ境の間仕切に、差鴨を使用して、間仕切の棟下になつ柱を省略しているのは新しい特徴である。またザシキ表のサマもなく、大黒柱はカンナで仕上げられ、逃げもあるなども、前述の橋本嘉平家や小松原一好家にみられなかつた新しい特徴である。さらにデエの上手にトコとトダナを備えているのも新しい特徴であり、これ以後の遺構ではどれも皆トコやトダナを備えるようになる。

当家は建造に関する記録・伝承を残していない。しかし復原された建築の示す前述のような各種特徴等から、一八世紀中期頃に建造された遺構とみておけば妥当であろう。

新井一郎家(写真5、図3)は床上の裏側および土間の下手(妻側)の改造が激しく復原のむずかしいところがあった。しかし間取の様子や室境の間仕切装置は比較的良好に復原することができた。当家のナンド(寢室)は半間の出入口の他をすべて土壁で囲っており、古風である。しかしデエの上手にトコ・トダナを設けているのは、前述の蓮見一雄家と同様である。その他復原された建築の示す各種の特徴等を総合して、当家は蓮見一雄家と同年代頃の、遺構とみられたことから、当遺構の建造年代は一八世紀中期頃であろうと推察された。

## (一) 広間型遺構についての考察

### (1) 間取について

四棟の広間型遺構の調査結果から、間取について考察してみよう。図3の平面図をみて明らかに、いずれの遺構も建坪の半分あるいは、半分より少し大きく土間をとり、ここを「ダイドコロ」あるいは「ダイドコ」とよんでいる。床上は桁行を二分して土間寄りに、表から裏まで一室とした大きな室をとり、これを「ザシキ」と称している。

ザシキの機能(用途)は、家族の団らんおよび食事室であると同時に、軽い来客の応待もし、さらに糞蚕や脱穀・糞仕事などの際に床上の作業空間として、土間である「ダイドコ」と強く結びついていた。広間型におけるザシキはいずれの場合も、土間との境に建具を嵌めていなかった。この最大の理由は、前述のようにザシキが家族の居間および食事室兼軽い来客の接待もするという居住空間でありながら、他方では土間との連絡を強く持つ、床上的作業空間という意識を強く持っていたことによるものであろう。また、ザシキが広大な空間を必要としたのは、前述のような居住空間兼作業空間という、多くの用途に使われる室であったことによるものと考えられる。

ザシキの上手表側には「デエ」を配し、この裏側に「ナンド」あるいは「ネドコロ」とよぶ室を配置する。デエはダイが訛つたものである。ダイには「出居」の字が当てられ、昔貴族の邸宅などで、母屋から突き出た採光条件のよい、上等な室を「出居」とよんだ。この言葉の起源はかなり古く、中世以前にまで溯るようである。

広間型ばかりでなく、当地方でデエとよばれている室の用途は、冠婚葬祭時の主室となったり、貴人・客人等の宿泊室に当てられた。したがってデエは最も上等な室とされ、日常家族によつてこの室を使用されることはほとんどなかった。そしてデエには早くからトコが備え

られた。

デエの裏側に配された「ナンド」あるいは「ネドコロ」の用途は、その古の通り寝室であった。寝室は暗く静かな方が安心して休める。また各の床に干草や藁を敷きつめ、これを敷ふとん代わりにして寝たころから、干草や藁が室外にはみ出さないようにするため、出入口以外の四隅を壁で囲う必要があった。このようなところから、古い遺構の寝室は閉鎖性の強いものとなり、寝るだけの広さを満たすだけの小空間とされた(図3橋本嘉平家の寝室参照)。

デエとザシキの表側の柱間装置をみると、デエの表側はいずれの遺構においても、桁行幅の半を土壁にしている。ザシキ表は「マバシラ」を有し、一八世紀初期頃までに建造されたと考えられた古い遺構の場合、サマを残していた。

### (2) 構造について

二階造りや屋根裏を利用した遺構は一例もなく、古い遺構ほど軒高が低くなり、かつ架構も単純になり、一七世紀末期の遺構と推察された橋本嘉平家では、二重梁を全く用いていなかった。また一八世紀中期以前に属する遺構では上屋柱の省略少なく、大黒柱と小黒柱は必ず棟通りに配置される。そして一八世紀初期以前に溯ると、デエとザシキ境の間仕切内の棟通りにも柱が露出し、この近くにかマクドが据えられることから、この柱を「カマバシラ」とよぶ場合が多い。

大黒柱の仕上げは、一七世紀に属する場合だけチョーナ仕上げとされ、一八世紀以降に建造された遺構はすべてカンナ仕上げとされている。また、大黒柱の「逃げ」についてみると一八世紀初期の遺構まで「逃げなし」で一八世紀中期以降になると、「逃げあり」となっている。

### (二) 広間型遺構についての総括

総数二三棟の調査遺構中、広間型に属する遺構は四棟(一七・四%)

であった。最も古い遺構は橋本嘉平家で、一七世紀末期頃まで溯るものと推定され、閉鎖性を強くし、棟通りには大黒柱・小黒柱の他にデエとザシキ境の間仕切にも柱をたてていた。したがってデエとザシキの境では、じやまな位置にこの柱がたつので、大変目ざわりであり、建具の寸法もこまだけ半端なものとなっている。また上屋柱の省略も少なく、土間内には上屋柱がほぼ一間ごとになち、カマクド近くの柱をカマ柱と称していた。

最も新しい広間型遺構は、新井一郎家で一八世紀中期頃の遺構であろうと推定された。ナンドやデエは閉鎖的性格を残しているが、ザシキ表のサマが消滅し、土間内の上屋柱も省略され、デエにトコとトダナを備えるようになった。

建造当初の屋根形式をみると、四棟とも草葺寄棟造りで、古い遺構ほど軒高が低い。また、表側の下屋にはいずろの遺構も、エンガワを設けておらず、こは「オダレ」と称して土庇としている。

広間型にみられる特徴の概略は、以上のようなものである。そして広間型は遺構でみられる限り、当村において建造年代の最も古い民家の平面形式であった。

## 八、不整形田字型の民家

二三棟の調査遺構中、この形式に属する遺構は五棟(二一・七%)であった。この五棟を建造された当初に復原した、平面および断面図は図4のようである。これに属する遺構は表側の室より、裏側の室の奥行が狭くなっていることから、不整形田字型と仮称されたのであった。

この平面形式は、広間型におけるザシキをデエとナンド境の間仕切線の延長線上で、前後の二室に仕切ることから生れたものと考えられる。そして不整形田字型の大きな特徴は、大黒柱と小黒柱が棟通りか

ら裏側へずれて、前後の室境における間仕切線上に据えられるようになることである。すなわち、広間型における大黒柱・小黒柱は構造上の理由から、必ず棟通りで据えられた。しかし不整形田字型になると、構造上の理由よりも、間仕切の都合に合わせて、間仕切線上に大黒柱を据え、大黒柱で前後の室境の鴨居や敷居を受けるようになる。また大黒柱間には太い梁を架けることから、小黒柱は大黒柱に従って棟通りからずれたまでのことであろう。

以上のようなことは、断面図をみると一層明瞭となる。広間型では大黒柱を棟通り(梁行の中心)に据え、上屋柱と下屋柱は左右対称形に配置される。すなわち、大黒柱は天秤計りの中心支点の位置に配置され、構造上のバランスを保つ重要な位置に据えられているのである(図3断面図参照)。これに対し不整形田字型の場合、大黒柱は前後の室境の間仕切線上に据えられているため、棟通りから裏側へずれており、構造上不安定な位置に配置されている(図4断面図参照)。

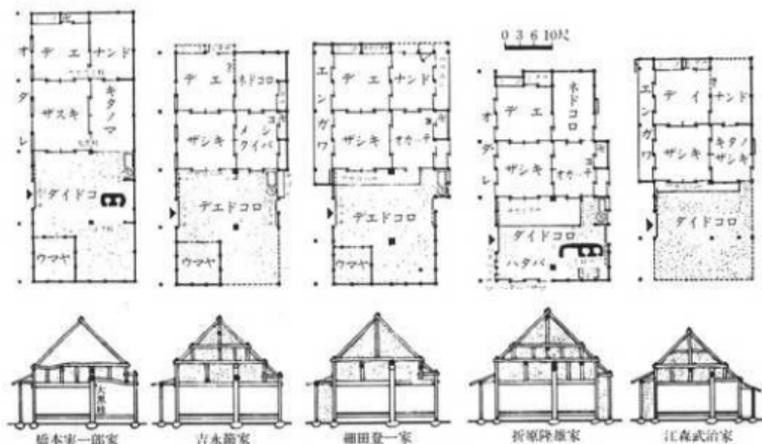
橋本実一郎家(写真6、図4)は以上のような不整形田字型民家の中で、最も古い遺構と推定されたものである。ナンドはキタノマとデエの二方向から出入り可能となっている。しかしデエとナンド境では、まだ半分を土壁にしている。

当遺構は軒高の低い平家造りであり、大黒柱は「逃げあり」でカンナ仕上げとされ小黒柱もカンナで仕上げられている。当家は寛保二年(一七四二)の村の大火で焼け、その後ただちに建造したが、現存遺構であるといえ、屋敷内には寛保二年四月の大火で焼け死んだ馬の石碑を残している。

当遺構は以上のような伝承、および建築の原形の示す各種特徴等から寛保二年か、あるいは三年に建造されたものとみてよいであろう。

吉水節家(写真7、図4)にみられるデエ表は半分を土壁にしており、古風である。

当遺構は当主(四四歳)の子供の頃、明治一三年生れのおじさん(昭



〔図4〕不整形田字型の民家（復原平面・断面図）

和三五五年没）の話によれば、一五〇年たつているといい、かつ天保三年（一八三二）生れの先祖卯平治の親が建てたものというから、一九世紀初期頃に建造されたものとみておけばよいであろう。

細田登一家（写真8、図4）はデエとザシキの前面にエンガワを付け、ナンドの裏側も開放してウラエンガワを設けて、デエとザシキ境、ナンドとオカッチテ境、ザシキとオカッチテ境、ザシキと土間境に差鴨居を用い、オカッチテの裏側も半分を開放している。

当家の土間（デエドコロ）には、現在でも木造船を釣り下げており、アゲフネとよんでいる。この舟は明治四三年の大水の時、当時村会議員をやっていた先祖の徳太郎さんが操って、多くの人助けをした由緒あるものという。

各室の昔の機能（用途）をみると、デエは冠婚葬祭の主室となる。ザシキはデエに付随した接客室であり、日常は近隣の軽い来客の接待をするところである。ナンドは若夫婦の寝室であり、年寄（おじいさん・おばあさん）はデエに寝たという。また、ナンドはお産をする室であり、人が死ぬとまずナンドへつれてゆき、ここで湯灌をしお通夜もナンドで行うという。したがって生れる時と死ぬ時の室はナンドであるということになる。しかし告別式は祭壇をつくり、ザシキも使用してとり行なわれるという。

オカッチテは家族の団らんの場所であり、食事室でもあった。ゆえに、ここを吉水節家のようにメシクイバとよぶ場合もある。

仏壇の位置はデエの上手に置かれる場合と、オカッチテ（キタノマ・キタノザシキともいう）側に置かれる場合とがある。

デエが冠婚葬祭時の主室になることを考えると、デエの上手に置かれるのが、本来の仏壇の位置であろう。オカッチテの裏側に仏壇を置くようになるのは、家族の最も頻りに集まる室であるオカッチテに仏壇を置いた方が何かと便利であることから、デエからオカッチテへと移行したものと考える。

細田家は初代の勇八（天保六年生）が建造したものである。一  
九世紀中期頃の遺構とみてよいであろう。なお、当家は暮にモチをつ  
くが、正月三ヶ日はウドンを食べ、モチを食べないという。

折田隆雄家（写真9、図4）は、デエとネドコロ境の間仕切に、土  
壁を残している。しかしネドコロは、裏側の一間を開放し、こごり  
直接採光している。土間にはウマヤを設けず、本来ウマヤの設けられ  
る表側片隈を、ハタバと称し、この前面と裏側の窓をハタバノサマと  
よんでいる。しかしこの窓には格子棒を嵌めていない。

当家の土間の裏側には西（上手）向きに泥土で造ったイロリがあつ  
た。イロリというから三尺角位のもので、家族が四方に坐して暖をと  
るものとはかり思っていた。当主にイロリのあつた場所を聞くと、土  
間の裏側隅部に、釜を掛ける二穴の釜掛けと、それから出たコ字形（泥  
土を低く盛って造つたもの）の火焚場を示して、これがイロリ。だ  
と教えてくれた（図4）。納得がいかないのに、さらに二穴の釜掛けだ  
けを、何とよぶのか問ひ質すと、それはカマクドとい、カカクドに接  
したコ字形の火焚場部分を、イロリと称するというのであつた。

即ち、話を整理すると、正面に焚口のある泥土製の釜掛けを、カマ  
クドといい、これに接したコ字形の火焚場をイロリと称し、ここには  
カギツルシも下つていたという（写真14参照）。しかし一般には、カマ  
クドとイロリをひくくめて、イロリともよんでいるのであつた。キ  
ジリとは焚木を入れておく、細長い木製の箱のことである。

当家は建造年代についての記録・伝承等を残していない。しかし、  
明治四十三年の大水の時、利根川の堤防が欠壊して、鴨居の高さまで  
出水したということを伝えている。復原された建築の原形の示す各種  
特徴等により、遺構は一九世紀中期頃に建造されたものとみておけば  
妥当であろう。なお、当家は「逃げ」のある大黒柱の様子を写真で掲  
げておいた（写真10）。

江森武治家（写真11、図4）は土間妻側の改造激しく、復原のむず

かしいところがあつた。遺構は初代（昭和二〇年没）が建造したもの  
と伝えるから、一九世紀末頃のものともみてよいであろう。なお、当  
家は現在でも土間に舟を下向きにして釣っており、アゲフネとよんで  
いる。

#### (一) 不整形田字型遺構についての考察

##### (1) 間取について

平面をみると建坪のほぼ半分を土間とし、他を床として四つの室を  
田字型に配置する。しかし、表側の二室より裏側の奥行の方が狭いた  
め、変形の田字をあらわすことから「不整形田字型」と仮称したので  
あつた。

この形式の最古の遺構は、橋本実一郎家で一八世紀中期に建造され  
たものであつた。ナンドはキタノマとデエの両室から、出入可能になつ  
ている。しかし、デエとナンド境には土壁を残しており、ナンドはま  
だ閉鎖的性格を残している。大黒柱・小黒柱をカンナ仕上げとし、大  
黒柱は逃げもある。また、キタノマ（オカッチ）と土間境は開放して  
いるが、ザスキと土間境は建具を嵌めている。したがってザスキは冠  
婚葬祭時や賓客のあつた時、主室となるデエに付随した、いわゆる。統  
統き座敷としての体裁を整えている。そして不整形田字型の初期遺構  
は軒高低、屋根裏利用を考へていない。しかし、一九世紀以降の比  
較的新しい遺構では、ザスキの上部に限り根太天井を張り、また土間  
上部に竹スノコ天井を張るなどして、屋根裏を利用している。

ナンドの機能は寝室であり、この形式になって新たに出現したザシ  
キ裏の室（キタノマ・メシクイバ・オカッチ・キタノザスキ等と称す）  
の機能は食事室兼家族の団らん室であつた。ナンドは寝室の他にお産  
をし、死人が出た場合はまずここに安置して通夜をし、湯灌もこの室  
で行なうという室であつた。

以上のような間取の不整形田字型は、広間型から生成したことが明

らかにされた。それは広間型におけるザシキをデエとナンド境の間仕切線の延長上で仕切ることによって、生れたことと推察されたからであつた。

## (2) 構造について

不整形田字型五遺構のうち、橋本実一郎家と江森武治家の二遺構は、屋根裏を利用していなかった。そして屋根形式をみると、橋本実一郎家を除く四遺構が、低い前兜造りで、前面の下屋だけ、一段低い瓦葺屋根にしている。不整形田字型が広間型と異なる構造上の大きな違点は、大黒柱と小黒柱が棟通りから裏側へずれていることであつた。これは構造上の理由よりも、間仕切位置の都合に合わせて大黒柱・小黒柱を配置するようになったことを示すものとして重要である。

## (二) 不整形田字型遺構についての総括

以上考察してきたところから、不整形田字型は平面・構造上の特徴等から、広間型から生成したものであると推察された。

不整形田字型にみる裏側の二室は、いずれも奥行が半端な一間しかないところに、さらに発展する可能性を秘めていた。したがつてこの形式は、民家の完成された形式とは考えられず、次の形式に移行する間の、過渡期の一形式とみるのが妥当であらう。

即ち、寝室とされたナンドと家族の居間兼食事室であつたオカツテが、よりゆつたりとした広さを求めて拡大すれば、次の田字型になるわけである。このようなところから、不整形田字型は、民家の平面形式としてまだ、不完全なものであつたとみてよいであらう。

不整形田字型の建造された時代の範囲は、遺構でみる限り、一八世紀中期～一九世紀末期までであつた。

## 九、田字型の民家

二三棟の調査遺構中、この形式に属する民家は八棟（約三・四・八％）で、最も多かつた。

野本素司家（写真12、図5）は表側と裏側にエンガワを付け、大黒柱・小黒柱・ナカズミ柱を梁間の中心線上で、桁行方向一直線上に並べて建てている。しかしこれらの柱位置は棟通りにあるのでなく、棟通りより少し裏側へずれている。当家はデエドコの裏側寄りに、二穴の泥土製カマドを残している。（写真13）。プロパンガスの普及で現在使用していないが、昭和四五年頃まで使用していたという。しかしこのカマドは後で造られたもので、当初からのものではアガリハナの裏側寄りに、イロリと接して設けられた一穴の泥土製カマドであつたという（図5参照）。また、土間の表側下手を「ハタバ」と称し、昔ここで機械をしたのだといい、表側の格子窓を「ハタバノサマ」とよんでいる。当家は五代前の五郎右衛門賀親（明治一六年没）が建造したというから、一九世紀中期頃の遺構とみておけばよいであらう。なお、当家は家号を「ノモトノホンケ」といい、正月三ヶ日はウドンを食べ、モチを食べない習わしであるという。しかし、モチは毎年暮の二八日についているという。

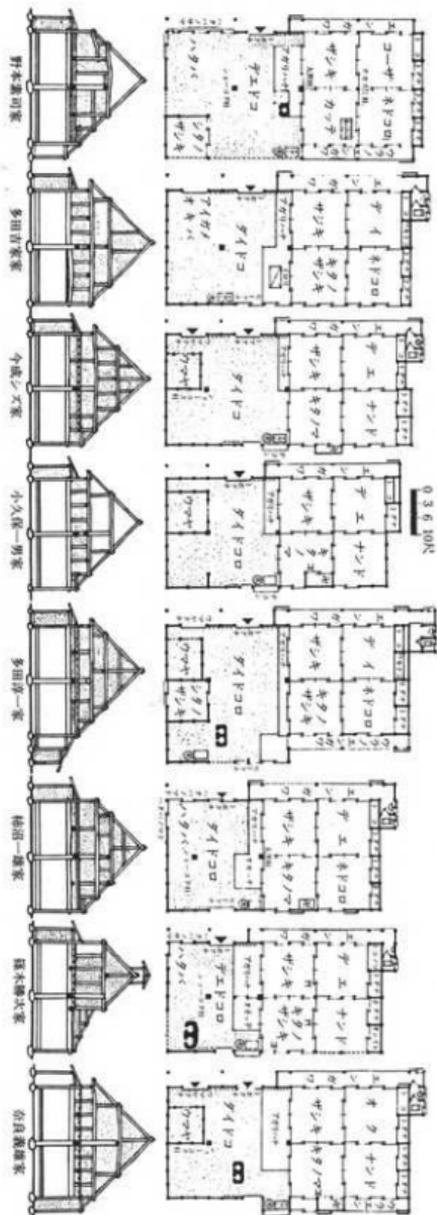
多田吉家（写真15、図5）は江戸時代に名主と勤めた家柄である。明治になると農業のかたわらに、紺屋もやっていたことから屋号を今でも「コーヤ」と称している。

当家はエンガワ西端のトコ裏に便所を設け、床上の裏側をすべて開放している。屋号をコーヤと称す通り、土間の表側隅部を「アイガメオキバ」といつている。トボグチを入るとザシキの下手に幅半間の板張床を張り出し、ここを「アガリハナ」とよぶ。アガリハナの裏側、キタノザシキの下前は幅一間の板張床を張り出し、この中央部に大き

なイロリを切り込んでいた。ザシキ上部に限って大引天井とし、土間上部は竹スノコ天井にして、ザシキと土間上部だけ屋根裏を利用してできるように考えられていた。

当家は現在裏側に下屋を付け、ここをオカツテとよんでいる。ここにはナガシヤレンヂの他に、泥土製二穴のカマドとこれに接して設けられた泥土製のイロリを残し、現在でも使用していた(写真14)。このようにイロリとカマドが一体になったものの総称をも、当地方では「イロリ」とよんでいる。そして昔、このような「イロリ」を多くの家々でみる事ができたという。

当家は江戸時代に名主を勤めた家柄といい、現存遺構は慶応三年(一



〔図5〕田字型の民家(復原平面・断面図)

八六七)多田淳一家の初代作兵衛によって建造されたものという。遺構は前面の軒を「セガイ」にし、グシを当地ではめずらしい箱棟（せがぎ）にしている。江戸時代においてこれらは、一般農家に許されていない家柄（せがぎ）のものであることから、当家はいい伝えの通り、江戸時代に名主を勤めた家とみて間違いないであろう。また遺構も慶応三年に建造されたものとみて妥当であろう。なお、当家のトボグチには大戸を残しており、今でも毎日夜になると大戸を閉めている。そして大戸の車は瀬戸物製である。

今成シズ家(写真16、図5)も多田吉家と同様に、エンガワ西端のトコ裏に便所を設け、「カミゴヤ」とよんでいる。当家はザシキ裏の

室(キタノマとよぶ)の上手裏側に、トダナを造りつけにして、このトダナの上手半分を仏壇にしている。

外観は前面を少し切り上げて低い兜造りにし、下に瓦葺の下屋をつけたもので、ザシキとキタノマを根太天井、ダイドコを大引天井にして、この部分の屋根裏を利用してゐる。屋根裏への採光はザシキ表の上部に開かれた幅二間の背の低い窓と、トブグチ上部の背高三〇センチ程の格子窓からだけであるので、十分な採光条件を確保しているとはいへない(写真16参照)。しかし、当地方にみる民家の屋根裏への採光方法は、明治末年に至つても当家と同様であるのが一般的であり、これ以上の発展を認めたい。

遺構は復原された原形の示す残種特徴等から、いい伝えの通り慶応元年(一八六五)に建造されたものとみてよいであらう。

小久保一男家(写真17、図5)は昭和四五年に調査した遺構である。平面の特徴は、前述の今成シズ家によく似ている。例えば両者もシキ裏の室をキタノマといい、この裏側上手にトダナを設け、トダナの上手側の半分を仏壇にし、ダイドコの下手の同様な位置に、ウマヤを配置している。

ザシキとキタノマの上部に根太天井、土間上部に竹スノコ天井を張つて、この部分は屋根裏を利用できるようになつてゐる。屋根裏への採光方法は、今成シズ家と同様である。

当家の建造についての記録・伝承等を残していない。しかし復原された原形の示す各種特徴等から、今成シズ家と同年代頃、すなわち一九世紀中期頃に建造された遺構とみてよいであらう。

多田澤一家(写真18、図5)も外観は、低い兜造りの前面に、一段低い瓦葺の下屋(オダレという)をつけたもので、野本素司家・今成シズ家・小久保一男家と同形式である。

当家は四室の田字間取の他に、「シタノザシキ」という四畳半大の室を、ウマヤ裏に設けている。

ここで各室の昔の使われ方について述べる。次のようである。デエは最も良い室とされ、冠婚葬祭時の主室となつたり、客の寢室として使われた。そのためデエには、古くからトコを備えるのを常とする。当家はトコの裏手に天袋と地袋のついたワキドコまで備えており、書院造りにみられる正面飾り、と入り入れてゐる。

結婚式の時の使い方をみると、婿はトコの前に坐り、嫁はワキドコの前に坐る。婿の隣りに男仲人が坐り、この下手に嫁側の一元客が血筋の濃い順に、ザシキの方まで一列に坐る。嫁の隣には女仲人が坐り、この下手に婿側の一元客がやはり血筋の濃い順に、嫁方の一元客と相對して坐るのである。そして嫁と一元客はデエ表のエンガワや入る習わしである。また、葬式の時にはデエ祭壇を造り、柩は前述の一元客の入つたのと逆に、デエからエンガワを通して外へ出て行くのだという。

村内の寄り合いがある時も、デエが主室になる。そして大勢集まる時はザシキまで使われる。

前述のことからザシキの用途は、すでに明らかであらう。すなわちザシキはデエに付随した接客室で、冠婚葬祭時や大勢の集会のある時など、デエ境の建具を取り払い、いわゆる「繰き座敷」として、デエとザシキの両室を一体として使用した。そしてザシキに家族や客の寝ることはなかつた。

デエ裏の室は「ナンド」とよぶ場合が多い。しかし当家のように「ネドコロ」と称している場合もある。ナンドあるいはネドコロには、年寄夫婦がねた。また死人が出る時、この室へまづ安置し、ここで湯灌をし、お通夜もこの室で行なう。なお、お産をする時もこの室であるというから、ナンドあるいはネドコロは、生れる時と死ぬ時に世話にならねばならないという、家族にとって重要な室であつた。

ダイドコロの下手にある「シタノザシキ」は、若い夫婦の寢室であつた。

当地方では板張床の一部を切り込んだ、いわゆる「イロリ」を橋本高平家・野本素司家・多田吉家家の三遺構にしか、認めることができなかつた。当地方ではこのイロリに代わるものとして、大きな火鉢を利用した。

キタノザシキは家族の居間に相当する室であつた。この室の中央部に直径三尺位の火鉢を置き、冬はこの火鉢でどんどん火をもやしと暖をとつたという。また、キタノザシキは家族の食事場でもあつたという。当家は大工をしていた初代の作兵衛が自ら造つたものという。作兵衛は越後の国三嶋郡出雲崎住吉町、秋山政七の三男であつた。作兵衛は明治二年二月七五歳で没している。彼は二人の妻を娶つているが、前妻は文久三年（一八六三）に没している。遺構は復原された原形の示す特徴、および前述の記録等から一九世紀中期頃に建造されたと思つておけばよいであろう。

なお、当家は「ウドンエンギ」といつて、正月三ヶ日の朝はウドンを食べる習わしであるという。また、当地方では当家のようにデエの上手に設けられた便所を「カミゴカ」とよんでいる。

トボグチには中央部に小さなクグリドのついた大戸（車は瀬戸物製）を残しており、現在でも立派にその機能を果していた。

柿沼一雄家（写真19、図5）の外観も、低い兜造りの前面に瓦葺の庇をつけたものである。当家の土間は桁行に三間しかなく、ウマヤを設けていない。土間の下手表側の隅部は「ハタバ」といい、昔ここで盛んに機織りをしたのだという。ハタバの前面および妻部に設けられた採光窓を、当家では「ハタバノサマ」と称している。しかし、当家のハタバノサマは格子樺を嵌めていない。

当家は母屋の西側に、高く土盛りをしたみごとな水塚を残している（写真20）。水塚上には、南北に棟をとつた二間×三・五間の切妻瓦葺二階家を建て、これを「クラ」とよんでいる。当家の水塚は明治四三年の大水を体験した先祖が、その時の水位より高く土盛りをして、

明治四四年に完成させたものという。水塚上のクラには、通常二〇〇〇日分の食料および味噌・醤油等を貯えておき、大水が出た時、一時的に生活の場をクラに移し、水が引くまで水塚上で生活できるように考えられていた。そしてクラの南側には、かなり広い平坦地を設けており、ここは大水の出た時、馬をつなぎとどめて置く場所ということであつた。

当家の母屋は、初代に当る久兵衛の代に建造したものという。久兵衛の長男は、嘉永六年（一八五三）生れという記録を残していることから、母屋は一九世紀中期頃に建造された遺構とみておけばよいであろう。

篠木勝次家（写真21、図5）は上屋根をこれまでみてきたどの遺構よりも高い位置に据え、有効な二階空間を造り出しており、当地方でこのような二階造りの民家を見ることは極めてめづらしい。

平面的には前述の柿沼一雄家と大変よく似ている。例えばエンガワの上手にカミゴカ（上便所）をつけ、土間にウマヤを設けておらず、土間の下手表側隅部をハタバにしていることなどである。そして当家もハタバの採光窓を、表側と妻側の全く同じ位置に開き、格子樺を嵌めていない。しかし当家もこの窓をハタバノサマとよんでいる。

当家は建造当初より、棟の中央部に小さな切妻屋根の換気窓をつけていた（写真21）。当地ではこの換気窓のことを、「ヤグラ」あるいは「タカマド」と称している。アガリハナ真側のオカツテはメシクイバともいい、ここで家族が飯をたべたという。

便所はカミゴカ他に、母屋と離れて東南方向に外便所もあつた。この外便所のことを当家では「シタバベンジヨ」といい、当地方における外便所の一般的な呼称であるという。

遺構は先祖の栄太郎（明治二六年七四歳没）の代に建造したものと伝えるから、一九世紀末期頃（明治一〇年代か）のものと思つておけばよいであろう。なお、明治四三年の大水の際には、当家の鴨居の高さ

まで出水したと伝えている。

奈良義雄家(写真22、図5)は調査した田字型遺構の中で、建造年代の最も新しいものであった。昭和四五年三月の調査の時、おばあさん(八〇歳)の話によれば、遺構はおばあさんの親の代に建造したものと伝えていたから、一九世紀末期頃の建造とみておけばよいであろう。当家は建造年代が新しいにもかかわらず、篠木勝次家のように、有効な屋根裏空間を造り出しにいかかわらず、篠木勝次家のように、階下の立派な養蚕空間を持つ遺構を、ほとんど見受けなかったのは、特筆すべきであろう。

その大きな理由の一つに当地方が水田地帯であり、山間部と違って畑地が少なかったため、あまり養蚕の盛行をみなかったことをあげてよいであろう。

#### (一) 田字型遺構についての考察

##### (1) 間取について

この形式は床の上に、八畳大の室を四つ設けたもので、丁度「田」の字の間取りとなることから、「田字の家」とよばれるようになったと考えられ、ここでは田字型と仮称したのである。

調査遺構によれば、田字型の年代的な分布範囲は一九世紀中期以降にみられ、最も新しい民家の示す平面形式であった。したがって田字形は、田字型遺構よりも分布年代の遡る、不整形田字型から生成したとみてよいであろう。すなわち、不整形田字型における裏側の二室が、前面の二室と同じ広さの空間となり、より開放的になったものが、田字型民家であろうと推察されるのである。

各室の用途をみると、不整形田字型と田字型は、全く同様である。例えば表側二室のデエとザシキは、焼き座敷として接客に使われ、デエを最も上等な室とした。デエ裏の室(ナンド・ネドコロなどよぶ)は、その名の示す通り寢室であった。また、ザシキ裏の室(キタノマ・

メシタイバ・オカッテ・カッテ・キタノザシキなどよぶ)は、家族の団らんの場であり、食事室であった。

一九世紀中期以降になると、土間(ダイドコ・ダイドコロ・デエドコ・デエドコロなどよぶ)の表側下手空間をハタバとよぶようになり、この表側や裏側の外壁に窓(地上三尺位の位置に窓台を置く)をつけ、外側に縦格子棒を嵌めて、この窓を地元ではハタバノサマとよんでいる。しかし、より新しい遺構では縦格子棒のない窓でも、ハタバノサマとよんでいる。(柿沼一雄家・篠木勝次家はその例である)。

##### (2) 構造について

田字型遺構では、どの場合でもエンガワを除いた梁行長さの、中心点を通る桁行方向線上にナカズミ柱・大黒柱・小黒柱を整然と配置している。しかし、これら三本の柱は、棟通りより裏側へずれるのが原則ではない。いずれの場合でも、棟通りより裏側へずれるのが原則である。また棟下より裏側を立てる場合が多く、一九世紀末期の遺構でも棟東を立てており、特記すべきことである。

もう一つの特記事項は、一九世紀末期になってもデエとザシキ表の中間に柱(当地方ではマバシラとよぶ)を立てていることである。すなわち他地方の場合、差鴨居が普及すると、マバシラは省略されるようになるのである。しかし当地方の場合、デエとザシキ境には、ザシキとキタザシキ境では、一八世紀中期になるとすでに差鴨居の採用をみるにもかかわらず、デエとザシキ表に限って、最後まで(一九世紀末期に至っても)差鴨居を用いないのであり、大変めずらしい現象である。

大黒柱の「逃げ」の有無についてみると、一八世紀初頭頃までは「逃げ無し」であり、これ以降の場合、すべて「逃げ有り」となっている。また、大黒柱の仕上げについてみると、一七世紀末期の例ではチヨーナ仕上げとされ、一八世紀初頭以降すべてカンナ仕上げにされている

(表3参照)。

主にデエの桁行寸法からみた二間の内法柱間寸法をみると、一八世紀中期を境にして、それ以前は一、七一一一、七七尺であり、それ以後一八世紀中期頃まで一、二尺より幾分広い柱間となる。そして一八世紀中期以降になると再び、一、六二一一、七五尺の狭い柱間となる(表3参照)。いったいどうしてこのような変化があるのか、この点の追求は今後の研究課題にしたい。

## (二) 田字型遺構についての総括

田字型遺構は、全調査遺構二三棟中、八棟で最も多く、その割合は約三四、八%であった。

年代的な分布範囲は、遺構でみる限り一八世紀中期以降のものばかりであった。また、遺構を建築面からみた場合、即ち平面および構造にみる各種の手法や建築的特徴からみても、最も新しい民家であった。したがって田字型民家は、当村の一般農民層における民家変遷史の上で、最終到達点に位置する最も新しい民家形式であるといえる。

ここで田字型に至るまでの間取の変遷をふり返ってみよう。まず田字型の前身間取は、不整形型であった。そして不整形田字型は、遺構でみる限り一八世紀中期—一八世紀末期まで存在し、古い遺構の場合、単純な架構の平家造りで、閉鎖的性格も残っていた。このようなところから、不整形田字型は三室の広間型の機能分化の結果、生まれたものであると考えられた。そしてその出現時期は、遺構でみる限り、一八世紀初期—中期頃にかけてであったと推察しておく。

## 十、多間取型の民家

二三種の調査遺構中、この形式に属する民家は五棟(約二一、七%)であった。このうち四棟は、上手裏側へし字型に室を突き出したもの

で、郷土で、**曲り家**と称す家であった。四棟の曲り家にみる先祖の役職は、大名主一、名主二、組頭一例である。このことから当地方にかつてみられた曲り家は、江戸時代に組頭以上の役職を勤めた、格式の高い家でないと許されなかつた形式であつたものと考えられる。

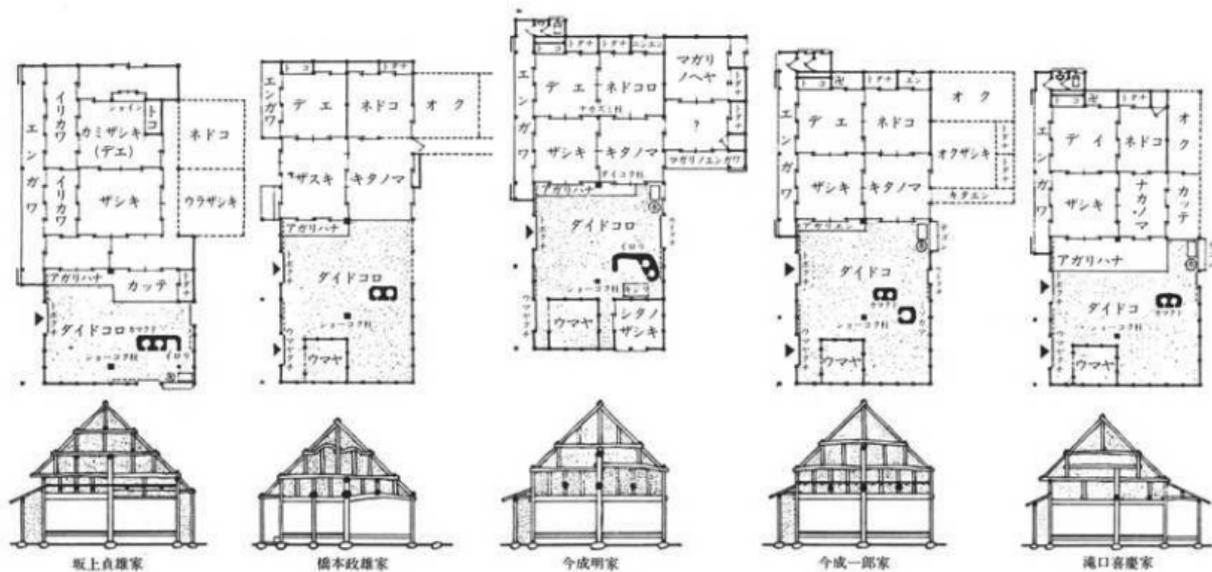
**板上貞雄家**(写真23、図6)は、江戸時代に大名主を勤めた家柄である。主な室はカミザシキ・ザシキ・ネドコ・ウラザシキの四室であり、ネドコとウラザシキを裏側へ突き出して曲り室にしたものである。そしてイリカワやこれに似た室を数え、合計九室にもなり、大名主の家柄にふさわしい間取である。軒をみると南と西側をセガイにしており、二方セガイとよぶ。村内で軒をセガイにしているのは七例あつた。しかし当家以外は皆一方セガイであつた。当家はカミザシキに南面してトコを設け、付書院まで備えている。二三種の調査遺構中、書院を備えていたのは当家だけであり、しかも農家でよくみられる平書院でなく、付書院にしていることなどを考え合わせると、建築面からも大名主であつたことが伺えるところである。

当家は遺構の建造に関する記録、伝承等を残していない。そこで復原された建築の各種特徴等から推察すると、遺構は一八世紀末期頃に建造されたものとみて妥当であろう。

**構本政雄家**(写真24、図6)は、田字型の上手裏側に、八疊二室を突き出した曲り家である。また、ザシキの表側では、下手寄り幅一間の簡略化された式台を備えていることなどを考え合わせると、伝承の通り江戸時代に名主役を勤めていた家柄とみて間違いないようである。

当遺構は先祖の六三郎(文政一一年生)が、五歳の時建造したと伝えていることから、天保三年(一八三二)頃建造されたものとみて、よいであろう。

**今成明家**(写真25、図6)は、田字型間取の裏側桁行方向に、二室を並べて突き出した曲り家である。当家も江戸時代に、名主を勤めた



〔図6〕多間取型の民家（復原平面・断面図）

家柄である。

遺構は先祖の秀蔵の代に、多田淳一家の初代である作兵衛によつて、弘化二年（一八四五）に建造されたものと伝える。作兵衛は越後の国の出身で、大工として自分の家や当家のほか慶応三年に、多田吉吉家も建造している。

当家で生れ育つた今成久雄氏（明治四一年生）の話によれば、当遺構は上棟の際、梁等に込栓を打ち込むための潤滑油として、菜種油を三升も使つたという。百数十年も経た木造建築が、今なお立派に生き続けている秘訣を、ここに見出すことができた思いであつた。

現代建築は利潤追求の見地から迅速に組み上げられることを、最大の目標にしているため、部材接合部の柄穴を、ゆるゆるに造り、すべて釘等の金物で補強されている。しかし、このような補強金物は、数百年という耐用年数を対象にした場合、ほとんどあてにできないのである。私は民家調査で入梅時に、屋根裏へあがるとしてかきかいておられるような時代、太い梁に打たれた釘等の金物が、汗をかいており、その周囲の木質に腐りを生じているのをよく見受けける。このような現象から、数百年にわたる長期間の耐久性を目標とした場合、釘等の金物で補強された建造物は、全く期待できないことを知らされるのである。明日の新築家屋より、現存する江戸時代小家の方が、はるかに永く生き続けられるのだが、人為的に消されてゆく古民家を見るたびに、胸の痛む昨今である。

なお、当家のグイドコロの裏側には、二穴のカマドと、これから延びたし字形のイロリを備えていた。そしてウマヤの裏側には、シタノザシキを設け、これを若夫婦の寝室にしていたという（図6参照）。

当家は雨仕舞が悪いということ、五十年前に裏側へ突き出した二室（マガリという）をもぎとつて直家にし、今日に至つてはいるのだと伝える。

今成一郎家（写真26、図6）は、今成明家と同様に、田字型の裏側

桁行方向に二室を突き出した曲り家である。そして突き出した二室は、上手を「オク」といい、下手を「オクザシキ」と称したという。しかし現在では、裏側の二室をもぎとり、田字型間取の直家にしている。

遺構の建造年代は、昭和四五年三月の調査時点で、二二五年前に建造したと伝えていたことから、一九世紀中期頃とみて妥当であろう。

なお、当家は江戸時代に、組頭を勤めた家柄であると伝えていた。

滝口喜慶家（写真27、図6）は、曲り家でない。当家の間取は、不整形田字型の裏側でない。当家の間取は、不整形田字型の裏側に二室を加えた六間取で、裏側の上手を「オク」、下手を「カッテ」と称している。そして裏側の間は、桁行方向すべてにわたつて、下屋造りにしている。

遺構は慶応元年（一八六五）に建造されたものと伝えるが、復原された建築の各種特徴等からみても、いい伝えを信じてよいものと考えられる。

#### (一) 多間取型民家の考察

二三棟の調査遺構中、五棟が多間取型に属した。このうち四棟までが曲り家であり、上手裏側へ二室を突き出したものであつた。そして、これら四棟の先祖は江戸時代に、組頭・名主・大名主等の村役を勤めた家柄であつた。したがつて当地方にかつてみられた曲り家は、村内の特殊階級に属した、上層農民の民家形式であつたと考えられる。

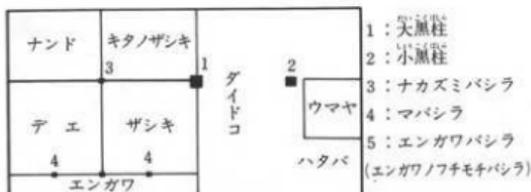
曲り家は外観に風格を持たせるのに有効であつた。しかし屋根の曲つた部分に谷ができるため、雨仕舞を悪くし、雨漏し易い欠点があつた。このような理由から四棟の曲り家は調査時点ですべて裏側へ突き出した室をもぎ取られており、直家になつて来た。

当地方の曲り家は、平面や構造等の特徴からみて、特殊なもの除いて、田字型の裏側に二室を突き出したものであることから、主として田字型の成立以後発展し、上層農民の間に普及したものと考えられる。

したがって上層農民の間で、曲り家が主に建造された時期は、遺構から察する限り、一九世紀初期～明治に至る間の約半世紀余りの期間ではなかったかと考えられる。

## 十一、各部の考察

### (一) 柱の名称



(図7) 柱の名称図

- 1: 大黒柱
- 2: 小黒柱
- 3: ナカズミバシラ
- 4: マバシラ
- 5: エンガワバシラ  
(エンガワノフチモチバシラ)

図7に掲げたように、土間(ダイドコ)と床(上境)のほぼ中央にたつ柱1を大黒柱とよび、これと対象に土間側にたつ柱2を小黒柱と称し、この両柱の名称は、どの家でも聞くことができた。しかし大黒柱と相対して、床上の中央部にたつ柱3は、なかなか聞き出せず、三例を聞いただけであった。三例とも3の柱名をナカズミバシラとよんでいた。これに漢字を当てれば「中隅柱」という字になるのであろう。4の柱名はマバシラと称し、一例を聞いただけであった。5の柱名もほとんど知っている人はなく、エンガワバシラとエンガワノフチモチバシラというよび名を、それぞれ一例ずつ聞いただけであった。

3・4・5の柱名について、若い人は全く知らず、聞き出すのに大変

苦労した。しかし幸にも、数名の古老からその名を聞き取ることができたのであった。このような柱名も、それを話してくれた古老達が、亡くなってしまおうとやがて伝承されなくなってしまうであろう。そのような状況は残念ながらも目前にせまっている。また、伝承者ばかりでなく、これらの柱を残している遺構も、急速に滅びつつあることを考えると、幾分運い感はあるものの、まことによい時期に調査をすすめたものだと、胸をなでおろしているのがいつわらざる心境である。

### (二) オダレについて

当地方では、表側の下屋のことを「オダレ」という。一八世紀初期以前の古い遺構の場合、オダレは上屋の屋根と一体になって、葺きおろされていた(図3の橋本・小松原家の断面図参照)。しかし、一八世紀中期以降になると、上屋の屋根とオダレの屋根は、別に造られるようになり、上屋の屋根とオダレの屋根との間に、段差を持つようになる。そして、一八世紀末期以降になると段差間に文の小さい窓を設け、屋根裏へ採光するようになるのである。しかし、山間部でみる養蚕農家のように、屋根裏が大きく活用され、総二階造りへと発展を遂げることはないのである。屋根裏へは、上屋の屋根とオダレ屋根の間に設けられた、文の低い窓から採光するだけである。オダレ柱の上部にのける桁は、オダレゲタとよび、上岡金治家(写真28)のように、オダレも草葺にしている例があることから、古くはオダレも草葺にしたものであろう。

### (三) 水塚とあげ舟

当地方は北に渡良瀬川、南に利根川という両大河にはさまれているため、古くから水害に悩まされてきた。このため調査した家は、すべて屋敷内に水塚を持っていた。水塚は当地方特有の施設で、低いもの

でも1m、高いものでは二・五mもある立派なものもある。水塚の上には、普通二間×三間程度の二階屋を建て、クラとよんでゐる。このクラ内には、米・麦を始め味噌・醬油等や大事な家財書具等を備えておき、大水の出た時、一時的に約一ヶ月位はクラで生活できるように準備されていた。

また、屋内のダイドコあるいはオダレの軒下には、常時木製の舟を釣っていた。これを当地の人達はあげ舟とよび、水害に対する緊急避難の方策を常に用意していた。しかし最近では、立派な堤防ができ、ここ三〇数年間、水害を被ることもなくなつて、その恐ろしさも忘れられつつある。その結果今日、あげ舟をみるのはめづらしくなつてしまひ、今でも民家のダイドコ上部に、あげ舟をみる例は、江森武治家(下江黒、写真29)と細田登一家(新里)の二軒だけになつてしまつた。また、高い位置にクラを建てている水塚は、日常の利用に不便であるため、現在では無用の施設と化している。そして最近では、土地を有効に利用するという観点から、取り壊されるものが多くなつてゐる。

註

- (1) 民家の屋内は普通桁行のほぼ中央で、床<sup>とこ</sup>上部分と土算部分に分かれます。この場合、床<sup>とこ</sup>上部分の方を上手<sup>うで</sup>といひ、土間寄りの方を下手<sup>したて</sup>と称す。
- (2) 桑原隆著「住居の歴史」現代工学社、一三九頁〜一四二頁参照。
- (3) 大黒柱がザシキ側にはみ出していることをいう。
- (4) 床<sup>とこ</sup>上より約一・五尺までを土壁とし、この上部に背丈四〜四・五尺の窓を設け、内側に二枚の明り障子を嵌め、外側に縦格子をつけ、た窓を「サマ」という。
- (5) 大黒柱がザシキとダイドコ境の中心線より、土間側に逃げて据えらるることを大黒柱の逃げがあるという(写真10参照)。
- (6) デエとザシキの表側中央部にたつ柱を当地方では「マバシラ」とよ

ぶ。  
 (7) 床<sup>とこ</sup>上より一・五尺位を土壁とし、その上部を開口部にして、内側に明り障子二枚を嵌め、外側に縦格子を組み込んだ窓のこと。  
 (8) 本来は人の乗る方を上に向けて釣っておくのである。しかしごみがたまるという理由から、昭和三年頃から下向きに釣るようになったという。

(9) 赤城南麓地方の場合、棟下に東を立てるのは、一七世紀末期頃までである。従つて古い遺構の示す一つの特徴となつてゐる。しかし当地の場合、この特徴が適用できないことになる。

話者 (斗合田)

- |      |      |      |
|------|------|------|
| 梁瀬朝一 | 明治四一 | 六・一〇 |
| 機村伊吉 | 明治三六 | 五・二六 |
| 砂賀織一 | 明治三四 | 一・二五 |
| 機村政一 | 明治四〇 | 三・二三 |
| 丸山あき | 明治四四 | 一〇・八 |
| 蓮見やす | 明治三五 | 九・一八 |
| 梁瀬いと | 明治四一 | 八・一  |



〔写真1〕多田団吉家（上江黒）



〔写真2〕橋本高平家（斗合田）



〔写真3〕小松原一好家（南大島）



〔写真4〕蓮見一雄家（南大島）



〔写真5〕新井一郎家（田島）



〔写真6〕橋本実一郎家（斗合田）



〔写真7〕吉永節家（梅原）



〔写真8〕細田登一家（新里）



〔写真9〕折原隆雄家（大佐貫）



〔写真11〕江森武治家（下江黒）



〔写真12〕野本素司家（大輪）



〔写真13〕野本素司家に残る泥土製のカマド



〔写真10〕折原隆雄家の大黒柱  
柱を土間側（右）へずらし、ザシキ  
（左側）にはみ出さないよう工夫し  
ている。これを大黒柱の「逃げがある」  
といい新しい特徴の1つである。



〔写真14〕多田吉家家に残る  
イロリ（左）とカマド（右）  
イロリ上部には竹製の「カギツツル  
シ」が下げられ、この先端にナベを  
つるしていた。



〔写真15〕多田吉家（上江黒）



〔写真16〕今成シズ家（南大島）



〔写真17〕小久保一男家（南大島）



〔写真18〕多田淳一家（上江黒）



〔写真19〕柿沼一雄家（江口）、左手の瓦屋が水塚上に建てられた「クラ」である。



〔写真21〕篠木勝次家（大佐貫）



〔写真20〕柿沼一雄家の水塚



〔写真22〕奈良義雄家（田島）



〔写真23〕坂上貞雄家（中谷）



〔写真24〕橋本政雄家（斗合田）



〔写真25〕今成明家（南大島）



〔写真26〕今成一郎家（南大島）



〔写真27〕滝口喜慶家（田島）



〔写真28〕上岡金治家（南大島）、オダレの  
屋根も草葺きになっている。



〔写真29〕あげ舟（江森武治家・下江黒）

## 有形民俗文化財

### はじめに

生活事象のあらゆる分野に係わっている有形の民俗文化財の調査では、その対象・範囲をかなり限定しなければならぬ。今回の調査では、生産・作業面の用具に焦点を絞り、その中で使用されてきた主要な諸用具を抽出する方法で実施した。調査の範囲は、一、農耕関係用具、二、漁撈用具、三、糞資用具の三つの大まかな内容でおさえ、短期間の調査でもあり、用具の個々の詳しい調査はできず、従って質的な面よりも量的に通観する簡単な事例報告にとどまらざるをえなかつた点が反省される。

調査は七月二十一日、七月三〇日の二日間を下見調査とし、その中から七軒の調査宅を選定させていただいた上で実施した。調査に協力いただいた各調査宅は左記の通りである。

- 一、斗合田三七〇 櫻村政一氏宅
- 二、下江黒一三二 佐藤敏夫氏宅
- 三、梅原七九二 恩田万吉氏宅
- 四、須賀四六五 田口光雄氏宅
- 五、大輪二〇〇三 島田誠作氏宅
- 六、矢島四〇〇四 奈良原与惣治氏宅
- 七、入ヶ谷五四四 荒井雄一氏宅

次に明和地区の全体的な傾向は掴みにくいので特に気の付いた二、三の特徴・課題等を項目に沿って列挙することにす。

農耕関係の用具では、南部利根川沿いの低湿地湿田に特有なタイプ

の所有が平均的にみられ、板倉・千代田とともにこの地域の水田経営の特色を示している。タブネは舟大工が製作したといわれるが、畜力・人力の押し引の別によって大きさが異なり、また形態にも若干の差異が認められる。揚水具としてのヒキドイは板倉ではマスコとも呼ばれており（群馬県民俗調査報告書第三集）、田の位置より低い場所を流れる用水の水を取り入れるための工夫であるが、同様の水揚げ作業に使用されていたニナイオケや、主に板倉方面で隣接地域での三通りの揚水方法は土地の状況・経営のあり方など興味ある問題を提示する。特に、ニナイオケによる方法は「成形図説」にみえる取柄や「耕家春秋」の水替桶などの原始的な方法とも共通するかも思われる。田畑の耕地、耕作具のうち、鍬はいわゆるテンガがサクキリグワと称される野州鍬（日本の鎌・鍬）大日本農会編による）ではほぼ統一されているが、この種の鍬の使用範囲が県内のどの地域まで普及しているかは注目してよいであろう。ウナイオコシ（耕起）用の犁をあげておいたが、この地域では以前はオオガ（大鍬）と呼ばれる単用の無床犁が一般的であり、掲載はできなかつたが何軒かの調査宅では確認している。主として耕起具として利用される鍬にビツチュウグワとマンノウグワがある。両者ともいわゆる備中鍬であるが、これを区別して呼び分けている場所がある。県外でも備中鍬のことをマンノウと呼ぶ所は多い（前掲「日本の鎌・鍬・犁」）。しかし、マンノウについては「農具便利論」では油揚万能、杵葉万能等の除草具としてあげており、写真番号C-11のクサカキが前者に相当する。称呼による問題は残るが、明和所見のビツチュウグワ・マンノウに限っていえば、柄角の違い、作業内容の違い等により打鍬と打引鍬の性格を異にした呼称の使い分

けがみられるのではないかと感じられる。次に、クロトくりやゴボウなどの根作物の掘起し用具としてヘラがある。京動系で千代田ではヒラ・ヒラグワ・シヤクシ等の様々な名称で呼ばれており(前掲報告書第十四集)、明和でも各農家に二、三挺は常備されていてこの地域での必需道具であったことが窺える。

漁撈用具は、利根川、谷田川、新堀川の各河川をはりめ、用水路が発達したかつては池沼が村の各所に散在していた地域でもあり、多様な漁法が行われ、それに用いられる漁具も豊富であったようであるが、本調査では数量的には多くを確保できなかった。しかし、その中でも網漁に使用される網漁用具には幾つかの特色があった。種類ではトアミ・フクロアミ・フシアミ・ハズミアミ・ヨシデアミ・ドジョウアミなどがある。フクロアミ・ヨシデアミは大規模仕掛けの漁法にも使われる。フクロアミは入口を用水堀に張り渡して魚獲する方法で、川にスバリ(糞張み)して網を取り付ける入ヶ谷のクダリアミにはこの種の袋網が使われたものと思われ、また板倉で報告されている(「板倉町史別巻四」板倉町史編さん委員会編)ハツキリ網釜も漁法的には同類であろう。ヨシデアミやフシアミなどは最も一般的な漁具で子供でも手軽に扱え、用水堀や川岸近くでハヤなどの小魚を取るのに使用されるが、玄人がヨツデアミをマチアミとして使う場合には大型のものを用いられる。他に、トアミは魚種により網目の大きさが異なる、ハズミアミは主に舟上で使用される。またドジョウアミはドジョウ専門の網である。河川、池沼等の状況、魚獲の対象、使用者等により網の種類、使用方法等が大きく異なる点が網漁具の特徴であるかと思われる。釜はドウとは言わずそのまゝウケと呼ばれていた。種類はウケ・ドジョウウケ・ゴキ・ドカゴ・ガラスウケ・カナアミウケ等が聞かれたが、前三点を除いて現物を調査する機会に恵まれなかった。

糞蓋は、稲の空中薬剤散布が行われる、給桑用の桑に悪影響を及ぼすようになつてから急速に糞蓋農家が減少し、昭和五二年度以降皆無の

状態である(昭和五四年群馬県統計書)。従つて、蚕具を焼却処分にした家も多く、或はカンビヨウ切りにクワキリボウチョウを使用したり、干し物に蚕カゴを使つたりしている程度である。全体の報告例は少ないが、その中で上原の際に使用される本七の蚕カゴをゲンロクカゴと言つていた例は面白い。

報告した各用具は、直接的に生産活動と結びつくものであるもので、前出の「生産・生業」の項と合わせ参照ねがいたい。なお、報告文は基本的には図版に示した場所での聞き取り内容を記載し、他地区での内容は( )付きで表示するか地域名を文章に挿入した。(葛村真也)

## 一、農耕関係用具

### (一) 耕起用具

サクキリグワ(A-2 C-11 D-11 C-10 D-12) 農具の中でも最も中心的な耕起・耕作用具で、田・畑で使用されるが主に畑の播種溝のサクキリに多用されることからこの名称が付いている。サクキリのこととはまたウネタテともいわれる。

作業内容は、麦や胡麻・大根・人参などの種を播く前のサクキリ、麦作の中耕、除草、稲作のアゼツクリ、ナエマの短冊作りなど用途が広い。麦のサクキリでは、スキでウナイオコシた畑地をマンガやムツゴ・ツブテツコワシ等でジナラシたあと、シヤクボウに結んだシヤクゾナを畑に張つてこのツナに沿つてサクをキツた。また、麦の中耕は三回行ない、最初は十二月上旬頃土がまだ凍らない前にサクキリグワで麦の北側のキワをきり、その土を隣りの麦のキワに寄せて山をつくりヒナタにした。次は、春彼岸頃逆にならぬようにキリ、最後はアゲザクといつて四月上旬から中旬にかけて麦の穂の出はじめの頃再びヒナタになるようキツた。いずれもサクキリグワによ

る作業である。また、ナエシロでは播種床の短冊づくりにはサクキリグワが使われたが、この時はカネのクワよりヘラ付きのクワの方が都合が良かった。

A-2 C-11 D-11はいわゆる風呂鉞で、大輪ではこの木製台部の風呂をヘラと呼んでいた。ナエマの短冊づくりにこの鉞が向いているのは、金製の鉞より軽量で刃床部の裏面が平らになっているので使い易くまた短冊面を撫でてきれいに仕上げることができたからという。妻のサクキリでは、谷の底を平らになるようにキルが、下江黒ではこの鉞の肩部を前にして柄を押して谷の底を平らにするにも使われていた。

C-11 D-12は金鉞である。右の風呂鉞とともに野州鉞の種類であるが、柄は風呂鉞が風呂部の杓杓に挿し込んで楔で固定しているのに対し、二個のポルトで刃床部に取り付けられている。構造はこの方が進んでいるが、作業面では風呂鉞の方が都合が良い場合もある。

サクキリグワに限らず鉞類は館林の鍛冶屋「ボクキン」から購入していくる家が多かったが、板倉に買いに行ったり或は、佐野の方から売りに来ることもあったという。刃先の摩滅した鉞は村の鍛冶屋に持って行ってサクガケして新しい刃に付けかえてもらっていた。

クワ (C-9) サクキリグワに細長い又鉞の刃床を取り付けた形で、用途はサクキリグワと同様であるが、主に堅い土の場所で使用される。比較的新しい鉞でC-19は二三年前に板倉より購入した。

ピッチユウグワ (A-5 D-9 D-10) 主にクワバラの管理用具として使われ、大輪では別にクワバラマンノウとも呼ばれていた。また、サツマイモやサトイモなどの根作物の掘り取りにも利用されている。

クワバラウナイでは、モグリより早くウナエたといわれる。クワバラウナイは春蚕の始まる前に行われ、桑のカブツの間をクサカキで除草した後、これで桑の根元に土をウナイ寄せた。イモ掘りは十月末か

ら十一月初めにかけて行われ、まずイモの両側の土をこれで掘り取り更にイモを掘り上げた。マンノウとの違いを下江黒では形は似ているがコシ(角度)が小さいのでマンノウのように田・畑の耕起用には不向きであったといわれ、また大輪では重量があり慣れないという。せないがイモ掘りなどではマンノウより作業しやすいという。

A-5 D-10は同型であり、刃先がやや幅広で先端が平らな点特徴である。いわゆるバチ型備中鉞で下江黒ではこの刃型をイチョウツバと呼んでいた。刃先が広いので草の根をブツキるには都合が良かったといわれる。対してD-9は刃先が尖っておりイモ掘りなどで深耕する場合には具合がよい。

マンノウ (A-4 D-6 D-7 D-8) 田・畑の耕起用の手農具として、またツブテと呼ばれる土塊の砕土地用にも使用されてきた。

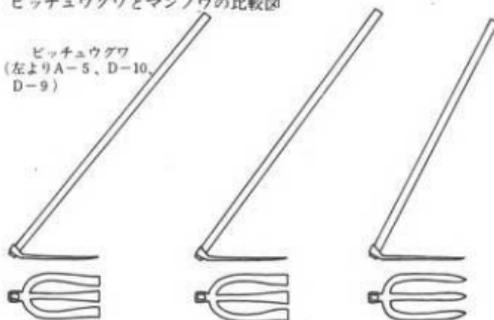
田のウナイオコシはオオガを牛・馬に引かせてウナう前は、全てマンノウによる手作業で行なった。オオガやスキを利用するようになってからも耕地の隅や狭い土地では欠かせない道具であった。田のウナイオコシの場合スキ・オオガで二日か三日頃カタツケエシという一ブズキを行ない、更に田植えの直前に二ブズキを行なった後で田の隅のスマッコと呼ばれる未耕起の部分でマンノウを使って起した。(梅原)

名称はマンノウ・シホンマンノウ・改良マンノウなどと呼ばれる。A-4は千葉から購入したものでシモウサマンノウとも呼ばれていた。マンノウの呼び名については、矢島ではピッチユウグワのこともマンノウと呼び、また先のクワバラマンノウの例からも若干の混同がみられる。

A-4 D-7は四本鉞で、一本の刃の幅は元から刃までほぼ同じ幅になっており、また幅は無く肩部から出た鉄棒を二個の輪金で柄に固定している。D-8は柄を欠いているが四本鉞のイチョウツバで、

ピッチェウグワとマンノウの比較図

ピッチェウグワ  
(左よりA-5、D-10、  
D-9)



マンノウ  
(左よりA-4、  
D-7、D-6)

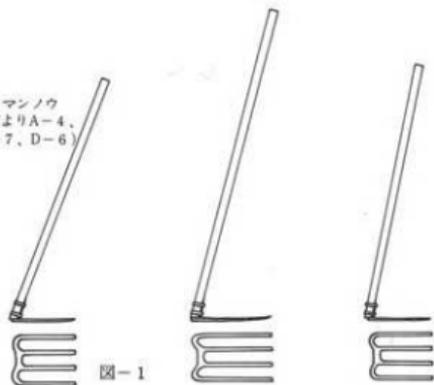


図-1

(図-1)  
刃先幅は肩部に対してやや開いており、櫛が刃床部の中にある。このマンノウはドブツタと呼ばれる湿田専用の道具という。D-8以外は主に乾田用で、特にD-7の改良マンノウは刃長が長く田面に深くささりすぎるので湿田には向かず、むしろ畑のゴボウ掘りなどに都合が良かったといわれる。前掲のピッチェウグワと呼ばれるものと比較すると、刃数・一枚の曲幅・柄の取り付け方法などが異なるが、特に刃床部の長さや柄角にその変化がみられ、マンノウの方がやや刃床部の長さが短かくまた柄角も大で打撃としての性格がよく示されている。

コグワ(D-2) 下江黒ではコグワ、矢島ではデンジグワと呼ばれる。クサカキのように畑の草刈りに使用されたり、小さい菜園や狭い畑でのサクキリにも使用される。  
風呂敷であるが、サクキリグワに較べると小振りして軽くまた頑丈にできている。柄杓は正方形に近く柄が太く柄角もサクキリグワより大きい。また、刃先幅も広い。小形軽量で、誰でも容易に扱える。  
ヒッタテグワ(A-12 D-11) 陸稲・大豆・麦等のサクを作る道具で、略してヒッタテとも呼ばれる。

鎌先を地面に挿し立て、柄を持って後退しながら引つ張る。柄は右側の腰のあたりに当てて引くが、慣れば使いやすい道具だったという(大輪)

刃床部は地面にくい込みやすいように風呂敷部を肉厚にして重量を加えており、低い位置で引くところから柄は長く、柄角もかなり大きい。D-21はモグリの柄にオオガの刃先を取り付けた自家製のヒッタテグワで、引き易いように柄に鉄棒を通して把手をつくっている。A-12は耕運機の導入された昭和三〇年代まで使用していたもので館林のボウキンから購入したものである。

ウネタテ(E-35) ヒッタテグワと同じく畑のウネタテ専用の引敷である。

櫛は無く輪金で柄を固定している。起した土を左右に分けるよう刃がV字形をなしている。

モグリ(A-11 D-31) 畝下で一般にエンガと呼ばれる深耕用の踏動である。用途は、クワバラウナイ、タオコシ、畑でのウナイオコシなどで、戦前までは広く使われていた。

モグリによる作業は男の仕事で、ピッチェウグワ

ワ・マンノウのように簡単に使える農具ではなかった。鋤先を斜めに地面にさし、足で踏み込んで鋤を土中に押し込み、刃床部を返して土を反転させる。

種類としては、木製風呂に鋤先を取り付けた形が多かったが、写真のように刃床部が鉄製で窓付きのものも見られた。これは、鉄製刃床部の軽量化と湿田の多い場所での粘湿土の離反をよくする工夫であるうと思われる。柄はA-11が風呂部に挿し込んであるのに対し、D-13はポルト締めになっており、足をかける部分も刃床部の肩ではなく単独で柄の中途に取り付けられている。

ツツキリ(D-13) 根の張った植物類を掘り取るための道具で、地面に突き挿すように動作するので、狭い場所での掘り起しには効果があった。

ヤマイモ掘りでは、その周囲をツツキリで突いて根を切断したあと掘り出した。刃先は両刃で鋭利である。

スキ(A-39は高北掣で、このあたりでは松山掣も多く使われていた。高北掣は双用掣で、操作レバーで調節することによって土を左右どちらでも反転することができる。双用掣がでてくる以前は、オオガと呼ばれる単用の無床掣が使われていた。オオガによる土の反転は左方向だけであった。オオガの前はマンノウやモグリによるウナイオコシが行なわれていた。

スキは牛・馬に引かせて田・畑を起すが、普通はタズナを取って牛・馬を引くハナドリとスキを操作するシンドリの二人で行われる。田でのウナイオコシは二回行われる。最初は二日か三日頃の一月か三月頃の一ブズスキでカツケエシともいわれる。次は田植え前の六月上・中旬頃の二ブズスキで、この作業はカタツケエシでスキワケた谷を埋める。(梅原)

スキ方は、まず田の畔の一辺に沿ってウナイオコシ、起し終るとスキを逆方向に向け牛・馬をスキワケた谷の中を歩かせながら最初のス

キハシメの側まで起してくる。この往復耕を順次繰り返して一通りスキオコシが終ると、次にマクラと呼ばれるスキを反転される側の田の両端の未耕起の部分起す。スキでよく起こせなかった田の四隅はスマッコともウマダチとも言われ、マンノウによる手作業で起す。

ヘラ(A-7) 明和村では、ほとんどの農家がヘラと呼ばれる踏鋤を二・三挺所有している。主に男のクロツキや畑のアゼトリに使用されるが、牛旁や人參掘りにも使用され、またスコップがわりに池の泥などを掘り上げることもあった。矢鳥では、鉄のスコップよりは泥が付かないので使いやすかったという。

クロツキでは、まず田に張った縄に沿ってヘラで目安となる浅い筋目を入れる。土をすくうにはヘラを縦に使ってこの筋に踏み込み、更にヘラの幅の間隔を置いて同様に踏み込んで平行な二条の切れ目を入れるたとすくい上げる。すくい上げた土は被せるようにぶつけクロを作る。これを繰り返して細長くできたクロはその表面をヘラでなでて平らにする。

A-7は柄に把手の横木を取り付けてあるが、これの付いていないものもあり、矢鳥では池の泥上げ用とクロツキ用で区別していた。横木の付いたものが泥上げ用で刃床部のヘラの部分が長いのにに対し、クロツキ用は横木なしでヘラも短いという。

## (二) 碎土整地用具

マンガ(A-10 C-13) 写真は歯が一列の押し振りマンガ・ずりマンガがあり、特にずりマンガの大きいものは障子ほどの大きさもあるというところでショウシマンガと呼ばれていた。

A-10は歯が台部の上まで突き出し、また引綱を結ぶ部分が鉄鉤なのに対し、C-13は歯が台部に埋めこまれ、引綱の取り付け部も木製である点が異なる。

マンガは引綱或いは鎖で牛馬のハモに結ぶ。整地はジゴシラエとい

い、ハナドリとシンドリの二人で行う。シンドリ一人で行う場合はタズナを後ろに引いて、牛馬の動きも同時に調節した。田ではスキオコシたところへ水を入れた状態で使い、畑ではウナイオコシたあとの土のやや乾いた状態で使うが、どちらとも泥や土の盛り上がった場所や固い所では把手を手前に斜めに倒して力を入れ、逆に凹地では力を抜いたりマンガをやや持ち上げるようにして均一にナラした。

マンガオシは普通短形の田畑を縦・横・縦の三回行なう。シロカキでは、一・二回目をアラツカキ、三回目をナラシツクワといい、最後のナラシは軽く押し歩き、地面を平らにしてカキアガリとする。田では、このあと更にジナラシで田面を平らにし、畑では、掻き残した畑の周囲をツブテツコワシやマンノウなどナラシ、ムツゴできれいに整地する。

マンガオシの順路は、まず畔に沿って掻き始め、反対側に行き着いたところで三マンガ分程の間をあけるようにして回転し、再び元の方向にナラしてゆく。これを連続的に順次移動しながら繰り返す。最後ミツバミ位になったらハミを順番にカキアゲる(図-2)。ハミは掻き残した部分がいい、マンガの幅によってヒトツバミ、フタツバミと数える。

カチマンガ(C-15) 作業内容は右の押しマンガと同じであるが、畑専用の整地用具であること、畜力でなく人力によってナラすことなどが特徴である。

男を牽引力として引かせる時は一人で引つ張り、力の弱い女の場合は引綱をテンピンボウの中央に結び付けてその両端を二人で引いた。一人で引く時は、引綱を牽引者のうなじに回してかけ、首の両側から出た綱を更に左右の両腋下をくぐらせる。(図-3)

先述の押しマンガと形状に大きな変差はないが、歯が割竹製である点が異なる。写真は歯が摩耗したり、欠けたりしているので小さく見える。カチマンガは牛馬の出でくる前に使われていたといわれ、鉄製

歯のマンガと較べるとかなり特異な存在かと思われる。

ジナラシ(D-27) 田面を平らにナラすための道具で、作業的には穀物を干す時に使われるホシモノケエシとも共通する。マンガで掻いたあとトロトロになった田の泥を稲苗を植えやすいように前後に動かしてその表面を整地する。

D-27は越後の人いわれ、柄の先を二又に割ってナラシ板にはめこんでいるが、取り付け部はゆるくできており、押しした板が前後に動きやすくなっている。この他に、柄を割らずにそのままナラシ板に押し込んだ形もあり、

マンガウナイ順路

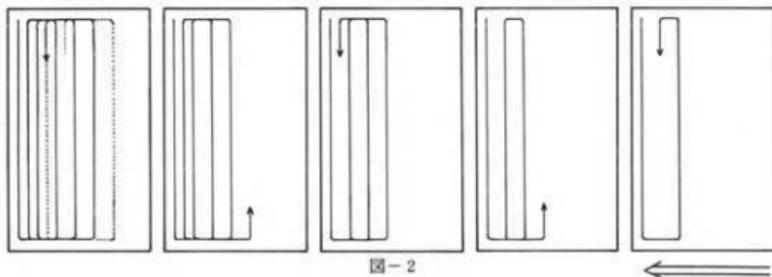


図-2

カチマンガによる使用想定図



図-3

この辺ではその形が多かったといわれる。

ムツゴ (A-18 D-30) 畑の整地用具で、スキ・マンノウで起した土をマンガでウナイ、ツブテッコワシで土塊を叩き壊した後、これで畑地を平らにした。カキナラして整地するだけでなく、時には砕土用具としても使われ、大

輪ではツブテッコワシの名でも呼んでいた。また、土コナシや除草にも使用されていた。

柄は長く、柄角もほぼ直角で低い位置での前後動作に適している。D-30は竹製の柄で、歯も台部に埋め込んでおり、A-8へ移行する発達段階を示している。

ツブテッコワシ (K-6 D-32) A-6 D-32とも同形態である。

マンガオシしたあとに残るツブテ (梅原ではコゴリ) と呼ばれる土塊を砕いて細かにする道具である。主に田に作るタウコムギの整地に使用され、矢島ではタポッコシとも呼んでいた。ムツゴも砕土用に使われたが、歯の多いツブテッコワシの方が能率よく仕事ができたという。作業方法は、垂直に地面に振り下すのではなく、手前に引きずる動

作を加えながら叩く。周囲のツブテを砕きながら後退してゆく。

### (三) 播種用具

タネマキキ (D-16 D-28) D-28の麦のタネマキキは、終戦直後より使われ始めた。それまでは、一升マスやカゴザルの中に入れた麦種を指先でつまんでサクの谷の中へ蒔き下していた。タネマキキの普及で、麦蒔き作業もはかどるようになり、手作業の三倍以上の速さで行えるようになったという。

麦の播種溝は谷底を平らにしており、タネマキキをこの中に入れて、柄に付いた横木を押して前進すると自動的に種が蒔かれるしくみになっている。蒔量は、調整装置で変化できる。

D-28は稲蒔専用のタネマキキである。矢島ではこの形より更に発達した金属製のものを見ることができた。いわゆる直蒔き用の播種用具であるが、直蒔きはマキタといわれ、梅原では新しい方法で館林の三村や谷田川沿いのドブツタでよく行なわれてきたといい、矢島では明治の末頃より盛んになってきたものでやはり館林がその中心だったという。水稲の直蒔きは、水をかけずにマンガで整地し、稲蒔を蒔いて稲が五寸程伸びたところで水を入れる。

D-28は稲蒔を入れる箱の前面に二個のウネタテ用の刃が装見されており、柄を引くとウネをたてながら稲が蒔かれるようになっていた。二条蒔きのタネマキキである。

### 四 管理用具

ツチイレ (A-14 C-6 C-7 C-8) 麦作専用農具で、麦の倒伏、凍結を防ぐために行なう土入れの作業に使われる。梅原ではこれをフリコミとも呼んでいた。

土入れ作業は、サクキリグワによる中耕のあとに行なわれる。サクキリグワで麦の根元に寄せた土をサクツツチイレの中にカキコミ、

麦の上で上下に篩って土を落す。土入れ回数は、十二月中と三月上旬四月上旬の三回、特に春の土入れは倒伏防止が目的だったが、この作業によって細かな草も土に埋もれてしまうので除草の役目も果たした。

形は、土入部が四角形と丸形の二種がある。梅原では、四角形が丸形より古かったという。四角形は入口が広いので土をアサるのに都合がよく、楽に入れることができた。逆に、丸形のツチイレは、先が尖っているのでアタリがよく、シャクリやすかったといわれる。A-14 C-18とも角形のツチイレであるが、先端の入口が三角形と直線型に分かれる。C-6 C-7は両方とも丸形の土入部をしているが、C-7については柄角がポルトで調節できる工夫がなされている。

ツチイレの使用は、麦作が減少した昭和三〇年代までであった。

クサカキ (C-1 C-4 D-18 A-15 C-2 C-3 C-17) 麦・陸稲・綿・大豆などの畑作物の間に生えた草を削ったり、クワバラのクワカブツの間の草を掻き込んだりするための除草具である。

作物畑の草掻きでは、そのまま削った草をカツチラカせて置けば、根が浮いているので天日によって自然に濡れてくる。クワバラでは、カブシの間を浅く掻いて草を一ヶ所に集め、山にしたところをクワバラマンノウで土を寄せて被せた。

C-3 D-17以外は手前に直に引き寄せて草を削り取る。梅原では、C-1 C-2 C-4 C-3の順に形が変化してきた。C-1は自前の柄に板金の刃を取り付けたものであり、刃床部は柄込みで作って柄に埋めこんで固定している。A-15 C-2 C-4 D-18は、いずれも半月形の窓付きのクサカキで、A-15 C-2はこの窓を幅広の板金を横にして塞いでいる。窓付きのクサカキは、掻いた草が窓から反対側に出してしまうので都合がよかったといわれる。柄は丸形が多いが、C-4だけは刃床部に近い方がやや角形になっている。刃床部の取り付け方は、C-4 A-15が肩部から出た込みを柄の外

側に出し輪金で締め、D-18 C-2は柄の中に柄込みを埋め込んで輪金で固定している。

C-3 D-17は比較的新しい型で、梅原では昭和四〇年代に出てきたといわれる。C-3は今年板金の雷電神社の縁日で購入してきた。刃形が三角をなし、刃を横に寝かせて斜めに引き寄せて使う。クサカキは、深く地面に潜らせると、土の付いた根ごと掻かれ、濡れずにあとで再生してくるので浅く掻くのがコツである。

ジョリソクサカキ (D-14) 名が示すように、土をさらうための道具ではあるが、同時草掻きの働きもした。

土木用のジョリソクと較べると柄が長く、クワバラの土を動かすにも使われた。

タコスリ (A-11) 田の中耕・除草具である。

田の草取りは普通で二回、丁寧な家で三回行なう。最初は、苗を植えてから二週間程たった頃、次が七月半ば、最後に七月下旬より八月にかけて、順にイチバングサ、ニバングサ、サンバングサと呼ばれる。タコスリや次に紹介するジョソクなどの除草具を使うのは、稲の育ちの小さいニバングサまでであった。サンバングサはまたヒロイグサともいわれ、大きく成長したヒエやアグナシなどの雑草を手で引き抜くだけの作業である。

タコスリによる作業は、田の底をこすって草を浮かしネナシ草にして溜す池、土中を掻き回すことで土をコナし、また暖まった水が根にいきとどくので稲の発育を促すことにもなった。

A-11のようにカメノコ形のタコスリは大正時代に出てきたといわれ、それ以前は五角の木製厚板に長い四本の爪を付けた形が使われていた(図-4)という。また、昭和初期頃よりは、ジョソクウキが使われるようになって仕事の能率が上がったといわれる。

ジョソクウキ (D-24 D-25 D-26 D-23 D-22) ジョソウキはハッタンコログサともいわれる。タコスリと同様に、田の除草

タコスリ



図-4

・中耕用の専用具である。

ジョソウキは、昭和に入ってから使われ始めたといわれ、稲株列の間を専用で除草するものと株間の除草も兼ねるものの二種がある。ジョソウキは、短期間に様々な工夫がこらされ、細部の異なる形のもの数が多くあるが、写真の五例は下江黒の農家で所有していたものでその変化のようすがうかがえる。除草具には、先のタコスリの他、ガンスメと呼ばれる短かい柄に三ないし四本の爪を付けた引っ掻き道具があるが、ジョソウキハツタンコログガシのように回転爪を装置したものに、鉄製爪に変化する前に割竹を爪にした回転車もあった。

D-24・D-25は、回転車の前部に滑走板を取り付けてあるが、前者は稲株の列の間を除草するもので、ネジによって角度が調節できる。後者は、除草部の幅が狭く横の株間も除草できる。角度は調節できない。D-22・D-23・D-26は、カブマジョウキと呼ばれる型で、稲株の周囲を縦横に動かして除草できる。このうち、D-26はタコスリを二個組み合わせたような形で、除草部の裏面には鋸歯状の薄いブリキ板を三列平行に並べている。柄は逆さ字型の鉄棒の取り付け部を移動することで角度が調節できる。稲の成長による除草の限界は、この鉄棒の最高位までである。D-23は、滑走板と横回転の回転車だけで構成されており、爪が太い針金を曲げてできている。米沢式カブマ除草機とプレートがあり、これによる除草は稲をいためることが少なかったといわれる。D-22は横回転のそれぞれ二個づつの回転車を装置している。除草には効果的だったが、重量があるので使いにくかつ

たといわれる。

ヒキドイ(D-29) 用水路より高い位置にある田に水を引き入れるための揚水具で、その他には踏車やニナイオケが使われていた。しかし、明和ではヒキドイが一般的だった。踏車のは、矢島ではミズグルマといっており、使用はこの辺でも一部に限られていたという。ミズグルマは、足場を組む作業が大変で、また設置場所も沼の他、流出の少ない所に限られるという。効率等は、ヒキドイより数倍よかつたといわれる。また、ヒキドイを使わない家では、シモゴイを運ぶニナイオケでも水を汲み上げていた。この方は、ヒキドイ作業よりも更に過酷な労働だった。

ヒキドイは、田植え時とその後の田の水の管理で使われていた。本体が大きく、重量もあるので田植え以後は田に置いておき、田の水の張り具合を見て水の少ない田があればかついで移動し揚水作業をした。

構造は、往復ポンプの原理を利用したもので、箱筒をシリンドラとし、木製の開閉弁を先端に取り付けた把手の棒を押し引することで水を吸い上げる。

用水桶に吸込口を沈めたヒキドイは、斜めに田の畔にかけて作業する。水量の少ない時は、水底の泥を掘り下げて吸込口を沈める。ヒキドイは舟大工や樺屋に作ってもらうが、長いものでは八尺程のものもあった。

#### (四) 収穫・脱穀用具

タブネ(C-14 D-33) 土地改良前は、水はけの悪いジョウミズダとかドブリッタといわれる湿田が多くあり、稲刈り時にも水が抜けずいたので刈り取った稲を漕ぶのには専らこの舟が使われていた。須賀では今でも使われている。

ハガマヤノコギリガマで刈った稲は、直接タブネに乗せるのではなく

く、クサカリカゴを逆さに伏せた上に二本の丸竹を横に渡して縛り縛ったタカリダイの上で一時間置いておき、タブネで集め回る。タカリダイには蚕の給桑台にも使われていた。稲は、初め穂の側を舟の中央に向けて縦横に並べ、二段目には横積み、三段目は再び縦横みと交互に積み重ねた。

タブネの大きさは、一人で押すことのできる小型のものから馬に引かせたり人が乗れる程のものまであった。二人で押す場合は、二人並んで舟の後を押したり、一人が後ろを押し、もう一人がタブネの前面に取り付けた鉄のカンに引綱を結んで引っ張って動かした。D-33は前面にカンの取り付けがあるタブネである。

カナコギ(E-22) 千歯扱としては鉄歯の他に竹製の歯をもつものも見られた。梅原ではカナコギをセンボンともいっていた。

麦用と稲用に分かれ、前者は歯の間隔が広く後者はやや狭い。稲用のカナコギの歯の間隔はミゴの通る幅しかないという。麦用のカナコギでも使用は大麦に限られる。小麦はハカマキしているのがカナコギでは実を落とすことができず、サナと呼ばれる麦ぶち台で脱穀した。

F-22は稲扱き用のカナコギである。カナコギの使用は明治末頃まで、大正に入ると足踏脱穀機が導入され、更に発動機による脱穀は昭和になってからという。

フリボウ(A-9) 麦の脱粒・大豆などの豆類の脱穀に使われる。カナコギで脱穀した麦は、まだ穂首の付いた状態のものが多く、実を落とすためにはフリボウによる脱穀粒作業を必要とした。

麦の脱粒作業はムギコナシという。天日で干した脱穀後の麦は直接地面の上に広げ家族中がフリボウでコナした。一通りコナしが終ると足で麦をケエシて更にブツた。矢島では、朝ボタモチを食べて勢いをつけ、この日までにコギタメておいた麦を庭一面に広げて干しながら五、六でブツた。

フリボウには、回転棒が木製のものと同竹を平行に並べて縛ったも

のがあった。これらは、脱穀機が現われるまで盛んに使用されてきた。大輪では、このフリボウのかわりに運送屋の車や大正車で麦の上を引かせてコナした時代があり、また、斗合田では専用の「麦稲調整機」を使った時代もあったという。

大正車(A-41) 写真は、大正車の車輪で、これを使ってムギコナシをすることがあった。

麦をドーナツ状に地面に広げ、その周囲を牛に引かせた大正車を回らせ、車の重しで麦をコナした。大正車の前には、運送屋の車を頼んでコナしたこともある。

調整機(E-32) 「大垣式麦稲調整機」とあり、脱粒専用用具であるが、専らムギコナシ用に使われていた。昭和の初め頃に購入したといわれるが、寿命は短かく二年程で次の発動機による脱穀機にかわられた。

牛・馬に引かせ車輪で麦をコナす。車輪の胸部に帯状の鉄歯が付いている。写真の左側が前部で前輪だけが向きを変えられる。本体もかなりの重量があるが、更に重さを増すために俵や子供を乗せて引いたという。

コクヨセ・コクオシ(C-12 D-15) カナコギで脱穀した麦は、庭一面に広げてフリボウで叩いてムギコナシをするが、コナし終るとコクヨセを使って中心に山にした。山にするのをボツチにするという。寄せられた麦は、次の段階でムギブルイ、トウミにかけられる。

梅原ではコクヨセの名称だが、下江黒ではコクオシと呼ばれていた。C-12・D-15とも自家製で、C-12だと一時間もかければ完成したという。コクヨセは右の作業だけではなく、雪が降れば雪かきにもなった。

## (六) 調整用具

ムギブルイ(E-20 E-13 E-11 G-6) フリボウ等で脱

粒したあとの麦の選別に用いる。

コナした後の麦は、ムギブルーに入れて手でふるって穂切れのポツツアラやシビ・ゴミなどを分ける。フルイの中に残った実のついた穂切れはまとめておいて再びフリボウで脱粒した。選別した麦は次にトウミにかける。

E 20は箱形のフルイで、縄で吊つて下げ、把手をもって前後にゆすつてふるう。網は金網製で、側板に「大極上無類上到大形麦篩」の墨書が残る。E 13は竹製のフルイで、底編みは四つ目編みになっている。麦を入れ両縁を持つてふるう。E 11・G 16は曲物の側板で、金網を底に張っている。両者とも新しく、E 11の方は昭和四〇年に購入したものである。

ミ(E 14) 上・下にゆすつて風をあおり、実に混ったカラやゴミを飛ばす選別用具で、米や麦をトウミにかけたり、俵につめる時にも使う。

斗合田では、これを使って選別することをサヤゲルといつて来た。

E 14は昭和四十五年に購入したもの。

トウミ(A 37 E 24) 風力を利用した穀物の選別用具で、脱粒したあとの米・麦の選別、大豆とゴミとの選別、ドウスでひいた玄米とアラヌカの選別などに使用された。

フリボウで脱粒した麦は、トウミで吹いて実とゴミ・ノガを分けたが、トウミには二回かけ、最初に通すことをノガドウスといった。トウミによる選別が終ると一日位天日で庭に干し俵につめる。

A 37はE 24が普及する前の型で、新しいトウミを入れなかつた家では最近まで使用していた。羽根を回転軸は回転棒によらず横に出た把手を攜んで動かす。E 24には、「愛知県株式会社指浪製作所謹製」とあり、また「サシナミ式 新生号」とスタンプされている。昭和四〇年頃の購入といわれる。把手には、鉄製歯車大小二個が連動されており、羽根の回転数を増すようになっているが、風量は別に調節装置

で変えることができる。材質はラワン。各部の主要多称は、起風胴をワノコ、漏斗部をマス、選別口は正面をイチバンゴクチ、裏側をニバンゴクチ、藪くず、ゴミを飛ばす出口をムコウクチと呼んでいる。マンゴク(A 36) アラヌカと呼ばれるモミガラと玄米を選別するための用具である。

マンゴクを使用する前後の作業を示すと、初をドウスでヒキオロシて出た玄米は、アラヌカと混つた状態にあるので、これをトウミにかけて選別する。更にこれをマンゴクに通して完全にアラと玄米に分けるが、この時のアラは再びドウスでひきトウミにかける。マンゴクで最後の調整が終るとミを使って玄米を俵につめ倉に収める。俵はネズミに食われないようにウワガケして二重のタワラにして保管した。

ホシモノケエシ(D 120 D 121) トウミにかけて選別された麦を、庭にムシロを広げてこの上で天日に干してから俵づめにされるが、ホシモノケエシはこのムシロボシの際に麦を天地返しするのに使われる。この作業は、ムシロ上に広げた麦の表面だけでなく層の下の方も天日に当てるために行う。ホシモノケエシは麦だけでなく、豆類など他の穀物を干す時にも使われる。

D 120が昔から使われてきた古い型で、穀物を返す板に山形の刻みを入れただけの簡単なものである。これで返す場合は、ムシロの端を持って穀物を一端一ヶ所に集めてから前後に押し引して広げる。集める作業を省いて、広げたままの状態で返す工夫が考案された改良型がD 121である。プレートには「穀物乾燥自転機」とあるが、実際はさほど便利なものではなかつたという。

二斗までの玄米を一度に入れて搗くことができる。半日に二斗搗ければ上等の方だったといわれる。

ウスの中心部はヘソと呼ばれ、底を丸く掘り込んでウスと同材質の木をはめこみ、割り楔で動かさないようにしてある。ヘソの径は二十六

センチあった。

玄米を揚ぐ時は、ウスの中に藁縄で作ったナベシキ状の円形のワクを入れておく。ワクは縄をボロ布で巻いて針金で締めたもので、ヘソと同じ径をもち、ヘソ周囲に重ねて置いておく。普通は三本から四本程度を重ねるが、本数は揚ぐ玄米の量ごとに加減する。これは、玄米が周囲に飛び散らせないためのもので、キネはこのワクの中心めがけて振り降す。ヘタにワクを揚ぐと玄米が飛び散るだけでなく、精白にムラができてしまう。

揚ぎ方は、できるだけ力を入れる。振り降したキネは、その状態で力を入れて押しつけながらひねってもむ。この揚ぎ方をウスの周囲を右回りで移動しながら繰り返す。揚ぐ・もむ位置は常にヘソが中心となるので、何度もウスを使うとヘソがすり減ってきて米の返りが悪くなる。そこである程度減ったヘソは新しいものと取り替えなければならぬ。

ニトバリウスによる精白作業は一人で行うのが普通であるが、近所に葬式がある日には二人で向い合って揚ぐ。これをジャンボンツキという。

イス・イススタイ (E-28) ひき臼のことはイススと呼ぶ。イススの上石はウワダイ。下石はシタダイと呼ぶ。米の粉・小麦粉・黄粉等の精粉用のイススは目が細かく、大麦のヒキワリ用は目が荒い。イススはイススタイの中央に置いて作業する。イススの下には、荒縄をとぐる状に巻いたものを敷いておき石が動かないようにしておく。また、ウワダイから穀物がはみ出さないように曲物のワクをはめ込んでおく。

作業は二人で行う場合と一人の場合がある。二人の時は、ウワダイに取り付けられた鈎形の把手に、天井から吊した竹や木の棒をかけたこの棒を二人が左手で持って回す。一人の時はサルツコと呼ばれる回転棒をかけて回した。イススが一回転することに、ウワダイの穴に穀物を

を少量づつ手で入れる。シタダイとの間から出てきた粉は、イススタイの底板にあげられた長方形の口よりイススポウキで下に落されミで受けとめる。

イススポウキ (E-25) イススでひかれた粉をイススタイの下に掃き下すためのホウキで、ミゴでできている。

#### (七) その他の農耕関連用具

二ナイオケ (E-16) 下肥運搬用の桶でテンピンボウで運搬する。容量は一斗五升、二斗入である。

麦の追肥としてタメヒキをする時は、オオダメからこの二ナイオケの中にタメを汲み入れ、畑までテンピンボウを肩にかけて運ぶ。タメヒキは、角ビシヤクの二ナイオケの中のタメをかい出し麦の根元にかけた。

サカサオケ (E-15) これも下肥運搬用である。

底が口の径より大きく、桶を逆さに伏せたような形をしているのでこの名が付いた。容量は五斗入り。写真で、胴の半分以下が黒いのは、コールドルを塗って水のはじきをよくし丈夫にしておくためである。オオダメからコエビシヤクですくったタメは、縁下の穴位置まで入れて五斗になる。運ぶ際には、タメの上に蓋を浮かせ縁からタメが外に飛び出さないようにする。運搬は穴に通した綱をテンピン棒にかけ男二人で運ぶ。町家から下肥をもらう家では、オケの周囲に柿の渋を塗ってきれいに仕上げたものを使っていた。こうした人達は、代金を支払ったり、代償として野菜などを持参した。

コヤシザル (E-14) 堆肥を畑にヒキコム際の容器として使われたが、時には畑の草取りで取った草を畑の外に運び出すのにも利用された。

麦を蒔く際には、ウネに入れる堆肥はネゴイといわれる。ネゴイは、荷車に直に乗せて運んできた堆肥をコヤシザルに取って入れ、これを

手で揃んでウネにヒココんだ。ザルは縄で肩から吊す。堆肥は幾度もキリカエして細かくなっているものを使用した。

E-4は、昭和五十二年十一月に三六〇〇円で買ってきたもの。

サンボンマンノウ(A-3) 熊手駄の種類で、用途は堆肥のキリカエシ・積みなおし、荷車への積み込みなどの他、ゴミなどをさらったりもする。おもえアラモノをいじる時に使用されたという。フォークが出てくることよって次第に使用される機会が少なくなった。

ネエトリカゴ(A-23) ナエマでの苗取り作業の腰掛け用のカゴで、逆さに伏せ底に俵の蓋を乗せて坐る。また、ドブツタでの稲刈りの際の刈り取った稲を乗せる台にも使われた。

オケ・イットマス(E-7 E-18) 米・麦等の穀物の量を計る計量具である。E-17は普通の桶だが、一斗五升入りで、これで俵に計りながら入れた。また、トウミに穀物をかける時は、ミよりこの方が使いやすかったという。E-18は一斗入りのマスとトカキボウで、穀物をマスに入れたあとトカキボウで余分の穀物を落す。

#### (V) 土木関係用具

ジョリン(D-3) 主に土木作業の土砂すくいに使われる道具である。

ヤマオコシや土方作業で使われ、トウグワやハバタと共に土方道具の中心的なものだった。土手を造る時には、トウグワ・ハバタで土をとり、これですくって畔に乗せ、足で踏みつけたあとへラで叩いて固める。

土入水れ部は藤を材料に編んで作っている。柄は角度が調節できる。ハバタ(A-13 C-5 D-4) ハバタと呼ばれる鉄は、田・畑の耕作には用いられず、土木工事・道音請・開墾・田の畔削りなどに利用されてきた。

昔のクロツカワといわれた土方人夫は必ず持っており、工事の際に

土を起しこれを運搬用の大モロツコの中にかき込んだり、道音請で道路の肩をかいたりするのに使われた。また、切り株の根を掘り起すにも使われた。

写真の三例はいずれも風呂駄だが、先のサクキリグワと較べるとその形の違いがよく分る。柄は短かく、また太くできており柄角も六〇度以上で大きい。風呂部は肉厚で大きく、刃の幅も広い。重量があり頑丈にできており、土木作業に適した打引駄の特徴を示している。A-1Bは明治四十三年に購入したもので、その年の決壊堤防の修復工事の際に使用されたものという。

明和村梅原の三島神社には、埼玉県北埼玉郡泉村発戸(現羽生市)の堤防工事の模様を描いた大絵馬(明治三十二年七月奉納 一一〇・五センチ×一五二センチ)が奉納されているが、この作業風景の中にハバタやジョリンを使用している様子が見える。(写真参照)



梅原 三島神社(岡部 央 撮影)



梅原 三島神社(岡部 央 撮影)

トウグワ (D-15) 開墾用である。

ヤマオコシに使用される他、桑カブツを掘り起こしたり、桑苗を植える際の土掘りに使われる。また、筍掘りにも便利だった。刃が厚いので、草木の根をブツキルには都合のよい鉄だった。

刃先はイチヨウツバ、いわゆるバチ型の鉄で、櫃の側がそのまま直線的にのびて刃先まで続いており、丸形の肩を持つ唐鉄類のとは異なる。

トンビ (E-33 E-34) 両者とも開墾用の鉄である。

カヤバの土起しや桑ネツコの掘り取りに使われ、トウグワ・ハバタで組んで行う作業をこのトンビ一本で行えたという。

刃形は異なるが用法は同じである。ただ、E-34の方が刃先が半円形をなしているので草木の根を切断するには適していたという。

## 二、漁撈用具

### (一) 網 漁 具

トアミ (F-18 F-19) 池・沼・川などの広い場所で作られる被せ網のひとつで、かつて村内にあった沼や池でよく使われていた。

今でも利根川や谷田川などの川幅のある川では行われている。使う場所は流水の緩やかなや水深のある所がよい。また、川底に杭などの障害物がなく、足場もトアミをブツの都合のよい場所を選ぶ。

テズナ・リュウズ・アミ・ヤからできており、アミは昔は麻だった。今はナイロン製である。錘のヤには鉛や鉄の鎖を利用している。投げ方は、左手にテズナの端を巻いて握り、アミを左腕に約三分の一程引つ掛け、残りのアミを右手で揃んで体を捻ったその反動で前方に投げ広げる。

使用する時期は、決まっているわけではないが、魚が深い場所にい

る夏場より、水が増えて魚が移動する季節がよかった。

アミは魚の種類、大きさによって使い分けられる。ハヤ・ザッコ類の小魚を獲るアミは、網目の大きさがリュウズでまとも使われる元の部分で鯉尺三分目、裾部分で約二分目の大きさのものが使われる。F-19はこの大きさのアミである。コイ・フナ用の場合は、元部分で一寸二分、裾部分で一寸角のものが用いられる。F-18がそれに当る。

いずれも、元部分ほど目が荒く、開口部の裾にいくほど細くなる。網目の数は、元部分で一週三〇目、以後裾に向って四寸ごとに一五目づつ増やし、全体で一八ふやしでヤの部分が一週三〇〇目となる。

ヨツデアミ (F-17 G-13) 春は四月下旬から五月半ばすぎの魚の上る時期、秋は八月下旬から九月いっぱい魚が下る頃に、主に川で使った。利根川、谷田川の岸近く、新掘川あるいは用水堀りなどでも使っていた。専ら、トヤなどの小魚を対象にしたアミである。

アミはソコアミとソデからなる。ソコアミの三方に背の低いソデをめぐらす。ソデの四隅に取り付けた丸竹四本は、腕曲させて上部で交差し、パイプ様のもに挿し込んで固定する。更にこれにヨツデを持ち上げる竹の竿を紐で結ぶ。一般の人が使うアミの大きさは、三尺四方、四尺、五〜六尺の三種類があった。マチアミとして使うヨツデアミには五間四方のものもあり、商売で魚を獲る人はアミを引き上げるにもロープやリールを使っていた。

使い方は、アミを川底にフセておき、アミの入口から一〇メートルほど離れた場所から、竹や木の棒で水面を叩いたり、カネなどの金属音をたてながら魚を追う。魚を追い込んだところで竿を一気に持ち上げる。ソデのアミは魚が当たってもよいように余裕を残して張っておく。

追う際には、川底の泥を掻き回して水を濁させないようにしなければならぬ。

右のように単独で使う他、二個を一度にフセて使う時もある。矢島

では、谷田川の南岸から二個のヨツデを川幅いっぱいにして魚を

獲った。また、魚の移動する時期だけでなく、むしろ魚の動くことの少ない冬場での使用法もあった。冬になると川に水が張るが、これを二間四方の広さを残して周囲の水をかき、残した水の周りを歩いて魚を水の下に集めてからヨツデをフセる。このあと、水を静かに手で退かし、アミの入口に向って魚を追い込む。

魚は水量や水の流れによって移動し、特に雨の日などはヨツデのアタリも大きかったといわれる。また、アミをフセる場所は、商売の人は決っていたが、一般の人の場合は早い者勝ちでよい場所を選んでいた。

ドジョウアミ(F-1) ドジョウ獲り専用のアミである。ドジョウアミの使用期間は、八月上旬から一〇月いっぱいであり、特に九月以降のドジョウは田から川へおちたのを獲る。使用場所は川・用水・池などどこでもよい。

アミは二間の鉄棒を細長い輪の形に曲げてこれに袋状の網を取り付けたもので、アミの口を斜めに川上に向け、丸竹の柄を別の竹で支えてフセる。ヨツデアミと同様に追い込んで捕獲するもので、川上からカネを先端に付けた棒で水中を掻き回しながら音をたてたり、ザガネを打ち鳴しながら追う。川底の泥を掻き回す点やヨツデアミの方法と異なるが、追い込みの速さに加減があり、速すぎるとハヤが中に入ってしまう。「ハヤが獲れるようだとドジョウ獲り」などといわれた。アミのキワまで追ったところで棒を持ってすくい上げる。

池が多くあつた頃は、アサメシ前で二貫位は獲れたという。フクロアミ(F-6) ウナギを専門に獲るための細長い袋形のアミで、仕掛ける時期や場所が限定されていた。

時期は、ウナギの下る秋で、それも大雨や嵐のあつた晩に限られ、月が出る晩などは獲れなかった。場所は堰堀で使われる。大雨の晩には、堰の堰板をはずした柱にアミを取り付け、堀いっばいに口をおくと一晩で十貫位は獲れたという。

アミは口幅二間程、長さ約七間半あり、先に行くほど先細りとなつて、最後の魚の取り出し口は目のつまった麻袋を取り付けている。麻袋には魚取り出しの穴があいており、フクロアミと仕掛けている間は紐で締めておくが、使用しない時はアミの収納袋にもなる。魚の取り出し口から入口の方へ二メートルほど寄つた所には網製のコシタが付いており、中に入ったウナギが逃げ出せないようになっている。網目は開口部の入口ほど荒く、先に近くなるほど細かくなる。

須賀では一般の魚を獲るにも使われていた。口は二メートル、長さ五メートルで、両脇にすだれに魚を集めるように張って置くもので、七月頃、下ってくる魚を獲つたという。同様の使い方は入ヶ谷でも聞かれた。入ヶ谷ではこれをクダリアミといい、魚とり専門の人が行なう大がかりな漁法で谷田川でやつていたという。時期は九月頃、下りの魚を獲るためのもので、竹で編んだスノコを川の岸から岸まで川幅いっばいに張り渡し、川をせきとめるような形にした上で袋状のアミをしかける。スノコを張ることをスバリをさるといふ。

フシアミ(B-3 G-2) 利根川沿いの須賀ではサデ、谷田川沿いの入ヶ谷ではフシアミと呼んでいた。主に、冬の水の引けた川で使用したが、用水堀では夏でも使っていた。

フシアミは、割竹を曲げてその両端を丸竹に挿し込んだ半階円形の口で、袋状の網を結んだもので、網は綿糸でできている。網は漁具を売る店で購入したり、冬場に自分で編む人もいた。そのまま白い綿糸では弱いので、カキシブの汁の中に入れて補強した。

漁獲の方法は、川ではモク(水草)のよく繁つた場所を選び、丸竹の柄を持って斜めに水中にアミを入れ、片足を伸ばしてモクの中に隠れた魚を掻き込むようにして追う。堰堀などで使う場合は、堀の幅の狭い所にアミを堀いっばいに張っておき、遠くの方から魚を追つてきた。

フシアミで獲れる魚は、フナ・ナマズ・ドジョウなどであった。

ハズアミ(A-138) ハズアミは主に谷田川で使用されていたようである。舟上から魚めがけて被せるもので、戦前までは使われていたという。(入ヶ島)

## (二) 釜 漁 具

ウケ(B-1 B-2 F-4) 最も一般的に使われていた漁具の種類で、魚種や使用場所により形・構造・大きさなどが異なっている。

ドジョウ用のウケは、釜口の径が小さく、胴も細長くできている。胴の贅子の目は狭く二重コシタが特徴である。B-1・F-4は普通の形のウケだが、コシタが二重で贅子の目が狭いのでドジョウも捕獲できた。

コイ・フナ用のウケは、ドジョウウケに較べると贅子の目は荒く、これを結ぶシュロ縄も太いものを使用し、一重コシタである。B-2がこれに相当する。

ウナギ専用のウケは、ドカゴと呼ばれドジョウウケと同様に二重コシタで逃げにくい構造になっている。

ナマズ用のウケは、胴の竹質を釜口に内側に編み込んでカエシとしている。カエシの口も普通のウケのように弾力性をもたせた竹の表皮の部分で構成せず、外側の贅と同じ厚さの肉付の竹で作った丈夫なものである。

材質は竹がほとんどであるが、餌用の小魚を獲るにはガラスウケが使われる。また、最近では金網で編んだウケも使われている。

形は釜胴が中心であるが、角形のソウキと呼ばれるウケもあった。B-1のようなドジョウウケは、川・用水・田の中などで使われる。八十八夜のナエマ水が来る頃上ってくるドジョウは、谷田川の用水の落ちる場所やナエマ水を用事に落とす場所にフセる。水の落ちる場所に篠竹の贅子をめぐらせて水をせき止めるような形にし、その内側に

二本ほどのウケをフセておく。水量が少ない時は、コシタが水に沈む程度に底の泥を掘り下げる。夕方から朝五時頃まで約一晩置いておく。二キ口位は獲れたという。

用水堀にフセる時は、釜口を川上に向け、ウケの周囲に草などをつめて使用した。

秋の田クダリ時は、田の水を土管で用水に落すのでウケを土管の口に向けてフセたり、田の中に置いたりした。

田での使用は九月末頃までだが、川なら十月半ばまで使用できた。ドジョウウケにはドジョウだけでなく小魚も入る。

一重コシタの普通のウケは、春秋の上り下りに使われ、主にフナ・ザッコ・ハヤなどが獲れたという。

ゴウキ(A-21) 大輪では、別に四角ウケともいう。また、梅原ではセイイという魚を獲るためのウケで、セイウケとも呼んでいた。

谷田川や利根川で使用したが、中心は沼や池であり、川で使う場合も川が引き込んでいて葦や真菰の草が生えた水の澁むような場所が選ばれた。

漁期は、八月上旬から十月半ば位までで、主な対象魚はコイ・フナだった。目が荒いので小魚のハヤなどは入らなかった。

幅のある割竹で組まれており、コシタは一重で底に杉皮を敷いてある。ドジョウウケなどと違い、フセる時には中に麦や大豆の煮たものを一掴み餌として入れておく。夕方フセ、朝あげるが、よく魚が入っていたという。釜胴のように一般的なウケではないが、使う人もあり、

また、専門の人は谷田川で五〇個位を一度にフセていたという。

## (三) 釣 漁 具

オキバリの竿(B-4) ナマズ・ウナギを獲る時の竿で、長さは六尺程度、三尺の長さの糸を付けオキバリ用のハリを取り付けて一晩川中に放置しておく。餌にはガラスウケで獲った小魚を付けておく。

竿は川底に突き立てておくが、川の端ならモクがよく繫つた所がよく、川のシケた時などは舟で川中まで行って立てた。一晚放置して朝早く引き上げるが、魚がかかっていたら水面から出た竿が動いているので分る。餌はタナゴが一番よい。一本の竿には一本の糸を付けるが、オキバリを仕掛ける時は一度に三〇本位を立てておく。一晚で一〇本に一本はウナギかナマズがかかっていた。

糸は竿の中途に結んでおくが、使わない時は針を竿の先端に引っ掛けて保管しておいた。

#### (四) 突 漁 具

ヤス(G-1) コイ・ナマズ・ライギョなど、大型の魚を突いて獲るための道具で、夏場に沼や池・堀・流れの緩やかな川などで使われる。大雨の降ったあとには、田の中の魚も空くことがあった。

使用法は、魚が浅瀬に出てきたり、水面に近い所を泳いでいる時に、柄を持って魚めがけて突きさす。須賀では、柄に三〜四メートルの縄を付けて投げつけることもあったという。矢島では、谷田川に舟を出し、舟上から魚を突いたという。

#### (五) 魚 収 納 容 具

フゴ(A-20) 大型魚を入れるための容器で、特にウナギやナマズなどの逃げやすい魚にはこのフゴが用いられた。竹を材料に箆編みで作られており、蓋は落し蓋でフゴの内径に合わせた大きさになっている。水の中に沈めておき、獲った魚を入れる。

コシボテ(F-2 F-3) 主にヨツテ漁をする時に持参する容器で、麻の紐を結んで腰に取り付け、獲った魚を入れる。

F-2、F-3とも使い方は同じだが、前者は底が籠編みの四つ目になっていたのでザッコのような小魚を入れるには向いてない。後者は底が胴編みと同じく箆編みになっている。

アミボテ(F-5) 網製のボテで五貫目までの魚が入る。トアミをブチに行く時などに持参する。網目の大きさの関係から、ハヤ位までの小魚を入れるには不都合で、専らコイやフナなどを入れるのに使った。

写真左手のモクシを川底に挿して流されないようにしておく。

### 三、養 蚕 用 具

#### (一) 採 桑 用 具

クワツメ(A-30) 秋蚕・晩秋蚕の桑は枝切りをせず、ハキタテから上葉までこれで桑を一枚づつツンで採った。

クワツメは、左右の人差指にはめ、両手で桑をツンでクワトリカゴの中に入れた。クワツメによるクワツミも、三眠期から以後は蚕の食欲も旺盛になるので大変な作業だった。

クワトリザル(A-17) クワバラでのクワツミ作業の際に使うザルで、春蚕の時はひつかいて採った桑を、秋蚕・晩秋蚕の時はクワツメで採った桑を入れる。作業をする時は、縁を紐で結んで肩にかけ腰にぶら下げる。クワトリザルにすっぽいになると、そのまま家に持ち帰ったり、大型のザマザル・ハダカザルに移しかえて運んでくる。三眠以後は、給桑量が増えてくるのでクワトリカゴを使わずにザマザルなどを引きずって直に採った桑を入れる。

小型の採桑用器としては他にメケエなども使うことがあった。

ザマザル・オオザマ(A-18 E-21) いわゆるザマと呼ばれる桑運搬用のザルである。斗合田では大ザマとも呼ばれていた。

クワトリカゴあるいはメケエなどで採った桑はこの中に移しかえて家まで運ぶ。A-18は自転車のチェーンを取り付けてあるが、縄を結んで背負ったり、荷車の上に乗せて運搬することもあった。

秋蚕・晩秋蚕の時は上簇まで使用した。蚕の食桑量が増すと、先のクワトリザルを使わず直にこの中に桑を挿んで入れた。

ハダカザル(A-19 E-1) ザマザルと同様に、桑の運搬用具である。斗合田ではこれをザマと呼んでいた。

ザマザルのように箆編みと籠編みを組み合わせたものでなく、箆編みだけで構成してある。大輪では、ザマザルで集めた桑を、更にこのハダカザルに移しかえて牛車で運んだという。この時は、桑が萎びないようにザルの上にヒヤクショウムシロを被せて運んだ。

## (二) 調桑用具

クワコキ(D-36 D-37) 桑桑育に変化する前は、枝から落した葉で給桑していた。クワコキは、この時に使用する道具で、種類が豊富だった。

壮蚕期の蚕は桑を食べる量が多くなるので、桑摘みをしないで桑の枝を元から切ってきて家でクワコキを使って右手で枝を引っ張ると葉

D-36は、左手にはめこれを桑枝に被せて右手で枝を引っ張ると葉が落ちる。内部にバネが装置されているので、コキ終ると開いて次の作業に移りやすくなっている。D-37は足で台座を踏んで動かないようにしておき、桑枝を挟んで両手で手前に引いてコキ落した。前者は坐作業でできるが、後者は立姿勢の状態で作業する。

クワボウチョウ(D-35) かつては給桑用の桑は、これできざみクワブレイの中に入れてふるって与えていた。桑は、蚕の成長に合わせて切る大きさを変える必要があり、各令期ごとのブレイの目を通して大きさに角形に切った。

柄に近い刃部部の切り込みに手をかけ、重ねた桑を刃先から手前に重心を移すように押し切った。今は蚕をやらないので、カンピョウ切りに使っている。

## (三) 蚕座用具

シチブカゴ(A-33) 地域・蚕期により飼育用の蚕箔は大きさが異なるが、A-33は細七型の蚕カゴである。タテジと呼ばれる支柱にコノメ竹を渡して縄で締つた蚕棚にさして使われた。コノメには一〇枚の蚕カゴをさせるが、この大きさが手ごろで使いやすく、給桑も一人でできるので便利だった。

幅は二尺五寸、奥行四尺五寸程で、特に大輪では掃立てから上簇前までこのカゴを使用し、上簇には別の種類のカゴを使ったという。

コモムシロ(A-32) 葉製ムシロで、蚕カゴの上に敷いてこの上で蚕を飼う。

大輪ではコモムシロだったが、矢島ではゴザの名で呼んでいた。ミナザワという名称は聞かれなかった。

大きさは、シチブカゴ用に使われている。

## (四) 給桑用具

クワブレイ(G-4 G-5) 蚕のクワクレ用のブレイで、ある程度蚕が成長してくるとクワブレイに替ってクワクレザルで手で行われる。掃立てから三令位までの間で使われ、各令期ごとに使用するブレイの目の大きさが異なっていた。クワボウチョウで切られた桑はブレイの目を通して蚕の上に落ちるが、ブレイに残った桑は再度細かく切ってくれていた。

G-4は二令期、G-5は壮蚕期に近い時期に使われたものである。

クワクレザル(A-16) 給桑用のザルで、荒く切られた桑や全葉の桑をこの中に入れ、蚕の上に手で桑を挿んでくれた。蚕が小さい時はクワブレイで給桑したが、その後は専らこのザルを使う。

クワトリザルに似ているが、底がやや浅く径も小さい。

オクワ(A-31) 給桑台で、矢島ではハネグイと呼んでいた。

棚飼いの時代は、コノメから引き出した蚕カゴをこの上に乗せてクワクレ作業を行った。足の開く角度を調節することによって蚕カゴの高さが決められ、クワクレ作業のしやすき位置にした。A-31に乗せた蚕カゴは腰のあたりの高さになる。

#### (五) 上 簇 用 具

キバチ(D-34) 熟蚕のことはヒキと呼んでいた。キバチは上簇の際のヒキを拾い上げるための木製容器である。

マブシオリ(A-35) マブシを製造する機械で、これで織られたマブシをワラマブシといっていた。以前のシマダマブシは一回使用の使い捨てだったが、ワラマブシは何回かの使用に耐え保存がきいた。この後、ダンボール製の回転マブシが出てくる。

材料にはイネワラを使う。マブシ作りは主に冬場の仕事のひとつだった。

ゲンロクカゴ(A-34) 大輪では、飼育にシチブカゴを使い、上簇の時はゲンロクカゴを使ったという。八畳間に向い合わせて三〇枚づつ、計六〇枚使えた。

ワラマブシで上簇していた頃のもので、回転マブシが現われてからは使うことがなかったという。

#### (六) 除沙用具・その他

アミ(A-40) 蚕の糞のコクソや食い残しの桑・ゴミなどを取り除くための道具で、糸は綿製、各令期ごとに網目の大きさが異なる。使い方は、アミを蚕の上に乗せ、給桑して蚕が網目をくぐって上に出たところで別の蚕カゴに移しかえる。移し終ると元のカゴに残されたコクソ類を片付ける。

アミと使用するのは三眠位までで、その後はワラ縄で編んだモッコ

を使った。

ヨウサンヒバチ(A-29) 蚕室の温度を一定に保つために使われた燂房器で、炭火で燂めた。

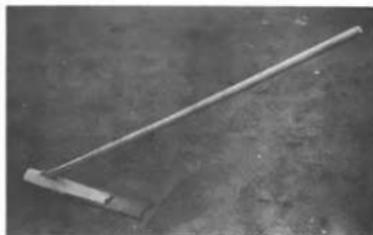
かつては、どこの家でも一年中アガリハナに置いておき、蚕を飼わない時期でもクワボウやネッコなどを燃木にして暖まっていた。

#### 注記

有形民俗文化財調査による本項掲載の写真撮影はすべて島村真也による。



整理番号 A-2  
 名称 サクキリグワ  
 場所 大輪  
 法量 柄長136.5cm 刃床部長 不測  
 刃先幅12.8cm 肩部幅11.5cm  
 柄角43°



整理番号 C-11  
 名称 サクキリグワ  
 場所 梅原  
 法量 柄長144cm 刃床部長 57cm  
 刃先幅12.5cm 肩部幅10.5cm  
 柄角47°



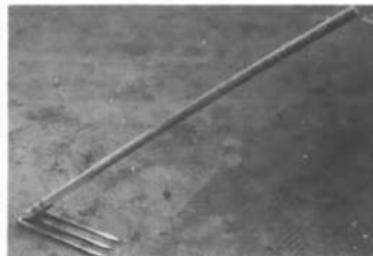
整理番号 D-11  
 名称 サクキリグワ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長137.5cm 刃床部長59cm  
 刃先幅12cm 肩部幅12.5cm  
 柄角40°



整理番号 C-10  
 名称 サクキリグワ  
 場所 梅原  
 法量 柄長137cm 刃床部長53cm  
 刃先幅12cm 肩部幅12cm  
 柄角47°



整理番号 D-12  
 名称 サクキリグワ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長136.5cm 刃床部長54cm  
 刃先幅12cm 肩部幅13cm  
 柄角39°



整理番号 C-9  
 名称 クワ  
 場所 梅原  
 法量 柄長136cm 刃床部長37cm  
 刃先幅13.5cm 肩部幅12cm  
 柄角45°



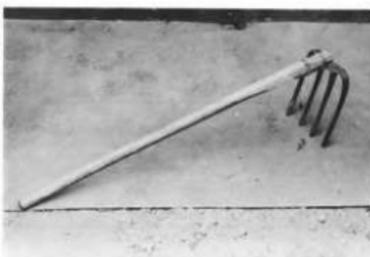
整理番号 A-5  
 名称 ビッチュウグワ(クワバラマンノウ)  
 場所 大輪  
 法量 柄長122cm 刃床部長30cm  
 刃先幅16.7cm 柄角50°



整理番号 D-9  
 名称 ビッチュウグワ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長114cm 刃床部長33cm  
 刃先幅16cm 肩部幅18.5cm  
 柄角63°



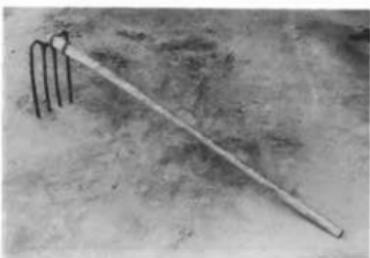
D-10  
 名称 ビッチュウグワ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長120cm 刃床部長31cm  
 刃先幅18.5cm 肩部幅18.5cm  
 柄角54°



整理番号 A-4  
 名称 シホンマンノウ  
 場所 大輪  
 法量 柄長100cm 刃床部長25cm  
 刃先幅20cm 柄角68°



整理番号 D-6  
 名称 マンノウ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長115.5cm 刃床部長19cm  
 刃先幅18cm 肩部幅18cm  
 柄角78°



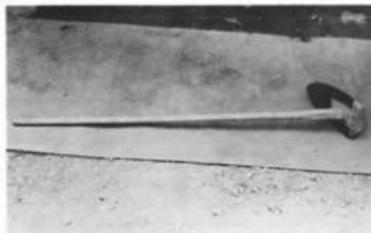
整理番号 D-7  
 名称 カイリュウマンノウ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長125.5cm 刃床部長31.5cm  
 刃先幅18.5cm 肩部幅18.5cm  
 柄角75°



整理番号 D-8  
 名称 マノウ  
 場所 下江黒  
 法 量 刃床部長21.5cm 刃先幅25.5cm  
 肩部幅19.5cm



整理番号 D-2  
 名称 コグワ  
 場所 下江黒  
 法 量 柄長116.5cm 刃床部長28.5cm  
 刃先幅13.5cm 肩部幅11cm  
 柄角64°



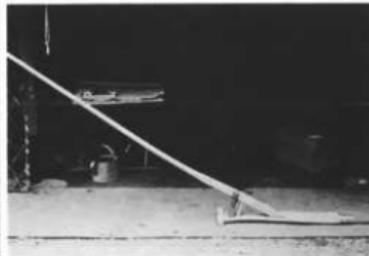
整理番号 A-12  
 名称 ヒッタテグワ  
 場所 大輪  
 法 量 柄長133cm 刃床部長33cm  
 肩部幅18.5cm 肩部厚5cm  
 柄角67°



整理番号 D-1  
 名称 ヒッタテ  
 場所 下江黒  
 法 量 柄長175cm 刃床部長36cm  
 刃床部幅20.5cm 肩幅16.5cm



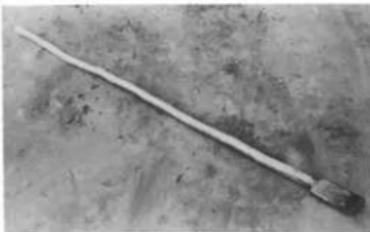
整理番号 E-35  
 名称 ウネタテ  
 場所 斗合田  
 法 量 柄長183cm 刃床部長18cm  
 刃床部幅17cm



整理番号 A-1  
 名称 モグリ  
 場所 大輪  
 法 量 柄長221cm 刃床部長  
 刃先幅15cm 肩部幅25cm  
 柄角150°



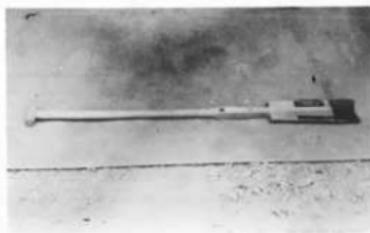
整理番号 D-31  
 名称 モグリ  
 場所 下江黒  
 法量 不測



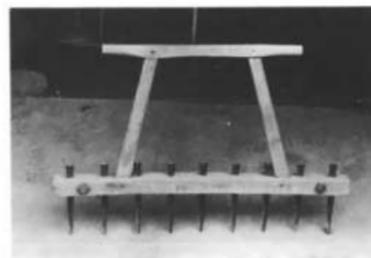
整理番号 D-13  
 名称 ツッキリ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長141cm 刃床部長15cm  
 刃先幅9cm 肩部幅8.5cm  
 柄角180°



整理番号 A-39  
 名称 スキ  
 場所 大輪  
 法量 全長



整理番号 A-7  
 名称 ヘラ  
 場所 大輪  
 法量 柄長77.5cm 刃床部長32cm  
 刃先幅14cm 柄角180°



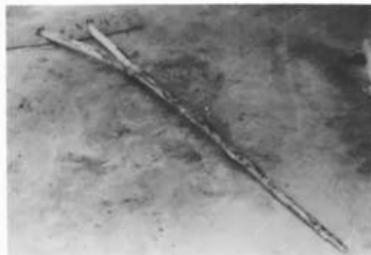
整理番号 A-10  
 名称 マンガ  
 場所 大輪  
 法量 全幅94cm 全高62cm  
 前後幅32cm 把手幅62cm  
 歯長23cm



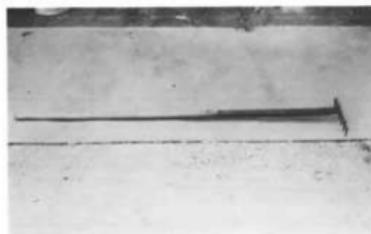
整理番号 C-13  
 名称 マンガ  
 場所 梅原  
 法量 全幅105cm 全高64cm  
 前後幅 不測 把手幅61cm  
 歯長13cm



整理番号 C-15  
名称 カチマンガ  
場所 梅原  
法量 全幅162cm 全高67cm  
前後幅 不測 把手幅67cm  
歯長 不測



整理番号 D-27  
名称 ジナラシ  
場所 下江黒  
法量 柄長204cm ならし板幅82cm  
ならし板高13cm



整理番号 A-8  
名称 ムツゴ (ツブテッコワシ)  
場所 大輪  
法量 柄長141cm 砕土部幅23cm  
歯長6cm 柄角90°



整理番号 D-30  
名称 ムツゴ  
場所 下江黒  
法量



整理番号 A-6  
名称 ツブテッコワシ  
場所 大輪  
法量 柄長150cm 砕土部長28cm  
砕土部幅15cm 歯長3.4cm  
柄角143°



整理番号 D-32  
名称 ツブテッコワシ  
場所 下江黒  
法量 不測



整理番号 D-16  
 名称 タネマキキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長88cm 全幅17cm



整理番号 D-28  
 名称 タネマキキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長186cm 全幅61cm



整理番号 A-14  
 名称 ツチイレ  
 場所 大輪  
 法量 柄長146cm 土入部長34.5cm  
 土入部幅18.5cm 柄角36°



整理番号 C-6  
 名称 ツチイレ  
 場所 梅原  
 法量 柄長112.5cm 土入部長30.5cm  
 土入部幅20.5cm 柄角37°



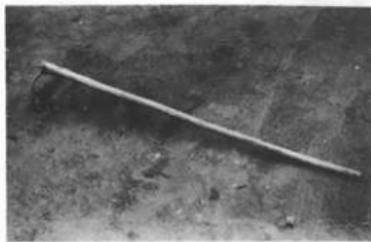
整理番号 C-7  
 名称 ツチイレ  
 場所 梅原  
 法量 柄長121.5cm 土入部長34cm  
 土入部幅19cm 柄角40°



整理番号 C-8  
 名称 ツチイレ  
 場所 梅原  
 法量 柄長115.5cm 土入部長30.5cm  
 土入部幅19.5cm 柄角38°



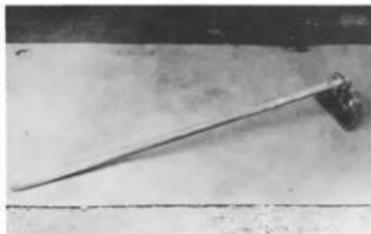
整理番号 C-1  
名称 クサカキ  
場所 梅原  
法量 柄長130cm 刃床部長8.5cm  
刃床幅23.5cm



整理番号 C-4  
名称 クサカキ  
場所 梅原  
法量 柄長126.5cm 刃床部長12.5cm  
刃先幅24cm



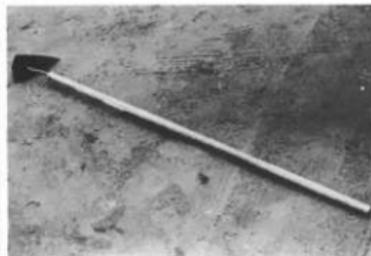
整理番号 D-18  
名称 クサカキ  
場所 下江黒  
法量



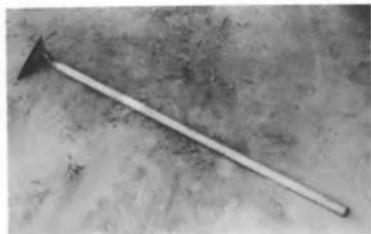
整理番号 A-15  
名称 クサカキ  
場所 大輪  
法量 柄長125cm 刃床部長15cm  
刃先幅24.5cm 柄角63°



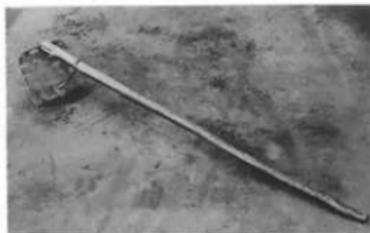
整理番号 C-2  
名称 クサカキ  
場所 梅原  
法量 柄長134cm 刃床部長11.5cm  
刃先幅20cm



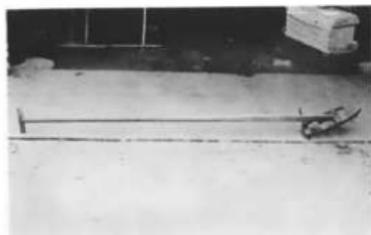
整理番号 C-3  
名称 クサカキ  
場所 梅原  
法量 柄長116.5cm 刃床部長11.5cm  
刃先幅23.5cm



整理番号 D-17  
 名称 クサカキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長122cm 刃床部長20cm  
 肩部幅11cm



整理番号 D-14  
 名称 ジョリンクサカキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長131cm 土入部長24cm  
 土入部幅22.5cm 柄角47°



整理番号 A-11  
 名称 タコスリ  
 場所 大輪  
 法量 柄長178.5cm 除草部長34.5cm  
 除草部幅17.5cm 柄角25°



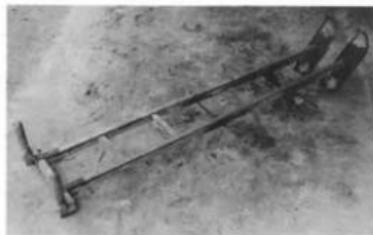
整理番号 D-24  
 名称 ジョソウキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長100.5cm 除草部長58cm  
 除草部幅16.5cm



整理番号 D-25  
 名称 ジョソウキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長109cm 除草部長55cm  
 除草部幅14cm



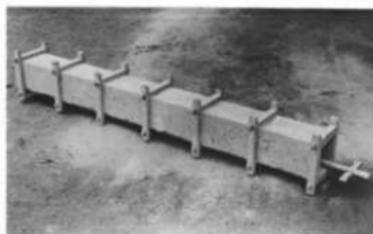
整理番号 D-26  
 名称 ジョソウキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長150cm 除草部長42cm  
 除草部幅40cm



整理番号 D-23  
 名称 カブマジョソウキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長127cm 除草部長47cm  
 除草部幅27cm



整理番号 D-22  
 名称 カブマジョソウキ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長122cm 除草部長52cm  
 除草部幅31cm



整理番号 D-29  
 名称 ヒキドイ  
 場所 下江黒  
 法量 全長186.5cm 幅27cm  
 高29cm



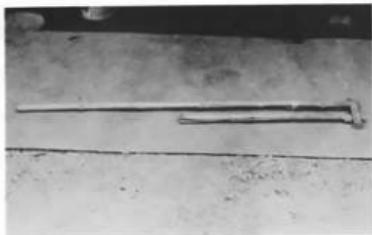
整理番号 C-14  
 名称 タブネ  
 場所 梅原  
 法量 全長110cm 舟中央幅73cm  
 舟端部幅61.5cm 舟中央部高15.5cm  
 舟端部高20.5cm



整理番号 D-33  
 名称 タブネ  
 場所 下江黒  
 法量 全長112.5cm 舟中央幅72.5cm  
 舟端部幅64cm 舟中央部高18.5cm  
 舟端部高20cm



整理番号 E-22  
 名称 カナゴキ  
 場所 斗合田  
 法量 全幅60.5cm 刃部幅31.5cm  
 刃部高31.5cm



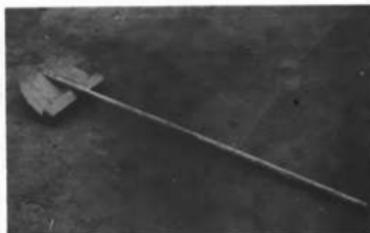
整理番号 A-9  
 名称 フリボウ  
 場所 大輪  
 法量 柄長152.5cm 幅19.5cm  
 回転棒長76cm



整理番号 A-41  
 名称 大正車の車輪  
 場所 大輪  
 法量 不測



整理番号 E-32  
 名称 調整機  
 場所 斗合田  
 法量 全長89cm 前幅105.5cm  
 後幅90cm 前輪径21cm  
 後輪径23cm



整理番号 C-12  
 名称 コクヨセ  
 場所 梅原  
 法量 柄長141.5cm 寄せ部長26cm  
 寄せ部幅36.5cm



整理番号 D-15  
 名称 コクオシ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長165.5cm 板幅52.5cm  
 板長24.5cm



整理番号 E-20  
 名称 ムギブルイ  
 場所 斗合田  
 法量 全長115.5cm 全幅44cm  
 高12cm



整理番号 E-13  
 名称 ムギフルイ  
 場所 斗合田  
 法量 縁外径59cm 深12cm



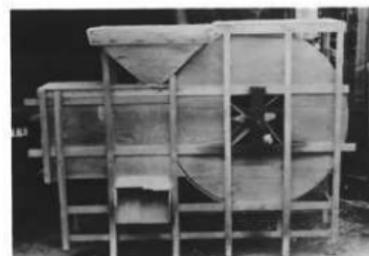
整理番号 E-11  
 名称 ムギフルイ  
 場所 斗合田  
 法量 口径44cm 深9.5cm



整理番号 G-6  
 名称 ムギフルイ  
 場所 須賀  
 法量 直径45.5cm 高さ10.5cm  
 目大きさ1cm前後



整理番号 E-14  
 名称 ミ  
 場所 斗合田  
 法量 口幅70cm 奥行55.5cm  
 高21cm



整理番号 A-37  
 名称 トウミ  
 場所 大輪  
 法量 全長170cm 全幅56.5cm  
 高123cm



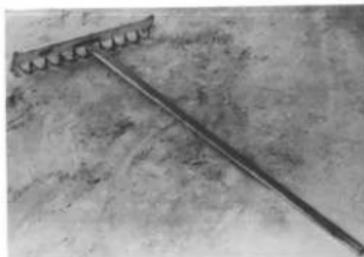
整理番号 E-24  
 名称 トウミ  
 場所 斗合田  
 法量 全長98cm 全幅55cm  
 高113cm



整理番号 A-36  
 名称 マングク  
 場所 大輪  
 法量 全長122cm 全幅53cm  
 高121cm



整理番号 D-20  
 名称 ホシモノケエシ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長147.5cm 返し部幅66cm  
 返し部高11.5cm



整理番号 D-21  
 名称 ホシモノケエシ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長206.5cm 返し部幅64cm  
 返し部高10.5cm



整理番号 E-31  
 名称 ニトバリウス・キネ  
 場所 斗合田  
 法量 ニトバリウス 高47cm  
 外径68cm 深29cm  
 内径50cm  
 キネ 柄長81.5cm 杵部長45cm  
 径13.5cm



整理番号 E-28  
 名称 イス・イスグイ  
 場所 斗合田  
 法量 イスグイ 奥行83cm  
 全幅86cm  
 全高65.5cm



整理番号 E-25  
 名称 イスボウキ  
 場所 斗合田  
 法量 全長32cm 全幅17cm



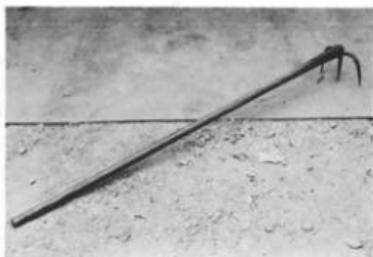
整理番号 E-16  
 名称 ニナイオケ  
 場所 斗合田  
 法量 口径35cm 全高90cm  
 オケ部深40cm



整理番号 E-15  
 名称 サカサオケ  
 場所 斗合田  
 法量 口径50cm 底径60cm  
 深60cm



整理番号 E-4  
 名称 コヤシザル  
 場所 斗合田  
 法量 縁外径39.5cm 深42cm



整理番号 A-3  
 名称 サンボンマンノウ  
 場所 大輪  
 法量 柄長141cm 刃床部長12.5cm  
 刃先幅20cm 柄角 直角に近い



整理番号 A-23  
 名称 ネットリカゴ  
 場所 大輪  
 法量 縁外径29.5cm 高25.5cm



整理番号 E-17  
 名称 オケ  
 場所 斗合田  
 法量 口径36.5cm 深38cm



整理番号 E-18  
 名称 イットマス・トカキボウ  
 場所 斗合田  
 法量 口径32cm 深31.5cm  
 トカキボウ長38.5cm トカキボウ  
 径5.8cm



整理番号 D-3  
 名称 ジョリン  
 場所 下江黒  
 法量 柄長67.5cm 土入部長26.5cm  
 土入部幅26cm 柄角42°



整理番号 A-13  
 名称 ハバタ  
 場所 大輪  
 法量 柄長92cm 刃床部長42cm  
 刃先幅19cm 肩部幅21cm  
 柄角62°



整理番号 C-5  
 名称 ハバタ  
 場所 梅原  
 法量 柄長89.5cm 刃床部長36.5cm  
 刃先幅18cm 肩部幅19cm  
 柄角60°



整理番号 D-4  
 名称 ハバタ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長87cm 刃床部長42.5cm  
 刃先幅18.5cm 肩部幅18cm  
 柄角60°



整理番号 D-5  
 名称 トウグワ  
 場所 下江黒  
 法量 柄長84cm 刃床部長27.5cm  
 刃先幅10.5cm 柄角72°



整理番号 E-33  
 名称 トンビ  
 場所 斗合田  
 法量 柄長92.5cm 刃床部長26cm  
 刃床部幅24cm 柄角 不測



整理番号 E-34  
 名称 トンビ  
 場所 斗合田  
 法量 柄長102.8cm 刃床部長21cm  
 刃床部幅24cm 柄角 不測



整理番号 F-8  
 名称 トアミ  
 場所 矢島  
 法量 手網長約450cm 網長約350cm  
 開口部周囲糸1420cm  
 目大きさ元部約3.6mm  
 目大きさヤ部約3cm



整理番号 F-9  
 名称 トアミ  
 場所 矢島  
 法量 手網長約450cm 網長約354cm  
 開口部周囲約1420cm 目大きさ元  
 部約0.9cm  
 目大きさヤ部約0.6cm



整理番号 F-7  
 名称 ヨツデアミ  
 場所 矢島  
 法量 口幅181cm 奥行180cm  
 高110cm ソデアミ高25.5cm



整理番号 G-3  
 名称 ヨツデ  
 場所 須賀  
 法量 口幅120cm 奥行120cm  
 高87cm



整理番号 F-1  
 名称 トジョウアミ  
 場所 矢島  
 法量 □部長径103.5cm □部短径31.5cm  
 アミ長111.5cm 柄長222.5cm  
 支棒長15cm



整理番号 F-6  
 名称 フクロアミ  
 場所 矢島  
 法量 □部幅約350cm アミ部長約2160cm



整理番号 B-3  
 名称 フシアミ  
 場所 入ヶ谷  
 法量 把手長60cm □幅64cm



整理番号 G-2  
 名称 サゲ  
 場所 須賀  
 法量 把手長77.5cm □幅66cm  
 アミ部深66cm



整理番号 A-38  
 名称 ハズアミ  
 場所 大輪  
 法量 不測



整理番号 B-1  
 名称 トジョウウケ  
 場所入 ケ谷  
 法量 釜口径25cm 全長106cm



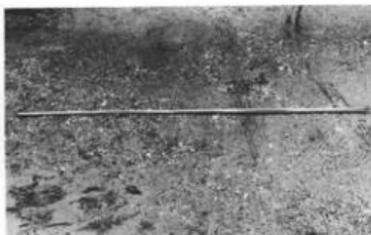
整理番号 B-2  
 名称 ウケ  
 場所 入ヶ谷  
 法量 全長69cm 釜口径15cm



整理番号 F-4  
 名称 ウケ  
 場所 矢島  
 法量 釜口径24.5cm 長103.5cm



整理番号 A-21  
 名称 ゴウキ  
 場所 大輪  
 法量 全長42.5cm 釜口幅35cm  
 釜口高21cm



整理番号 B-4  
 名称 オキバリの竹竿  
 場所 入ヶ谷  
 法量 全長177cm 径2cm



整理番号 G-1  
 名称 ヤス  
 場所 須賀  
 法量 ヤス部長17cm ヤス部幅9.5cm



整理番号 A-20  
 名称 フゴ  
 場所 大輪  
 法量 縁外径33cm 深40cm  
 底径55cm 落し蓋縁外径28cm  
 深13.5cm



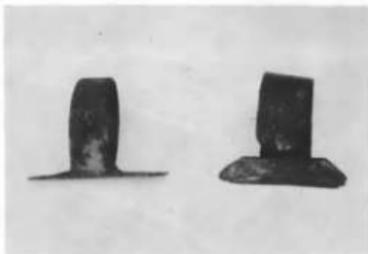
整理番号 F-2  
 名称 コシボテ  
 場所 矢島  
 法量 口部径18.5cm 深24cm  
 底径24cm 底短径15.5cm



整理番号 F-3  
 名称 コシボテ  
 場所 矢島  
 法量 口部長径20cm 口部短径19cm  
 深29cm 底長径24.5cm  
 底短径14cm



整理番号 F-5  
 名称 アミボテ  
 場所 矢島  
 法 量 口部径22cm アミ部長130cm



整理番号 A-30  
 名称 クワツメ  
 場所 大輪  
 法 量 不測



整理番号 A-17  
 名称 クワトリザル  
 場所 大輪  
 法 量 縁外径43cm 深35cm



整理番号 A-18  
 名称 ザマザル  
 場所 大輪  
 法 量 縁外径50.5cm 深56cm



整理番号 E-21  
 名称 オオザマ  
 場所 斗合田  
 法 量 縁外径54.5cm 深59cm



整理番号 A-19  
 名称 ハダカザル  
 場所 大輪  
 法 量 縁外径70.5 深69cm



整理番号 E-1  
名称 ザマ  
場所 斗合田  
法量 縁外径69cm 深54cm



整理番号 D-36  
名称 クワコキ  
場所 下江黒  
法量 不測



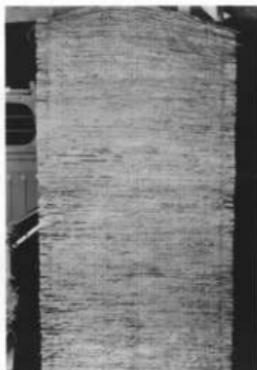
整理番号 D-37  
名称 クワコキ  
場所 下江黒  
法量 不測



整理番号 D-35  
名称 クワキリポウチョウ  
場所 下江黒  
法量 不測



整理番号 A-33  
名称 シチブカゴ  
場所 大輪  
法量 全長135cm 全幅75cm



整理番号 A-32  
名称 コモムシロ  
場所 大輪  
法量



整理番号 G-4  
 名称 クワプレイ  
 場所 須賀  
 法量 直径41.5cm 高さ8cm  
 目大きさ0.7cm前後



整理番号 G-5  
 名称 クワプレイ  
 場所 須賀  
 法量 直径54cm 高さ9cm  
 目大きさ2.5cm前後



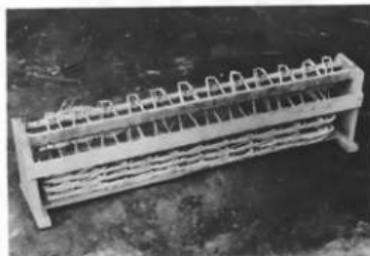
整理番号 A-16  
 名称 クワクレザル  
 場所 大輪  
 法量 縁外径29cm 深20cm



整理番号 A-31  
 名称 オワク  
 場所 大輪  
 法量 奥行73cm 高87cm



整理番号 D-34  
 名称 キバチ  
 場所 下江黒  
 法量 不測



整理番号 A-35  
 名称 マブシオリ  
 場所 大輪  
 法量 全長95cm 全幅22cm  
 高25cm



整理番号 A-34  
名称 ゲンロクカゴ  
場所 大輪  
法量 全長120cm 全幅90cm



整理番号 A-40  
名称 アミ  
場所 大輪  
法量 不測



整理番号 A-29  
名称 ヨウサンヒバチ  
場所 大輪  
法量 外径55cm 高21.5cm

夢見 .....162

よ

夜遊び.....37, 109, 110, 182  
 宵祭り .....123, 271  
 八日ヤキピン .....237, 295  
 糞蚕.....3, 47, 48, 68  
 糞蚕火鉢 .....345  
 幼児葬式 .....231  
 用水.....59  
 用水刈り.....50  
 ヨギ.....13  
 ヨコバイ.....50  
 ヨゴレ飯 .....7, 235, 253, 285  
 ヨシゴ棚.....7, 43, 234, 240, 247  
 ヨシゴムシロ .....297  
 ヨシマシカヤ.....43  
 ヨセド .....104, 138  
 ヨソイギ.....20, 232  
 ヨUSSジ.....76  
 夜爪 .....154  
 四つ辻 .....285  
 予兆 .....147  
 ヨツデアミ .....340, 341  
 夜なべ.....74, 182, 208  
 ヨネマンジュウ.....35  
 夜干し.....24  
 嫁一見 .....211  
 ヨメリギモン.....20  
 嫁が里に帰れる日 .....217  
 嫁のお茶.....215  
 嫁の御年始 .....6, 217, 253  
 嫁のつとめ .....114  
 ヨメノユサン .....6, 53, 73, 196  
   206, 217  
 嫁迎え .....211  
 嫁婿の節句 .....287  
 ヨモギ .....263, 264  
 嫁呼び .....196, 210, 217  
 寄り合い.....92, 169  
 夜のくも .....147  
 ヨロタ .....117

ら

雷電さま .....57, 63, 77  
   124, 264, 268  
 雷電神社.....4, 7, 52, 87, 88  
   98, 161, 167, 334  
 落花生.....87  
 落雷 .....145, 268  
 ラントウバ .....231

り

離縁 .....218  
 リヤカー.....79  
 流木.....46  
 漁師.....68  
 両墓制 .....6, 197  
 隣保班.....89, 105

る

ルス伝 .....273, 277  
 ルスンギョウ .....146, 237  
   277, 293

ろ

ロウソク .....138  
 六道銭 .....225  
 ロッコの団子 .....197

わ

若衆 .....71, 84, 107, 108  
   109, 117, 169  
 ワカイシ .....102  
 若水 .....239  
 ワカモチ .....248  
 ワカレトウバ .....197, 230  
 ワカレネンブツ .....230  
 わかれん .....108  
 ワキドコ .....315  
 綿 .....49, 62  
 渡し賃 .....4  
 渡し場.....76  
 渡し舟.....2, 4, 77  
 ワタダル .....75, 77  
 綿の花 .....248, 250, 251  
 ワタマシ.....44  
 渡り初め.....77  
 ワラクビリ .....200  
 ワラジ .....15, 96, 142, 143  
 わらじかけ.....17  
 ワラットッコ .....259  
 ワラデッポウ .....291  
 ワラナワ .....37  
 ワラ人形 .....151, 231  
 ワリブルイ.....26  
 ワラマブシ .....345  
 ワラミヤ .....140

姿まき……………63  
 妻の品種……………63  
 ムグシ取り……………4, 49, 67  
 婿一言……………211  
 ムコ入り……………6, 108, 196, 211  
 ムコダマシ……………35, 50, 233  
 婿取り……………218  
 ムコドンごもん……………20  
 婿のお客……………218  
 婿の地位……………115  
 虫干し……………24  
 無床掣……………331  
 ムシロボシ……………337  
 ムシロマキ……………60  
 無尽講……………107  
 ムツゴ……………332, 333  
 棟上げ……………154  
 村入り……………91  
 村境……………97, 211  
 村仕事……………83  
 ムラズキアイ……………111, 117  
 ムラシんルイ……………221  
 ムラ総会……………91, 115  
 村組織……………88  
 ムラハチブ……………94  
 村費用……………83, 93  
 ムラの休日……………94  
 村の水利……………86  
 ムラの鎮守様……………123  
 ムラの役職……………91  
 ムラマワリ……………130, 216  
 ムラ役……………91, 93, 115

め

メカイ……………237  
 メカタ……………120  
 メケエ ……225, 246, 260, 294, 343  
 メケエゴ……………157  
 メシが仕事する……………301  
 メシクイバ……………311, 316  
 メシヤキ……………28  
 メハジキ……………197, 228, 229  
 メボ……………47  
 メマシ……………214  
 目なしダルマ……………250  
 目の神様……………131  
 メンコ……………2, 8, 25, 29, 30

も

モグラオイ……………291

モグリ……………49, 301, 330  
 モゾ夢……………162  
 モチ……………312, 313  
 餅甘酒……………294  
 モチダサ……………155  
 餅つき……………33……………296  
 餅の縁起……………116  
 持ち寄せ講……………137  
 餅をつく日……………32  
 モノツクリ……………32, 73, 248  
 モノビ……………238  
 喪服……………20  
 モミマキ祝い……………266  
 モメンボウ……………73, 264  
 股引……………13  
 モモワレ……………21, 22  
 モヤッコ……………173  
 モリッコ……………209  
 モロコシ……………23, 29, 30, 45  
 モロミ……………36, 95  
 モンジャキ……………29  
 紋代……………19  
 モンベ……………14, 17

や

ヤイナリ豆……………26  
 家移り……………44  
 ヤガマ……………43  
 ヤキカガシ……………257  
 焼き座敷……………317  
 ヤキビン ……2, 8, 28, 35, 261, 294  
 八木節……………176  
 焼米……………26  
 ヤキモチ……………28  
 ヤキモチッコ……………118  
 厄落し……………95, 246  
 厄神……………76, 257  
     4, 5, 83, 96, 97, 99  
 厄神除け……………108, 123, 124, 126  
     168, 170, 173, 235  
     264, 266~268, 295  
 薬師様 ……128, 138, 157, 181, 252  
 薬師堂……………128, 129  
 ヤクジン神……………237, 294  
 薬草取り……………268  
 厄年……………196, 214, 219, 220  
 ヤクニワ(役庭)……………168  
 厄逃れ……………220  
 ヤクビ……………94  
 厄除け……………196, 219, 220  
 ヤグラ……………316

ヤケド……………156  
 屋号……………116, 301  
 八坂神社 ……125, 139, 168, 169  
     171, 172, 266  
 野丹猷……………329  
 ヤシキ……………40  
     38, 140, 141, 202  
 屋敷稲荷……………203, 205, 255  
     258~260  
     264, 297  
 屋敷神 ……5, 6, 38, 73, 119  
     122, 140, 149, 216, 257  
     38, 122, 128, 140, 141  
 屋敷鎮守…145, 204, 235, 252  
     258, 259, 289, 298  
 屋敷森……………40  
 ヤス……………343  
 休み祝い……………70  
 安宿……………78  
 屋台……………172  
 ヤド……………95  
 屋根……………43  
 屋根裏……………313, 314  
 ヤネグシ……………4, 83, 93  
 屋根葺……………44, 107  
 屋根棟……………157, 230  
 屋根屋……………150  
 ヤブイリ……………73, 238, 295  
 山芋……………64  
 山入り……………234, 246  
 ヤマオコシ……………339, 340  
 ヤマトツキ……………17  
 山伏……………167  
 山の神……………145, 197, 227  
 ヤリ……………79  
 やんめ送り……………157

ゆ

ユイ……………49  
 結納……………210, 218  
 ユ立……………5  
 祐天上人……………222  
 夕焼け……………160  
 雪かき……………76  
 ユキノシタ……………155  
 湯灌……………224, 311, 312, 315  
 ユサン……………293  
 ユサンビ……………253  
 ユズ……………31, 296  
 湯立て……………4, 82  
 ユダレカケ……………12  
 ユミヒキ……………95





日光脇街道	130
日参	87, 96
ニトバリウス	337
ニナイオケ	327, 335, 338
二の午	260
二〇三高地	21
二百十日	266, 286
二方セガイ	318
二毛作	47
二毛田	49
入家式	211
ニュージュサマ	147
ニヨウ鉢	277
ニワアガリ	7, 237
ニワオキ	69
ニワトコ	248
ニワ休み	68
妊娠祈願	198
ニンバ	172
妊婦の禁忌	199
ぬ	
縫い上げ	23
ね	
ネエトリカゴ	339
ねがや	13
ネゴイ	338
ネコマタギ	111
寝小便	156, 158
ネズツボ	156
ネドコロ	41, 222, 309, 312 315, 317, 318
子の権現様	146, 147
ネブタ流し	272
根太天井	312, 315
根本講	106
ネロハ	237, 295
年忌	111, 230, 231
ネンキモチ	35
年始	239
ネンネコ	10, 12, 172
念仏	5, 100, 122, 128, 130 181, 198, 225, 262
年末の死者	232
年齢集団	5, 84
の	
農業委員	92
農休み	10, 58, 59, 92 110, 267, 272

ノガド(ウ)シ	63, 337
野木様	127, 294
ノコギリガマ	335
のし餅	35
ノタリキウリ	64
ノチザン	201
のっつけかみさん	114
ノッペ汁	116, 245
のこのあぶらげ	229
ノベ	44, 54
野廻り	233, 236, 273, 276
ノメッチロ	116
野良着	17, 48

は

梅香講	264
ハイダス	62
歯痛	156
墓掃除	108, 272
バカツキ馬	71
墓直し	197, 228, 229
バカボ	47
墓参し	223, 229, 231
ハガマ	335
袴着の祝い	292
掃き立て	68, 70, 343
博奕	109, 138
馬喰	70, 71, 164
ハコ植え	57
バコツ	155
箱膳	25
箱枕	102
箱棟	314
八朔	20, 217, 218, 287
八朔の節供	73, 115
抜歯	157
ハシカ	155, 158
機神さま	205
機参り	6, 195, 205, 206
馬車	44, 70, 78, 79
ハシンコ	260
ハズアミ	342
運の葉	285
ハッセンヨメゴ	218
機織り	3, 22, 48, 71, 74 102, 110, 131, 209
機織唄	176
ハタオリサマ	72
ハダカザル	344
機神様	72, 144

ハタケノサシミ	100
ハダッコ	208
旗じまい	265
ハタナエ	56
ハタバ	312, 313, 316, 317
ハタヘエウマ	71
バツタン	72, 110
ハツタンコロガシ	334, 335
機屋	117
ハタヤマワリ	72
働きばん	197, 223
八端	9
蜂さされ	156
八十八歳の祝い	221
八十八夜	56, 69, 94, 264
バチ竹	228
蜂の巣	159
八幡様	140, 141, 145, 258, 259
八丁ジメ	127, 144, 145 238, 248, 297
初市	80, 248, 250 5, 24, 33, 73, 122, 140
初午	141, 142, 144, 150, 161 235, 258, 259, 260
初エビス	254
二十日正月	73, 217, 235 251, 255
ハツグリ	130
初正月	206
初節供	207, 262, 265
初誕生	207
初荷	80
初参り	239
初山	123, 235, 265
初山着	207, 265
初山まいり	207
馬頭観音堂	129
ハトコ	120
ハナ	248
ハナカキナタ	250
ハナギ	250
花ごしらえ	168, 266
ハナドリ	331
花まつり	263
ハナムスビ	14
ハナレダンジ	119
花分け	99, 170
羽生団子	69
羽根蟻	159
ハネダイ	345
雁巾	12

天神様 .....255, 263, 266  
 天神やっこ .....208  
 天道様 .....200  
     55, 85, 95, 98, 99  
 天王様 .....109, 125, 140, 147  
     155, 162, 266  
 てんびん .....79  
 天満宮 .....91, 95

と

トアミ .....340, 343  
 トウガミ大尽 .....116  
 十日夜 .....198, 233, 237, 255, 291  
 道具づくり .....111  
 トウグワ .....340  
 冬至 .....103, 238, 256, 296  
 冬至ベッカ .....83, 100, 238, 296  
 冬至ユズ .....258  
 トウジン .....12  
 トウジンコ .....10, 18  
 ドウス .....337  
 道祖神 .....5, 6, 122, 139, 211  
 道中笛 .....170  
 トウナス .....28  
 盗難よけ .....106, 162  
 トウニスズウ .....104, 137  
 ドウノノコ .....18  
 ドウバッコ .....207  
 ドウバン .....4, 82, 91, 105, 111  
     197, 223, 227  
 トウミ .....336, 337, 339  
 灯笼 .....126  
 ドウロク神 .....142, 196, 219  
 トーミカケ .....174  
 トウボウシ .....47, 50, 60  
 ドカゴ .....342  
 トカキボウ .....339  
 とぎ水 .....37  
 毒消し売り .....80, 85  
 ドクダミ .....13  
 トコアゲ .....206  
 トコ裏 .....313, 314  
 ドコショイ節 .....178  
     197, 199, 223  
 とこほり .....227~229  
 土左衛門 .....232  
 年祝 .....19  
 年男 .....238, 257  
 年神 .....297  
     26, 52, 238, 251  
 歳神様 .....255~257, 260  
     295, 296, 298

年神棚 .....234, 236, 238, 239  
     247, 248, 250, 297  
 年越 .....116, 141, 241, 257, 296  
 年取り .....217, 255, 256  
 年まわり .....214  
 ドジョウアミ .....341  
 ドジョウウケ .....342  
 ドショウバサミ .....67  
 渡船場 .....77  
 ドハイタ .....42  
 土羽打ち唄 .....175  
 土橋 .....93  
 扉番 .....94  
 ドブッタ .....49, 61, 79, 330  
     333, 335, 339  
 ドブロク .....36  
     41, 201, 202, 211  
 トボグチ .....212, 228, 253, 256  
     313~315  
 トボサカツキ .....212  
 土間 .....317  
 土まんじゅう .....277  
 トモ .....13  
 友引 .....222  
 土用 .....149, 268  
 寅年 .....214  
 とらばさみ .....68  
 寅の日 .....63, 96, 98  
 トリアゲバアサン .....6, 195, 201  
 鳥居 .....226  
 トリムスビ .....213  
 ドン .....299  
 トンビ .....340  
 トンビノハネ .....210  
 どんぶぐき .....302  
 問屋場 .....75  
 香竜さん .....79  
 香竜坊主 .....208

な

ナエシロ .....56, 329  
 苗代作り .....94  
 苗取り .....56, 74, 339  
 ナエバワラ .....57  
 ナエホグシ .....54  
 ナエマ .....155, 339  
 ナオライ .....127  
 名替え .....208  
 長着 .....9  
 ナカグリ .....130  
 ナカズミ柱 .....313, 317, 321

長袖 .....19  
 仲立人 .....47  
 中野餅 .....3, 22, 48, 71  
 ナカノクンチ .....125, 126  
     141, 289  
 ナガヤ .....38  
     5, 84, 88, 95, 98, 100  
     105, 107, 109, 116  
 長良神社 .....122~124, 127, 142  
     154, 168, 172, 789  
     290  
 流れケンジョウ .....230  
 投げ銭 .....226  
 ナゴ .....113  
 仲人 .....60, 209, 210, 215, 216  
 ナスガラ .....298  
 ナスの馬 .....280, 285  
 夏まつり .....73, 99  
 七草ガユ .....234, 246, 247  
 七草採り .....246  
 七歳児 .....208  
 七つのお祝 .....19  
 七つ休み .....25  
 ナナデンボウ .....210  
 名主 .....318  
 七日がえり .....150  
 七日膳 .....197, 229  
 ナビロメマメ .....216  
 ナベカリ .....6, 196, 217, 234  
 ナベズミ .....37  
 ナヤ .....38  
 ナラシクワ .....332  
 なにつくら .....65  
 ナレアイ .....209  
 なわ帯 .....148  
 縄ない機 .....75  
 ナワバリ植 .....57  
 縄ホコ .....44  
 難産 .....199  
     41, 115, 200, 212  
 ナンド .....213, 222, 224, 306  
     308, 309~313, 315

に

ニアガリ .....53, 115, 293  
 ニガラッチ .....29  
 荷車 .....79  
 ニコミ .....25, 29  
 煮ころがし .....27  
 ニシカゼ .....160  
 二十三夜 .....6, 102, 195  
 ニッカシ .....224, 225

竹ホコ	44	タンメン	28	土干し	173
タコ	42			土ポッチ	278
タコスリ	55, 334, 335	ち		筒袖	19
タコ揚ぎ	175, 176	地下足袋	17	続き座敷	312, 315
山車	125, 127, 266	力石	109, 182	ツツキリ	331
田洗	58	かくらべ	110	ツトッコ	260
墮胎	209	チカラ廻	202	ツナミ	160
タチガラ	37	チカラゴメ	203	ツバメ	159
タチモグラ	159	力試し	110, 163	ツブテ	55, 332, 333
駄賃道	76	力販	225	ツブラッコシ	56
脱穀	59	地ぎょうづき	42	潰れ屋敷	116, 118
竜柱	43	デゴクソバ	155	爪掛	15
竜巻	140	地縞	17, 18	ツマカワ	15
タツミ井戸	149	地神	106	ツミタ	3, 47, 54
タツミカイド	37	乳親	113	つめりっこ	25
タテジ	344	乳づけ	202	通夜	312
タテゼン	26, 153	血ぶく	105, 137, 206	ツラガケ	264
たて俵	60	乳房の地蔵様	129	吊り天井	41
館林餅	71	デムグリ	144	ツレアイ	211
館林ニンバ	172	チャソツベ	28		
館林姿	63	チャノマ	41	て	
タテ番	126	チャンチャンコ	221	デイト	117
建前	42	中気の神様	147	堤防工事の頃	175
たなあげ	230	チュウザ	211	手打ちうどん	29
棚鯛い	70, 345	中宿	196, 211	41, 206, 211, 212, 213	
七夕	73, 160, 217, 236 269, 271, 272	中老	107, 109, 110	デエ	225, 309~311, 313 315~317
棚経	278	チョイチョイギ	18, 232	デエ表	307, 308
田螺	31	提灯船	127	デエドコロ	311, 313
タネ銭	292	調味料	36	デオクレ	218
タネマキキ	333	チョウナ	309, 317	出買い	80
種粃	55	チリカラ	177	手打ち	27
タネ屋	70	鎮守様	87, 97, 216	出カワリ	237, 295
田の草取り	24	賃バタ	3, 48, 71, 22 72, 110, 114	テッコウ	12, 17
田の雑草	65			でばり	148
タノミノゲン	218	つ		出不足	93
旅芸人	182	つきあい	118	手間返し	74
タビハソソ	15	ツギアテ	23	テマツカリ	49, 173
タブネ	38, 57, 61, 79, 335	月傘	160	テマツカワリ	43, 107
タボッコシ	333	付書院	318	テママワシ仕事	55
魂呼び	196, 221	月念仏	100	出水	86
タメシ	214	月待ち	131	テモッコ	79
タメヒキ	338	ツゲ	197, 224	デモドリ	218
タルイレ	210	つけ木	111	寺世話人	91
樽肥	75	ツケヒモ	19	寺の年始	246
タルバンタタキ	177	ツジ米	293	デワカレのイトコ	121
タレッコ	23	ツジダンゴ	293	天狗様	106, 167
俵神様	234, 247	辻廻り	170	天狗の面	96
短冊作り	328, 329	辻ろう	76, 197, 226	デンジグワ	330
誕生餅	207	ツチイレ	333	天神講	84, 107, 256



サナブリ	32, 51, 266	獅子	83	しゃっくり	156, 157
佐貫荘	125	シシ洗い	168	社寺総代	91, 128
サマ	307, 308, 310	獅子頭	123	シャタイ	113
ざま	79, 115	獅子つくり	168	社日	107, 262, 263, 280, 288
ザマ籠	140	獅子舞	7, 99, 165, 166	砂利ひき	109
ザマザル	343, 344	獅子宿	170	チャンボン	222, 229, 338
ザルコロガシ	197, 225	四十九日	111, 229, 230	十王様	128, 140, 235~237 253, 275, 285
猿田彦大神	103	四十九の団子	196, 223, 229	祝儀料理	215
申の日	150, 155	四十九の餅	198, 233	祝儀見舞	216
サルッピ	160	地震	102~105, 137 138, 147, 161	十九夜	5, 6, 101, 122, 130 131, 195, 199
三月ゴボウ	65	私生児	114	十五日がゆ	253
三月節供	261	地藏堂	85	十五夜	64, 287
三山講	84, 106	下着	18	十三仏	100, 273
ザンザ	177	シタケ	160	十三夜	64, 255, 288
三三九度	211	シタネドコロ	41	出棺	197, 225
三山の遊び	92, 106	シタノザシキ	315, 320	出産祝い	265
蚕室	69	シタベンジョ	316	十二講	107
産泰講	102, 198	下前下り	153	十二社権現	147
産泰信仰	5, 195	シチブ	70	十四日念仏	100, 130, 180
さんた節	177	シチブカゴ	344, 345	十八日がゆ	254
さんだわら	96, 207, 225, 229	シツキリカンジョウ	58	十六日念仏	100
三人葬式	151	シツケ糸	148, 153	十六マユ玉	235
三年味噌	35, 301	七五三	292	主食	2, 26
山王様	124, 158	濯田	3, 335	襦袢	17, 18
産妻稲荷	144	ジナラシ	332	狩猟	68
三把稲	57	死装束	225	ショイハンゴ	79
三百中人	210	シニツカイ	197, 224	ショウガ	139
産婦の食事	25, 203	シノゴヤ	38	常会	93
産部屋	200	シノビ銭	225	正月飾り	264
三本辻	76, 157, 164, 207, 208 222, 229, 280, 284	ジバエ	115	正月様	240
サンボンマンノウ	339	師走八日	294	正月三ケ日	312, 313, 316
三夜様	255	シノバキ	93	正月棚	235, 255, 258
三夜待ち	131	シビトバシ	59	正月のくり越	59
三隣亡	150, 161	四方張り	225	正月の食事	32
		四方門	227	小黒柱	247, 307, 309, 310 312, 313, 317, 321
		シボク	137	ショウシマング	331
		しぼり染	23	桑桑育	344
		シホンマンノウ	329	上臈	68, 69, 266, 345
		終い正月	235	定使い	4, 82, 84, 88, 92 94, 262, 266, 286
		島田マダ	21	上棟式	178
		シマダマブシ	345	ショウブ	264, 265
		シマ苗	56	ジョウミズダ	335
		ジミズ	38, 87	青面金剛	103
		しめえ節供	73, 115	ジョウヤサマ	60
		シメ飾り	297	精霊様	232, 236, 275, 276
		シメグンチ	140	精霊迎え	277
		シメナワ	37, 268	常例	93
		シメリノ祝い	82		
		シモウサマンノウ	329		

し

ジオウガユ	235				
塩釜様	199				
四月ゴボウ	150				
ジカマキ	54, 333				
仕着せ	10, 115				
仕事を休日	72				
仕事始め	234, 245				
四角うけ	342				
式台	318				
シキモン	296				
地獄絵	285				
仕事着	17				
私財	112				

ケエバ切り	265
ケゴ	68
ゲコウ祝い	105
ケタ	3, 47, 56
結婚	209, 214
結婚式	178, 212, 313
月食	161
毛羽とり	69
ケブッチ	50
下屋	306, 313, 314
下老	109
ケンチン汁	27, 53, 116, 254 255, 292, 296
ゲンノショウコ	155
元老	109
ゲンロクカゴ	328, 345

こ

ゴウキ	342
ゴウグラ	44
講東団	5, 83
庚申講	102, 122, 137, 138
庚申様	102, 103, 137, 293
庚申様の誕生日	83
庚申様ノエセド	102
庚申ツツジ	103
庚申箸	138
庚申待	102, 105, 138, 161
荒神様	203
洪水	5, 81, 86
コウセン	63, 292
	4, 42, 55, 82, 84, 85 88~96, 98, 100~103
コウチ	105, 107, 108, 111, 118 119, 123, 130, 142~144 169, 172, 182, 252
コウチの神	85, 127
講中	91
コウデ	157, 200
香奠	111, 118
コエビ	32
弘法大師	139
糞屋	313
蚕影さん	145
五月節供	264
右桶	220
ゴキタタキ	153
コクオシ	336
コクソ	345
ゴクスケ	53
ゴク休み	154

コクヨセ	336
コグワ	330
コケコ	55
五合餅	102
五穀豊饒	278
コゴメ	36, 114
コザ	212
ござ	234
コサ切り	109, 142
小作料	60
ゴザミノ	9
興がかり	225
コシカタ	225
こしきだおし	261
コシキリバンテン	10, 17
コシボテ	343
腰巻	18, 162
コシミズ	41
ご祝儀	35
五十五の団子	6, 196, 219 237, 293
互助組織	82
ゴショ縄	228
ゴジョハン	24, 25, 27, 37
ゴジル	30
ゴゼ	182
五節供	115
子育観音	130
子育地藏	129
伍長	89, 91, 119
小使い	94
コデ縄	293
コト始メ	237, 245, 294
コトビ	26, 266, 294
子どもの遊び	183
コト八日	260, 294
五人組	48
コノメ	69
コバンカゴ	209
コビマチ	122, 140, 141 237, 289
ゴフ	128
ゴブ	158
ごぶ観音	198
ゴヘイ	252
ゴマルキ	44
込栓	320
コミヤマツリ	122, 289
小妻まんじゅう	88, 267
小妻わら	44

コメツキ	36
米のイトコ	120
コモノ	37
コモムシロ	344
子守り	116, 209
コヤシザル	280, 338
ゴリョウ様	289
ゴロ	12
婚姻圖	214
権現様	147
今晚提灯	277
金毘羅様	258
婚約	196

さ

裁縫	23
祭文	182
サオコシ	2
サカサオケ	338
サカサ縄	96
酒樽	96
サギ足	183
サキガケ	329
さく入れ	234, 247
作神様	103, 105, 122 137, 234, 248
サクギリグワ	327~330 333, 339
作物禁忌	155
サゲ穂	52
ササラ獅子舞	144
ササイリ	238, 295
ササガカリ	168
笹の葉の露	272
ササラ	52, 123, 127, 268
ササラハン	123
坐産	6, 195, 200
差鴨	308
差鴨店	317
サシガヤ	107
ザシキ	41, 115, 206, 309, 310 311, 313, 315, 317, 318
ザシキ表	307
サシッコ	99
サシ番	96~100, 143
サシメシ	168, 170
里芋	64, 285, 289, 297
座頭	25
里帰り	23, 73, 196, 216, 217, 253
サナ	63, 336
サナブチ	173

釜神様	51, 146, 290, 297	眼病	157	クサ	157
カマクド	149, 312, 313, 320	願ほどし	222	クサカキ	327, 334
カマツク	7, 161, 236, 269	還暦	220	草刈り	74, 94
かまど	3, 8, 40, 41, 45 119, 224, 313, 314			草刈籠	280, 336
カマド神	146, 203	き		草ばくち	183
カマノクチアケ	7, 236	紙團	266	くされ彼岸	262
カマ柱	309, 310	キジリ	312	くさわけ	84
カマノフタ	146	北雷	160	グシマツリ	44
髪洗い	216	きたなり	57	グシモチ	44, 154
上阿観音	261	キタノザシキ	313, 316	くずまゆ	23
神送り	290	キタノマ	310, 311, 312 315, 317	クズ屋	43, 258
神かくし	222	北枕	149	蕪売り	80, 86
カミゴカ	316	気動船	2	グダリアミ	341
カミゴヤ	314	キナコボタモチ	215	クチガタメ	210, 214, 215
カミザシキ	318	杵	212	クチナシ	23
神棚	41	キバチ	345	区長	89, 92
かみなりよけ	147, 161	キミ	27, 33	クネ	160
神迎え	294	義務人足	94	熊手殿	339
カメ棺	227	鬼門除け	103	クミアイ	90, 91, 118
蚊帳	13	逆縁	218	組頭	318
宣講	107	キャクマ	115	クラ	316, 322
カヤ場	43, 44, 340	脚絆	12	クライボシ	203
カヤブキ屋根	43	救荒食物	31	倉開き	248
萱無尽	84	旧正月	234	クルリ棒	7, 173
カユカキ棒	253	給桑台	336	幕市	296
からうす	36	休泊堀	86	幕勘定	80
カラウト	13	キュウリ	98, 126, 158, 280	クロ	56
ガラスウケ	342	キョウソ	69	クロッキ	331
カラス鳴き	147, 221	共同飲食	81	クロつくり	328
カラミコスリ	33	共同墓地	119, 231	黒無垢	20
カラムギメシ	2, 9	ギョウバン様	91	欺入れ	63, 73, 238, 247
空屋敷	118	キヨビキ	63	クワイレサマ	7, 247, 248, 297
家例	239, 241	清め	228	クワイレ松	234, 248
川さらえ	50	きりおり	22	桑鎌	161
川流れ	87, 232	キリコ	278	クワイレザル	344
カワラケ	276, 285, 286	キリップ	294	クワユキ	344
換気窓	316	ギリヒトオリ	111	歇立て	247
カンキョ様	299	キレシヨ	3, 47, 54	桑つみ	68
換金作物	2	キレバ	111	クワツメ	343
冠婚葬祭	106, 309, 311	禁忌作物	65	クワデ	45
甘藷	36	近所廻り	216	クワトリカゴ	343
カンズメ	335			クワバラウナイ	329
カンテラ	86	く		クワバラマンノウ	329, 334
カンナ	309, 317	杭打ち唄	175	クワブルー	344
神無月	40, 290	クイゾメ	6, 206	クワボウチョウ	344
カンノ虫	158	クグ	43, 44	クンチナス	33
観音様	94	クグリ	316		
観音堂	85			け	
早魃	82			ケエド	76

おちかづき	215	母屋普清	111	柿餅	292
オチツキ	211, 215	オモンジュサマ	144	角塔婆	278, 279
オチツキボタモチ	213, 215	親子盃	213	神楽獅子	97, 98
オチョッポ	205	オヤ田	266	かくらん	158
お通夜	223, 311, 315	親の子餅	196	カケバナ	7, 235, 255, 292
おてんこもり	254	オ山ノボリ	265	カゲの儀	28
オテントラ牡丹餅	114	オヤモト	262	カケン	35
オテントウサマ	296	おや薬師	115	火災除け	97
オトウカ	148	織姫様	144	笠置様(オカサキ)	95
男仲人	315	オルスイ様	240	重ね着	18
男の節句	73	お礼ササラ	168	笠鉾	126, 171
オトモ	210	オレグリ	4, 7, 83, 96, 98, 130	飾り団子	197
オナベ	293, 257	オロシ(下屋)	271, 292	飾り墓地	231
オナメ	36	オンギョク	105, 182	河岸	77
オナメミソ	87	オンジ	114	火事	162
オニ	197, 227	御岳講	107	貸売り	80
オニオロシ	33, 141, 258 259, 260	女一見	196, 216	柏もち	32, 265
鬼神様	257	嫁の年始	217	家族の私財	116
オニダマ	235, 251, 252	女天王様	126	カタアゲ	23
鬼っ子	207	女中人	215, 315	片祝い	207
オニノキンバ	26	女の口あけ	164	カタツケエシ	329, 331
鬼の尻	295	女の仕事	74	経帷子	225
鬼の豆	260	女の節句	73	片見月	288
鬼よけ	294	オンボヤキ	252	カタモチ	25, 30, 36
オネリ	170, 263			カチマンガ	332
オハグロ	22, 216			カツカキ	49, 68
オバンシ	25			カッパ	9, 151, 286, 300
オヒチヤ	203, 205	蚕祝い	266		7, 232, 234, 236
おびとき	19, 141, 292	蚕神	68, 69	カツモ	269, 271, 272, 273 275, 280, 297
オヒナタ	237, 294	蚕かご	70	カテメシ	26, 27
オヒネリ	267	蚕棚	344	家伝薬	156
オヒマチ	4, 85, 100, 122 125, 127, 141, 289	蚕日履	74	カドグチ	257, 278
オビヤ	6, 199, 203, 205	回転マブシ	345	カドバン	130, 144
お百度詣り	221	カイドウ	37, 211, 212, 257, 285	カド火	277
お札ワケ	106	カイドウ盆	237	門松	37, 297
オフレ	286	カイバ	285	金銀	329
オベッカ	4, 83, 95	改良マンノウ	329, 330	カナババ	202
オヘメリギモン	19	かえる	291	火難除け	106, 260
オヘヤ様	146	カエル除け	51	鉦	273
オヘヤマイリ	204	顔見せ	214	カネツケ	22
オボギ	19	カガシ	61, 256	カネのワラジ	146
オボケ	205	カガスリ	18	カタビロ餅	32, 294
オボヤケ	25	カカリゴ	118	歌舞伎	85, 182
オマチニョウボ	213	懸仏	122	かぶせつつぎ	23
オミタマ様	235, 239, 240, 251	カキアガリ	332	カブツギレ	12
オミヤマイリ	19, 205	ガキサマ	276	兜作り	315, 316
オムスビ	27	書初め	245	カブマジョソウキ	335
表座敷	273	カギツルシ	41, 154, 162 253, 312	カマアガリ	7, 52, 53, 146 237, 255
		ガキドウ	276	かまいたち	161
		ガキドンサマ	236, 275		

一夜餅……………296,297  
 イリカワ……………318  
 入屋履……………149  
 ……3,8,40,41,45,146  
 イロリ…149,154,205,239,312  
 ……313,314,316,320  
 イワシ……………256  
 いわしもの……………148  
 岩船地蔵……………129,233  
 隠居……………118,119

う

ウエタ……………54  
 ウキナエ……………57  
 ウケ……………342  
 牛……………79  
 ウジガミ……………123,142  
 ウシトラ風……………160  
 臼かつぎ……………110  
 ウタイゾメ……………107,108,245  
 ウダツ……………255  
 ウチレ……………30,33,245  
 うちわ……………265  
 ウデヌキ……………12  
 ウドンエンギ……………116,316  
 うどん家例……………245  
 ウナイオコシ……………329,330,331  
 ウナギ……………140,341  
 ウネタテ……………328,330  
 卯の日……………155,238,240  
 ウブギ……………19,202,205  
 ウブタテメシ……………195,202  
 産湯……………201  
 馬……………70,79  
 馬入れ道……………76  
 ウマステバ……………202,224  
 馬のわらじ……………96  
 ウマヤ……………71,312,315,320  
 馬廐肥……………71,254,286  
 生まれかわり……………151,232  
 ウラエンガワ……………311  
 ウラザサラ……………124  
 ウラザシキ……………318  
 占い……………147  
 ウロコ帯……………219  
 運の虫……………68  
 運搬……………74,78  
 運送車……………79

え

疫病神……………272  
 エダ……………45  
 江戸樓……………20  
 エナ……………201  
 エバ……………9,19  
 エビス講……………7,52,235,237  
 ……254,255,290,292  
 エビス様……………237,257,293,298  
 エビス膳……………292  
 エビ大根……………31  
 エビラ……………275  
 エボ……………156,158  
 縁位は一代……………118  
 エンガ……………49,330  
 エンガワ……………315  
 エンガワノフチモチバシラ 321  
 縁起……………241  
 縁切り稲荷……………218  
 えんのイトコ……………120

お

オオアンネ……………113  
 大絵馬……………339  
 オオガ……………327,329,331  
 オオガケ……………12  
 往還……………277  
 オオグイ……………302  
 オオサガ……………37,78  
 オオザマ……………34  
 オオダメ……………338  
 大戸……………314,316  
 大名主……………318  
 オオバン……………35  
 大判の餅……………217,239,253  
 大引天井……………314,315  
 大晦日……………116,238,298  
 オオモッコ……………79  
 大島餅……………3,72  
 大ドウバン……………111  
 大本家……………119  
 お蚤勘定……………80  
 オカタ……………49  
 オカッテ……………311,313,314  
 陸稲……………3,47,64,88  
 お飾りカエ……………248  
 オカブリ……………60  
 オカマゲエロ……………151

6,146,195,202  
 おかまさま ……237,257,266  
 ……290,293,297  
 ……7,33,53,73  
 オカマノダンゴ ……112,114,146  
 ……237,290,293  
 オガラ……………233,275,285  
 オキ……………45  
 オッキリコミ……………29  
 おくがや……………13  
 オクザシキ……………320  
 オクノマ……………41  
 オクミアイ……………111  
 オクリ……………222  
 オクリ麦……………105  
 送り火……………284,285  
 送り盆……………273  
 オクワ……………345  
 オクンチ……………5,122,123  
 オケイハク重箱……………115,196  
 オケイハクボタ餅 114,237,287  
 おけはく……………217  
 オケラ……………159  
 オコアゲ……………68  
 オコシ……………221  
 オコト……………110,287,294  
 おこもち……………32  
 オコモリ……………100,198  
 オサキトウカ……………148  
 オサゴ……………101,130,131,146  
 ……203,204,247  
 オサズケ……………233  
 お産……………315  
 お産神様……………85,124  
 お産見舞……………202  
 オシー……………30  
 お七夜…6,19,146,195,200,201  
 オシムギ……………26  
 オシメ……………13  
 オシメリ祝い……………4,83,88,94  
 ……160,266  
 オシヨウコ竹……………44  
 オシヨウジン……………4  
 お相伴……………213,214,215  
 オシラキ……………42,240,241  
 ……271,293,298  
 お節供……………36  
 お供え……………32,102  
 オタキアゲ……………7,143,235,252  
 お棚探し……………234,241,246  
 お棚参り……………278  
 オダレ…307,310,315,321,322

# 索 引

<p>あ</p> <p>藍……………23</p> <p>合い打ち……………174</p> <p>アイガメオキバ……………313</p> <p>赤城おろし……………160</p> <p>あかぎれ……………156</p> <p>アカネ米……………60</p> <p>アグリハナ……………313, 316, 345</p> <p>秋入れ……………63</p> <p>秋サバ……………300</p> <p>秋なす……………148, 301</p> <p>秋祭り……………100, 289</p> <p>あぐたらし……………301</p> <p>アクト……………3, 47, 53</p> <p>悪魔除け……………171, 182, 257, 264</p> <p>アゲザク……………63, 328</p> <p>アゲフネ……………2, 38, 82, 87 311, 312, 322</p> <p>朝雨……………300</p> <p>朝エビス……………255</p> <p>朝蜘蛛……………147, 164, 300</p> <p>朝そば……………245</p> <p>朝茶……………300</p> <p>朝虹……………160</p> <p>麻の葉……………19, 202</p> <p>朝焼け……………160</p> <p>朝湯……………239</p> <p>足洗い水……………277</p> <p>足入れ……………6, 196, 214, 215</p> <p>足利銘仙……………71</p> <p>アシガラ……………273</p> <p>アシッカアセ……………41</p> <p>足の神様……………123, 142, 143, 147</p> <p>足の病気……………143</p> <p>足踏脱穀機……………336</p> <p>アズキガユ……………148, 252, 253</p> <p>小豆飯……………138</p> <p>アスピ……………84, 263</p> <p>アスピ日……………94</p> <p>アゼツクリ……………328</p> <p>畦取り……………49, 331</p> <p>あだ名……………37, 302</p> <p>愛宕様……………26</p> <p>愛宕神様……………168</p> <p>アタマアライ……………216</p> <p>あたり日……………103, 104, 137</p>	<p>あつけ……………148</p> <p>あと念仏……………225</p> <p>穴ツップサグ……………293</p> <p>穴掘り……………111</p> <p>穴まわり……………225, 226</p> <p>姉さん女房……………300</p> <p>油しぼり……………36</p> <p>あぶらげ……………229</p> <p>油から……………33</p> <p>雨蛙……………159</p> <p>雨乞い……………7, 52, 82, 87, 99 145, 167, 266</p> <p>甘酒……………36</p> <p>甘茶……………263</p> <p>雨降り正月……………59</p> <p>アミ……………345</p> <p>網漁用具……………328</p> <p>阿弥陀様……………98</p> <p>アミボテ……………343</p> <p>アラッカキ……………332</p> <p>アラヌカ……………337</p> <p>新盆……………20, 129, 233, 269 273, 278, 279, 292</p> <p>粟島様……………19, 199, 206, 297</p> <p>粟島神社……………123</p> <p>粟穂……………116</p> <p>アワモチ……………33</p> <p>安産祈願……………131, 198</p> <p>安産信仰……………5</p> <p>安産の神……………146</p> <p>アンジキ……………224</p> <p>行燈……………172, 273</p>	<p>伊勢曆……………161</p> <p>伊勢参り……………77, 79</p> <p>居候……………301</p> <p>板倉ザッコ……………255</p> <p>板外し……………77</p> <p>板張床……………307, 313</p> <p>イチゲン……………20, 42, 211, 212, 213 214, 215, 315</p> <p>いちどなり……………119</p> <p>一人前……………73, 75, 163, 231</p> <p>イチバングサ……………334</p> <p>イチマキ……………118</p> <p>イチョウツバ……………56, 329, 340</p> <p>イチョウガエシ……………21</p> <p>厳島神社……………122, 126</p> <p>イッケ……………112, 118, 230</p> <p>イッケの神……………237, 289</p> <p>一室住居……………306</p> <p>一升樹……………35, 218, 247</p> <p>一升餅……………207</p> <p>イットマス……………339</p> <p>一杯ダンゴ……………30</p> <p>一杯茶……………233</p> <p>一杯飯……………25, 153</p> <p>一方セガイ……………318</p> <p>井戸……………42, 264</p> <p>井戸神様……………42, 146, 203, 205, 257</p> <p>イトゴ……………120, 214</p> <p>イナゴ……………32</p> <p>稲荷様……………85, 95, 140 145, 203, 258</p> <p>イヌイの井戸……………149</p> <p>戌の日……………150, 155</p> <p>稲刈り……………74, 146</p> <p>稲の品種……………55</p> <p>折りくぎ……………147</p> <p>位牌……………119, 275</p> <p>いぼ地蔵……………129</p> <p>今宮権現……………147</p> <p>忌詞……………150, 164</p> <p>忌み屋……………200</p> <p>イモ……………27, 28, 31</p> <p>イモチ……………118, 119</p> <p>イモの葉……………269, 273, 284</p> <p>芋祭り……………3, 4, 48, 83, 95, 253</p> <p>イモリ……………163</p> <p>一夜かぎり……………298</p>
---	---	--

## い

<p>家かつぎ……………92</p> <p>家ごとの禁忌……………116</p> <p>家の神……………145</p> <p>生きグネ……………38</p> <p>イキトウバ……………197, 229, 230</p> <p>イゴ草……………3, 64</p> <p>イゴミ……………87</p> <p>石タコ……………42</p> <p>石ほとけ……………231</p> <p>イス……………338</p> <p>衣生活のしつけ……………153</p> <p>伊勢音頭……………178</p> <p>伊勢講……………84, 91, 105</p>	<p>伊勢曆……………161</p> <p>伊勢参り……………77, 79</p> <p>居候……………301</p> <p>板倉ザッコ……………255</p> <p>板外し……………77</p> <p>板張床……………307, 313</p> <p>イチゲン……………20, 42, 211, 212, 213 214, 215, 315</p> <p>いちどなり……………119</p> <p>一人前……………73, 75, 163, 231</p> <p>イチバングサ……………334</p> <p>イチマキ……………118</p> <p>イチョウツバ……………56, 329, 340</p> <p>イチョウガエシ……………21</p> <p>厳島神社……………122, 126</p> <p>イッケ……………112, 118, 230</p> <p>イッケの神……………237, 289</p> <p>一室住居……………306</p> <p>一升樹……………35, 218, 247</p> <p>一升餅……………207</p> <p>イットマス……………339</p> <p>一杯ダンゴ……………30</p> <p>一杯茶……………233</p> <p>一杯飯……………25, 153</p> <p>一方セガイ……………318</p> <p>井戸……………42, 264</p> <p>井戸神様……………42, 146, 203, 205, 257</p> <p>イトゴ……………120, 214</p> <p>イナゴ……………32</p> <p>稲荷様……………85, 95, 140 145, 203, 258</p> <p>イヌイの井戸……………149</p> <p>戌の日……………150, 155</p> <p>稲刈り……………74, 146</p> <p>稲の品種……………55</p> <p>折りくぎ……………147</p> <p>位牌……………119, 275</p> <p>いぼ地蔵……………129</p> <p>今宮権現……………147</p> <p>忌詞……………150, 164</p> <p>忌み屋……………200</p> <p>イモ……………27, 28, 31</p> <p>イモチ……………118, 119</p> <p>イモの葉……………269, 273, 284</p> <p>芋祭り……………3, 4, 48, 83, 95, 253</p> <p>イモリ……………163</p> <p>一夜かぎり……………298</p>
--	--

群馬県民俗調査報告書第二十四集

## 明和村の民俗

昭和五十七年三月二十八日印刷  
昭和五十七年三月三十日発行  
(非売品)

編集発行 群馬県教育委員会

前橋市大手町一丁目一番二号

電話 027(2)1111

印刷所 朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町六七番地

電話 027(2)1111